近世欧羅巴植民史

一

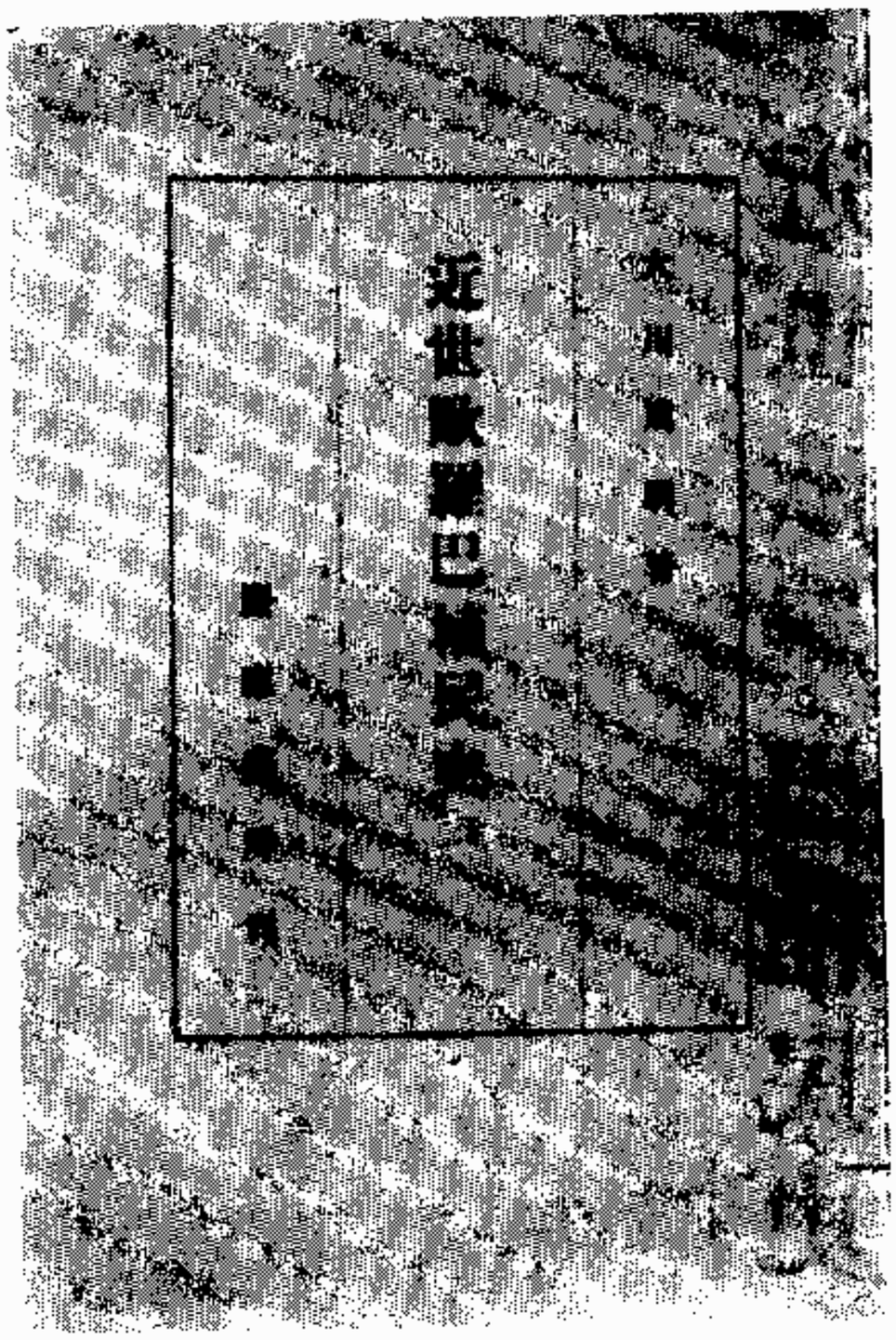
〔解説〕

一、大川博士は五、一五事件（昭和七年）に連座して叛乱罪・禁錮五年の判決（昭和十年十月二十四日）をうけ、一年十ケ月を豊多摩刑務所に服役された（本全集第一巻大川周明略伝（二一九頁）。『近世欧羅巴植民史』はその獄中に於ける博士の研究成果である。

原稿は百二十頁綴ノート四十冊よりなる尨大なもので（本全集第一巻「安楽の門」七二九頁）、博士はこれを㈠『欧羅巴植民史(1)(2)(3)』、㈡『植民史翻訳書』、の二部門に分けて仮製本し保存されている。

一、出獄後博士はこの原稿を菊版四冊に纒めて刊行する意図のもとに（本全集第五巻序文）、その第一巻として、ノート『欧羅巴植民史』㈠のうち近世初期の植民に関する部分を整理して新らたに原稿用紙に書きおろし、『近世欧羅巴植民史』（昭和十六年十月・慶応書房（岩崎徹太）刊・菊版六〇〇頁）を刊行されたが、それに続く第二巻以下は未整理のままに筐底に蔵されてきた。

一、本全集には右の既刊書と共に、そのノート『欧羅巴植民史』の未発表部分及びノート『植民史翻訳書』を収録した。



編集にあたって、既刊書を含めた全原稿を次のように三篇に分けた。

第一篇―『近世欧羅巴植民史㈠』

（内容）近世初期（第十五世紀―第十七世紀）に於けるポルトガル・スペイン・オランダ・イギリス・フランスの植民史。

（本篇の構成）―既刊書『近世欧羅巴植民史㈠』（第一章―第六章ポルトガル・第七章―第十二章スペイン・第十三章―第十五章オランダ・第十六章―第十八章イギリス）に加うるに博士の書きおろし原稿である『第十九章―第二十章フランス』（二〇〇字詰・二一六枚）を追加し、更に編集委員に於てノート『欧羅巴植民史』のうちより補足した『第二十一章―第二十三章フランス』を附け加へた。

（尚往既刊中に挿入されている地図は収録したが、人物写真は割愛した）

第二篇―『近世欧羅巴植民史㈡』

（内容）第一篇を継承して発展する、第十八世紀より第二十世紀に至るポルトガル・オランダ・イギリス・フランスの植民史並に第十九世紀より初まるドイツの植民史。

（本篇の構成）本篇はその全文がノート『欧羅巴植民史』よりの原文のままの収録である。（但し第一篇既刊の編制にしたがってノートの章・調節を整理した。）

博士の既刊書は、ノート『欧羅巴植民史』を基調とされながらも、加之、ノート『植民史翻訳書』及びその他の書籍、資料を博く引いてノートの原文に補筆され、綿密なる「註」を各章末に補って新たらしく書きおろされたものである。この観点よりすれば、ノート『欧羅巴植民史』は、博士に於ては、他日補正さるべき未定原稿のものであると判断される。従って本第二篇は博士の未定稿遺稿であることを附記する。

第三篇―『近世欧羅巴植民史㈢』

（内容）本篇は資料篇である。収録するところの、ズバン著『欧羅巴植民地の領土的発展』・ロロフ著『近世欧羅巴植民史綱』等々は、植民・植民史乃至植民政策の研究に於ける権威ある書物である。博士は自からの研究の参考資料としてこれ等の原書を丹念に訳出された。いづれも未発表の訳書である。

（構成）ノート『植民史翻訳書』を収録した。

一、尚ほ第一篇・第二篇は本全集第五巻に、第三篇は第六巻に、それぞれ収録する。

序

世界近世史の最も厳粛なる事実は、実に世界の欧羅巴化である。永く亜細亜の一半島に過ぎぬ狭小なる天地に蹋蹐し来れる欧羅巴諸国は、僅に過去四百年の間に、常勝不敗の歩みを四方に進め、或は政治的に、或は経済的に、少くも文化的に、殆ど地球全面を征服し去つた。この世界の欧羅巴化は、近世初頭に於けるラテン民族による新世界の発見、及び之に伴へる列強の植民的発展と、ゲルマン民族による宗教改革、及び之に伴へる旺盛なる精神的飛躍とに負ふ。

かくて近世欧羅巴植民史は、政治的には欧羅巴の帝国主義の勝利、経済的には其の資本主義の昂潮、人種的には白人世界制覇の跡を辿るものにして、汲みて尽きざる興味と教訓とに充つ。而して此の興味と教訓とは、亜細亜に於ける唯一の強大にして高貴なる非白人国家として、嘗に欧羅巴の前に跪拝することを肯んぜざるのみならず、亜細亜と欧羅巴との対立を止揚して、壮厳なる第三帝国を実現すべき使命を荷ひ、現に其の聖戦に拮据しつつある日本国民に取りて、一層切実深刻ならざるを得ない。

然るに一事の甚だ不可思議なるは、是くの如き植民史の研究が多く国民の関心を惹かず、少くとも邦文にて書かれたる権威ある植民史の絶無なることである。翻訳は暫く之を措く、著作としては予の知る限り僅に二種に過ぎず、而も共に杜撰にして竟に良著と謂ふべくもない。之を学問の自余の分野に於て、或は全般に亘る著作、或は特殊問題に関する論文が、相次いで発表せられ、繚乱として其妍を競ひつつあるに比ぶれば、満目唯だ荒涼を

極めて居る。寒煙空草裡には一茎の野花、猶且つ風情を添ふ。予の此著は当に斯かる野花たるべきものである。植民史の著述は決して予が昨今の発心でない。そは往年予が拓殖大学に植民史及植民政策講座を担任せるころよりの宿志である。而も其後時務に激するところありて久しく几辺を離れ、倥偬として風塵に塗れて居たので、多からぬ時間を割きて僅に研究を続けては来たが、筆執る余裕などは思ひも寄らなかった。然るに一朝五・一五事件に連坐して囹圄の身となるや、公私一切の葛藤、立どころに撥無せられ、無為閑々たること太古の民の如くなるを見た。即ち此機に乗じて存分に植民史研究に没頭せんと欲し、欧羅巴世界争覇に関する諸著を集め、冷頭熱腸、読みては書き、書きては読む以外、朝々暮々また他事なく、人は獄裡日輪の歩み遅々たるを嗟嘆するも、予は却つて其の颯々たるに一懼せざるを得なかつた。

人は学んで初めて己れの無学を知る。予は研究を進むるに従つて、知るべき事実、解くべき問題の愈々多きを知つた。而も完璧を求むれば、遂に其の止まるところを知らぬ。予は獄を出づるに及んで一旦予の研究に段落を附し、現に学び得たる所を纒めて、一応予の宿志を遂げるに決し、茲に近世欧羅巴植民史第一巻を出だすことともした。向後半年毎に一巻を刊行し、総じて四巻を以て完了するであらう。初発心のころを一顧すれば、十五年の歳月、水の如く逝き、下獄によつて初めて稿を起すに至つた。想ひ来れば此書もまた因縁不可思議の所生である。

昭和十六年十月

第一章　ホルトガルの準備

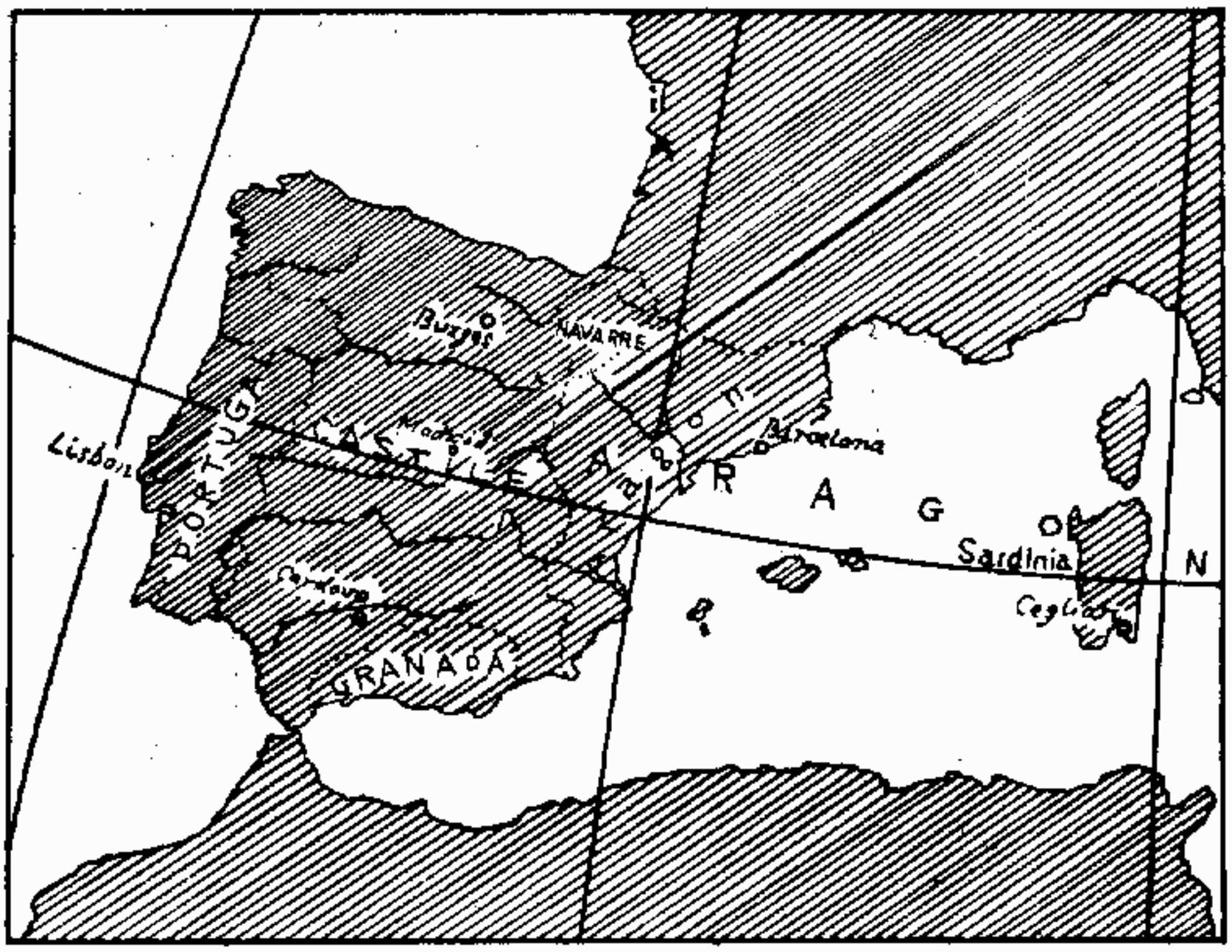
第一節　ホルトガル

近世歐羅巴植民史の第一頁は、実にホルトガルによつて書かれた。僅に百万の人口を擁してイベリア半島の一角に拠り、未だ曾て史上に頭角を抽んでざりし此の小国が、如何にして他国の敢てせざりし海上探険を試み、諸国に先んじて功業を波濤万里の外に樹て、之によつて欧羅巴の人心を全く新しき活動分野に向はしめ、遂に白人世界制覇の途を拓くに至つたか。その由来を明かにするために、吾等は先づ此国の歴史を顧みねばならぬ。

マホメットの出現によつて、突如強大なる国家、一層適切に言へば強大なる宗教的戦争団体となれるアラビア人は、剣戟による新信仰の伝道を開始し、瀕ふところ敵なき勢を以て常勝の歩武を東西に進めた。彼等は西紀七〇年に於て、既に北阿弗利加一帯を征服した。此時回教軍を率ゐたる勇将アクバル Akbar が、大西洋の波立つ岸に達し、馬を海中に乗入れて『アルラーよ、若し此海わが行手を遮らずば、予は更に西方未知の国に進み、神の独一なるを教へ、異教の民に妙法の利剣を加へんものを』と叫びたることは、回教史上の名高き語草である。大西洋は、アクバルの嘆じたる如く、回教軍の進路を阻んだ。さりながら地中海は、決して彼等の進撃を遮り得なかつた。北阿弗利加を征服せる名将ムサ Musa は、部下の一将タリク Tarik に五千の兵を与へ、海を渡りてスペインに攻入らせた。タリクが上陸せるスペインの一岩角は、ジベル・アル・タリク Jibel al Tarik 即ち『タリク

の丘』と呼ばれ、後に転化してジブラルタル Gibraltar と呼ばれるに至つた。

タリクは、二百年来スペインに占拠せる西ゴス人を敵とし、七一一年三月、カディス Cadiz 市に近きヘレス Xeres の野に於て、西ゴス国王ロデリック Roderick の大軍と四日に亘る激戦の後、遂に之を撃破してスペイン征服の礎を置いた。この捷報阿弗利加に達するや、ムサまた直ちに海峡を渡つてスペインに入り、タリクと協力して七一三年には殆どイベリア半島を蕩平し去つた。当時ムサの雄志は、実にピレネ山脈を越えてフランスに入り、更に南下して羅馬を征服し、ヴァチカンの聖殿に教祖マホメットの緑旗を掲げ、次で北上してゲルマン諸族を平らげ、ドーナウ河を下りて黒海に出で、回教の勢威をバルカン半島に布き、全欧を従へて然る後にダマスコに凱旋するに在つた。此の壮心烈志は、ダマスコ朝廷が両将を召還せる為に実現されなかつたが、其後アブダル・ラーマン Abdar Rahman のスペインに将たるに及び、ムサの志を継いで回教を全欧に布かんと決心し、大軍を率ゐてピレネ山脈を越え、欧羅巴の中原に進出し、七三二年十月、フランクの勇将シャール・マルテル Charles Martel が率ゐたる決死の大軍と、トゥール Tour・ポアティエ Poitier の間に横はる平野に会戦し、激戦七日の後、遂に撃破せられてアブダル・ラーマン乱軍中に戦死し、回教軍は目的を果さずして退却した。此の一戦は、実に東西両民族の運命を決したる大戦の一として、永遠に記憶せらるべきものである。若し此戦が回教徒の勝利に帰したならば、恐らく全欧を挙げて彼等のために征服せられ、世界史は著しく今日と異なる面目を呈したことであらう。幸か不幸か此の敗戦によつて、回教軍の欧羅巴中原進出は阻止されたが、ピレネ山西イベリア半島の地は、其後も長くアラビア人支配の下に置かれ、半島の基督教徒は、僅にピレネ及びアストゥリア Asturia の山間に拠つて、余喘を保つに過ぎなかつた。



第十五世紀中葉のイベリア半島

身の間に不断の争闘を続け、前者に於てよりも一層多く

回教徒のために磽确なる山地に追込められし基督教徒は、曽て彼等の祖先のものなりし快き谿谷や、稔りよき葡萄園が、異教の侵入者の掌裡に帰し、曽て十字架を戴ける礼拝堂に、新月の輝きつつあるを見て、悲憤の血を湧かさざるを得なかつた。かくて第十一世紀末葉に至り、不断の内訌によつて回教国家の勢力漸く衰へ、第十一世紀初頭、ついに分裂して幾多小国の割拠を見るに及び、基督教徒は勇躍して勢力の回復に努め、爾来実に三百年に亘る征戦によつて、歩々其敵を南方に圧迫し、第十四世紀中葉には、半島の大部分を回教徒より奪回した。この征戦の間に幾多独立せる基督教国の出現を見たが、その最も有力なりしは東方のアラゴン Aragon・中央のカスティル Castile・及び西方のポルトガル Portugal にして、其他は逐次此等の国々の孰れかに併合された。

此等の諸国は、一方回教徒と戦ひ乍ら、他方彼等自の鮮血が、後者に於て流された。いま第十五世紀中葉に

於ける独立諸国の広袤を見るに、レオン Leon 及びガリシア Galicia を併せたるカスティルは半島全面積の六割二分、ヴァレンシア Valencia 及びカタロニア Catalonia を併せたるアラゴンは其の一割五分、ホルトガルは其の二割、東北の一小国ナヴァル Navarre は其の一分、回教徒の最後の領土たりしグラナダ Granada は其の二分を占めて居た。而して一四七九年カスティル・アラゴン両国の合併によつて今日のスペイン国が生れ、一四九二年にはグラナダを略取し、一五一二年ナヴァルを併合するに及び、茲にイベリア半島は西葡両国の間に分たれることとなつた。かくして此の両国は、人種を異にし宗教を異にせる支配者との、数世紀に亘る悪戦苦闘の間に生れたる国家である。

さてホルトガルが一個の国土として史上に現れたるは、一〇九五年、カスティル・レオン・ガリシア三王国に君臨せるアフォンソ Affonso 四世が、フルゴーニュ Bourgogne より来りて半島十字軍に加勢せるアンリ Henri 伯の勲功に酬いるため、之に王女テレザ Teresa と、回教徒より奪回せるオポルト Oporto 及びコイムブラ Coimbra の二領地を与へ、ガリシア国に臣属する『ホルトガル伯』に封じたる時を以て始まる（註一）。

ドーロ Douro 河北ギマンエス Guimães を首府とせる新領主アンリ伯は、典型的なる中世フランス武士として、冒険を好み、功名に焦がれ、最も平穏無事なる生活に堪えず、其国を妃テレザに委ねて、或は第二十字軍に加はり、或は他国の戦場に馳駆して居た。テレザは、才色双絶の女丈夫にして、親ら陣頭に立つて赴く勇気と、稀有の政治的手腕とを兼備し、一一一四年、アンリ伯が三歳の幼児アフォンソ・エンリケス Affonso Henriques を遺して死するや、全力を傾倒して其子の領土を一個の独立国たらしむるに努め、国民的自覚を人民に鼓吹してガリシア人と呼ぶを止めてホルトガル人と称へしむるに至つた。惜むらくは後にガリシアの美しき貴族を溺愛せ

るため、人民の信望を失ひ初めた。而して一一二七年隣邦カスティル・レォン・ガリシア王アフォンソ七世がポルトガルに侵入して臣従を要求し、テレザの之に応ずるや、首府の市民は、当時十七歳の青年なりしアフォンソ・エンリケスを擁して之に反抗した。翌一一二八年アフォンソ・エンリケスは、武力を以て政権を其母より奪ひアフォンソ七世と戦ふこと前後四回、一一四〇年遂に向後ガリシアの政治に干渉せず、且領土を北方に拡張せざることを条件として、アフォンソ七世をしてポルトガルの独立を承認せしめ、茲に初めて国王と称するに至つた。而して一一四三年には、羅馬法王もまた彼の国王たることを承認した。

先是一一三九年、アフォンソ・エンリケスは南方深くモール人の国土に攻入り、ベジャ Beja の南に横はるオーリケ Ourique 原頭に回教軍と戦ひて大勝し、敵の心胆を寒からしめたが、今や国王となりてより、一層の熱心を以てモール人の治下に在りし南方諸州の経略に従つた。かくて、一一四七年にはタグス Tagus 河畔の大都、河口を距る約百粁の地に位するサンタレム Santarem を奪つた。翌一一四八年には、英国の港ダートマス Dartmouth より出帆して、聖地に向ふ十字軍戦士を載せたる一大船隊のオポルトに寄港せるを好機とし、彼等を説得して其の援助の下にリスボン Lisbon をモール人より略取した。ドーロ河口の此の良港は、夙くよりイベリア半島西岸の中心たる地位を占め、四百年に亘りてモール人の最も重視せる形勝の地であつた。従つて爾後此地がポルトガルの首府となりしことに何の不思議もない。征服の歩みは更にドーロ河南に進められ、一一五八年には富裕なるモール人の都市アルカセル・ド・サル Alcacer do Sal を陥れた。

唯だ王のかくの如き成功は、晩年に王をして隣邦に対する野心を抱くに至らしめ、遂に兵を磐礴不毛なるイベリア高原に進め、バダジョス Badajos を略取せんとせしめたが、王は啻に其の目的を達せざりしのみならず、

却て之がために失ふところ多かつた。而も一一八五年、王が其の長き生涯を終へたる時、初めガリシア国の一属領にすぎざりしポルトガルは、既に重きを欧羅巴諸国の間に成せる強固なる一王国となつて居た。かくの如きは中世紀に於てさへ稀有の出来事であり、偏にアフォンソ・エンリケスの偉大に負へるものである。

其後サンショ Sancho 一世、アフォンソ二世、サンショ二世、アフォンソ三世を経て、一二七九年デニス Denis が王位に即けるころは、モール人は既に全く南部諸州より掃蕩せられ、ポルトガルは今日の全版図を半島に於て獲得し、もはや征戦と領土拡張との時代を過ぎて、国内を整頓し文化を向上せしむべき時代に入りかけて居た。而して是くの如き時代の君主として、デニスは申分なき国王であつた。『彼は詩人にして文学を愛した。彼は偉大なる行政家にして正義を愛した。彼は経世家にして外国との戦争を避けた。彼は深慮遠謀の人にして、貿易を奨励して葡国勢力の海外発展に備へた。特に彼は農業其他の平和なる仕事を以て不断の戦争に代らしむる必要を看取し、一切の方面に於て勤労王 Ré Lavrador という貴き綽名を得た』（註二）。王は同時に海外貿易と海上権力とを振興する目的を以て、初めて葡国海軍を建設した。最も英国との親善を図り、通商条約を結んだ。監察官を王領諸都市に置いて貴族の秕政を阻止せんとした。農学校を建て、模範農場を置き、農業の重んずべきを国民に知らしむるに努めた。後に葡国文化の中心となれる大学をリスボンに創設した。而して四十六年に亘る長き治世の間に、父祖より承けたる国家の礎を固めて、一三二五年に長逝した。

アフォンソ四世及びペドロ Pedro 一世は、共にデニスの政策を継承し、半島諸国との葛藤を避け、英国との政治的並に商業的関係を親密にした。然るに一三六七年、美男王と呼ばれたるフェルディナンドが王位に即くに及び、ポルトガルの歴史は漸く危機に入りかけた。蓋し南方アルガルヴェ Algarve を征服し去りてより、平和

と繁栄の時代永く続きたるため、ホルトガル国民は殆ど欧羅巴の如何なる国民よりも富裕となり、且強力なる国民意識を抱き初めたるに拘らず、宮廷は次第に放埒となり、国民との感情が次第に阻隔するに至つた。若し国王にして長く王位を保たんと欲すれば、曾てアフォンソ・エンリケス又はデニスが然りし如く、真個の国民的君主として国民の精力を新しき目的に旺向せしめ唯だ歓楽を追ふことを止めて人君の本務に復らねばならぬ時であつた。然るにフェルディナンドは、人となり柔弱軽薄なる上に徒らに野心のみ強く、為に事をカスティルと構へて無用の干戈を交へた。加ふるに王が一貴族の妻たりしを奪ひて王妃とせるレオノル Leonor は残忍にして奸悪、柔弱なる国王を籠絡して専横極まりなく、国民は深刻なる反感を彼女に対して抱くに至つた。殊に一三八三年四月二日、カスティル王ジョアン Joao 一世との間に結ばれたる平和条約は、唯一の王女にして当時僅に十一歳なりしベアトリス Beatrice をカスティル王妃となし、若しフェルディナンド逝去の場合は、ベアトリスの第一王子が成年に達するまで、レオノルが葡国摂政たるべきことを取極めた。結婚式は直ちに挙げられた。フェルディナンドは病重くして席に列なり兼ねたが、レオノルは其の愛人と共に列席して最も陽気に振舞ひ、多くのホルトガル貴族を顰蹙せしめた。而して此年十月国王死するやレオノルは其の効きカスティル女王の名に於て摂政の職に就いた。

国民の憤激は、遂にリスボンに於ける十二月の暴動となつて勃発した。ペドロ一世の庶腹王子にしてアヴィズ教団の団長たりしジョアンが、推されて人民の先頭に立ち、自ら王宮に入りてレオノルの愛人を斬つた。暴動は他の都市にも波及し、レオノルの与党は多く殺害された。レオノルはサンタレムに奔り、味方の軍隊を集むると共に援軍をカスティル国王ジョアン一世に乞うた。一三八四年、カスティル国王は、軍を率ゐてホルトガルに入

り、サンタレムに於てレオノルと会合したが、戦後の善後策について両者の間に異論を生じ、レオノルは王を毒殺せんと企てたので、王はレオノルをトルデシラス Tordessilas の尼院に送致せる後、軍を進めてリスボンを包囲したが、陣中に疫癘発生して勢猖獗を極め、為に軍を回さねばならなかつた。

於是コイムブラに国民会議の召集を見、一三八五年四月六日、ジョアンは其の推戴によつてポルトガルの王位に即き、ジョアン一世と称することとなつた。而して此年八月十四日、その率ゐしポルトガル軍は、アルジュバロタ Aljubarrota の会戦に優勢なるカスティル軍を撃破し、次で十月彼の部将はヴァルヴェルデ Valverde の会戦にまた勝利を得た。初め彼の事を挙ぐるや、特使を英国に派して其の援助を求めたが、一三八六年七月ジョン・オヴ・ゴーント John of Gaunt は、二千の槍兵、三千の射手、及び二女フィリッパ Philippa 並にカザリン Catharine を伴ひて来援し、ポルトガルの勢威頓に揚がつた。而して翌一三八七年二月ジョアン一世はジョン・オヴ・ゴーントの長女フィリッパと結婚して、英蘭両国の契を堅くした。次で妹カザリンはカスティル王位継承者、後にエンリケ三世となれるアストゥリア公エンリケの妃となつた。

ジョアン大王と呼ばれし此の国王は、此後二百年間ポルトガルに君臨せるアヴィス Aviz 王朝の祖であり、その長き治世の間に、此の国民の偉大なる発展の基礎が置かれた。彼はモール戦争の後を承けたるデニス王と同じく、多年に亘るカスティル戦争の後を承けて、平和の必要を痛感した。そのために彼は英国との親善を確立し、且スペインに対する不干渉を根本方針とした。それが極めて賢明な政策であつたことは言ふまでもない。但し彼は其の王位に登るや、彼に味方せる貴族の勲功に酬いるため、広大なる土地を彼等に与へ、之によつて尠からぬ弊害を醸したが、其他の点に於て彼の政治は極めて優良であり、最初の三十年間に都市は栄え、リスボンは偉大

なる商港となり、商船の数も漸く多く、通商も盛んになつて来た。彼はまた大学を拡張し、其の制度を改め、十四人の正教授を任じて文典・羅馬法・教会法・医学・神学の諸講座を担当させた。かくの如くにして充実し来れる国力が、取りも直さずホルトガルをして海外発展に旺向させたのである。

〔註一〕ホルトガル、詳しくは Portocalensis は、ドーロ河口の名高き Oporto の旧名 Portus Cale に因めるものである。Oporto 即ち O Porto は港の意味。O は定冠詞。

〔註二〕H. Morse Stephen : The Story of Portugal. London, 1891. p. 30.

第二節　ホルトガルの経済状態

H・M・スティーヴンは、その好著『ホルトガル史話』を、下の一文を以て書き初めて居る――『ホルトガル史は、此国の一個の国民としての存在が、専ら其の歴史にのみ負へる事実よりして一箇特別なる興味を有する。地理的には、此の小さき王国は、イベリア半島の分つべからざる一部を成し、之をスペインと呼ばるる半島の大部分より区別すべき如何なる自然の境界も無い。その住民はスペイン人と同一種族より出で、その言語も多くスペイン語と異なる所ない。その初期の歴史は、半島の自余の国々のそれと混融し、若し二個の偉人即ちホルトガル最初の国王アフォンソ・エンリケス、及びアヴィス王朝の祖ジョアン一世なかりせば、ホルトガルは今日欧羅巴独立国の間に伍して居なかったであらう』

なるほどホルトガルの国境は、一見何等国防的価値なき人為的のものなるかに思はれる。而も事実はスティーヴンの言と異なり、そは好個の自然的境界をなせるものにして、ホルトガルを隣国より分つものは、条約の規定

に非ず、実に土地の起伏である。そは北方並に東方に於て、容易に越え難き嶮岨なる山脈によつて半島の自余の部分と隔てられ、処々の断崖には急潭奔下して居る。ドーロ・タグス・グアディアナ Guadiana の諸川、みな源をスペインに発して此国に流れ入るとは言へ、そのイベリア高原を走る間は、雨少く水乏しくして舟通はず、ポルトガルに入りて初めて航行に堪える。従つて此等の河川は、連山によつて阻止せらるる両国の交通に資するところ無い。唯だグアディアナ河の谿谷のみ例外に開け、バジャドスとエルヴァス Elvas との間は容易に大軍を進め得る。但し此の道路さへも多くの地点、殊にエルヴァスに於て、堅固に防禦することが出来る。且国境地方は概ね不毛の地にして人煙稀薄、自然に緩衝地帯をなせる上に、ポルトガルと其の隣国とは、殆ど天産物を同じくする故に、有無相通ずる商業上の利害より、自然の障壁を打破する必要も生じなかつた。かくして単り歴史のみならず、此国の地理的事情も、またポルトガルをして一箇の独立国家を形成せしめ、その独自の国民性を長養せしむる上に、与つて力ありしことを認めねばならぬ

かくの如くポルトガルの地勢は、此国を半島の自余の部分より隔離せるが故に、他国との交通は自ら海上によらざるを得ない。而して約八百粁に亘る其の海岸線は少からぬ良港を有し、海上の活動に対する好個の根拠地を提供した。リスボンは世界に於ける最良の港湾の一である。オポルトは落潮時に水深二米五〇に過ぎざるを憾みとするけれど、第十六・十七世紀の比には良港の中に数へられた。其他之を北より挙ぐればヴィアンナ Vianna・カミニョ Caminho・アヴェイロ Aveiro・フィゲイラ Figueira・サンマルティニョ São Martinho 及び南方アルガルヴェ海岸のラゴス Lagos・ファロ Faro の諸港が、皆な当時の船舶に取って好個の寄港地であつた。

工業の発達を見ざりしポルトガルは、製造品の供給を外国に仰ぐ必要より、夙くフランス・ネザーランド・イ

ギリス、及び地中海諸国と通商関係を結んだ。第十三世紀中葉の諸文書は、既に此頃よりポルトガル人が、織物・木材・金属等を輸入し、葡萄酒・油・塩・乾果・乾魚・塩魚等を輸出して居たことを示す。その商人は北部フランス、フランドルの諸港に居留し、一四二一年にはフランドルのブリュージュ Bruges に於て、カスティル人と同等の権利を与へられた。但し其等の孰れの都市に於ても、独立の居留地を形成するほど多数ではなかつた。而して地中海諸国の大都にも、倉庫を有せず、また領事をも置いて居なかつた。従つて当時のポルトガルの海外貿易は、尚未だ盛大でなかつたとせねばならぬ。而も此の貿易の大部分は、実にユダア人の手によつて行はれて居た。ユダア人は其の取引先の総てから、商業上の智識と正直とのために尊敬されて居たが、ポルトガル人の如き商業的才能を欠ける国民に取りて、彼等の活動は最も此国の経済的生活に貢献した。また此の貿易は、ユダア人の外に一部分はリスボン在留の外国商人によつても行はれ、ジェノア人・ミラン人・スコットランド人・イギリス人等が、商業上の特権を与へられて居た。

フェルディナンド王は、海運奨励の目的を以て、種々なる特典を海運業者及び船員に与へた。例へば造船匠には国有林の樹木を無料にて伐採せしめ、百噸以上の巨船建造に要する木材の輸入税を免除し、海上保険制度さへも設けられた。海運と最も密接なる関係を有するものは漁業であるが、当時多数の漁船が、鰯・鱈・鮪の漁獲に従事し、アルガルヴェ沖では捕鯨も相当に盛んであつた。此等の漁夫は、単り自国の海上のみならず、遠くフランス及びイギリスの海洋に出漁した。一三五三年英王エドワード三世は、ホルトガル漁夫に対して、五十年間イギリス領海に来りて漁獲に従ふことを許した。

当時のポルトガルの人口は、一四二二年に約百万、一五〇〇年に約百十万、一五三二年に百二十二万六千と推

算されて居る（註二）。即ち第十六世紀初頭の此国の人口密度は、一方粁につき僅に十二人に過ぎない。その大部分は農民であつたが、食糧の自給自足は困難で、凶年には国外から穀物を輸入せねばならなかつた。連年の兵戦に田園の荒廃せるもの多く、南部地方は特に甚だしかつたが、之を復興するには労力が不足した。技術に於ても、また勤勉に於ても、遥にホルトガル人の上に在りしモーレ人は、その不撓不屈の努力によつて、能く磽确の地を沃土と化したが、一旦ホルトガル人の手に帰するや、幾くもなく復た不毛の地となつた。耕地は僅に全面積の七乃至八パーセントに当り、歴代諸王の指導奨励に拘らず、農業は多く発達の跡を見ず、農民の状態は概して悲惨であつた。

牧畜は、家畜を州外に販売することを困難ならしめる幾多の規則ありしと、また農民に対しては政府所定の価格を以て輓用獣を売らねばならぬことなどのために、次第に不振に陥つた。此国は、牧畜に適する高原に富めるに拘らず、肉食が奢侈と考へられて居たほど、家畜の数に乏しかつた。

之を工業について見れば、織物業は僅に下層民の被服に使用せらるる毛織の粗布を産するに過ぎなかつたが、第十五世紀初頭に至り、ペイラ Beira の諸地方に於て、漸く精巧なる毛織物を産し、従来イギリスより輸入せる織物の一部を自給した。また此の世紀の後半には、養蚕並に絹織業も行はれ初めた。其他の製造業に至りては、殆ど見るに足るものなく、第十六世紀初頭までは、武器さへも外国から購入せねばならなかつた。また地中には銅・鉄・鉛・錫等が埋蔵されて居たが、その採掘は極めて稀であり、必要なる金属の殆ど全部を、外国から輸入した。

総じて言へば、ホルトガルが将に海外に雄飛せんとせしころの状態は、経済的には尚ほ貧弱なるものではあつ

たが、発展の可能性は具はつて居た。その海運は未だ盛んならず、貿易も未だ興らなかつたけれど、奨励して盛大ならしむべき造船業の基礎は既に置かれ、必要なる船員は之を幾多の漁港より募集し得べく、外国との通商関係も既に結ばれて居たので、之を増進せしむれば即ち足りた。而してポルトガルは、其の国王ジョアン一世、並に其の俊秀なる王子たちに於て、無比の指導者・奨励者を与へられた

〔註一〕 H. M. Stephen, Ibid., p. 1.

〔註二〕 De Almada Negreiros, Colonies Portugaises : Les Organismes Politiques Indigènes. Paris, 1911, p. 20 に引用せられし Rebello da Silva の算定による。

〔註三〕 Charles de Lannoy et Herman Vander Linden, Histoire de l'Expansion Coloniale des Peuples Européens, Bruxelles et Paris. t. I, pp. 7—11 ; p. 26.

第三節　ポルトガルの政治・社会状態

経済的には尚未だ貧弱なりしとは言へ、ポルトガルは既に第十五世紀初頭に於て、強大なる政治的統一を有して居た。国内の如何なる地方も、独自の生活を有せず、また特殊の制度を有せず、乃至王室に反抗して独立を企てんとする勢力も存在しなかつた。国王の権力は原則として絶対であり、而してその権力は、国王自身又は其の随意に択べる重臣によって行使された。之を掣肘する如何なる憲法もなく、また如何なる封建勢力もなかつた。

貴族・僧侶・都市代表者によつて組織せられしそれぞれの『議会 Cortes』は、建国と共に旧く、国王は新税を設定し、又は戦争を宣言する場合には、之を諮るべきものとなされて居た。但し此等の議会は、国王に意見を具申し、其の反省を求め、又は其の諮詢に答へるだけで、直接なる立法権を有せざるのみならず、三つの階級が

個々に分れて討議し且決議したので、貴族と僧侶と都市との結合を妨げ、従つて其の勢力を弱くした。第十五世紀に於ては、国王は唯だ重大なる事業又は改革に際して、国民の助力を確保せんと欲せる場合にのみ之を利用した。かくて議会其ものには何等強大なる掣肘力なく、都市もまた国王の前に無力であつたが、貴族及び僧侶の有せる歴史的勢力は、或程度まで国王の専制を抑えて居た。

国王の土地にして、貴族・僧侶・都市に属せざるものは、国王直轄の下に置かれた。国王はまた鉱山及び港湾の所有者であり、之より生ずる収入並に土地よりの収入を以て、王室費及び政務費に充てた。

国土の広大なる部分は、貴族及び寺院の領地であつた。国王は建国当初より、或は武勲に酬いるため、或は彼等を籠絡するため、貴族・僧侶に多くの所領を与へた。此等の人々は『賜封者 Donatarios』又は『長者 Ricos-homens』と呼ばれたが、その地位は決してドイツに於ける封建領主のそれにあらで、寧ろイギリス貴族のそれに比ぶべきものであつた。即ち彼等は原則として国王に属する土地の使用収益権を与へられたるに過ぎず、国王は必要と認むる場合、その封土を回収する権利を有して居た。但し実際に於ては、ポルトガル国王は、第十五世紀以前には、長者等を掣肘して王室直轄領を増すことが出来なかつた。ジョアン大王でさへも、新王朝の創立者として、多くの貴族に賜封せざるを得なかつた。後に阿弗利加遠征を試むるに及んでは、また戦功者に賜封し、更に本腹・庶腹の諸王子に対する愛情から、彼等にも広き土地を与へた。

ジョアン大王の後を継ぎたるドゥアルテ Duarte 王は、際限なき貴族領の膨脹が、王室並に国民に対して等く破滅的なることを痛感し、一四三四年エヴォラ Evora に会議を召集し、父王の遺志なりと称して、国王より賜はれる世襲領地は、爾後本腹の長男のみ之を相続し得べく、相続人なき場合は之を王室に回収することとし、名

高き『内心法 Lei Mental』を発布した（註一）。然るに彼の後を継ぎたるアフォンソ五世は、その阿弗利加遠征及びカスティル戦争に於ける功労者に対し、亦復多くの土地を賜ひしため、王領は殆ど皆無となり、其子ジョアン二世をして『父はポルトガルの街道のみを予に遺した』と嘆ぜしめた。而も此の英明なる君主は、斯くの如き弊風の一掃を期し、一四八一年またエヴォラに議会（コルテス）を召集し、その同意の下に、全国に亘りて土地所有に関する権利の審査を励行すること、並に刑事上の司法権は、全国を通じて王国監察官によつてのみ行使せざるべきことを定めた。而して貴族が此の決議に対して大なる不満を抱き、相結んで国王に反抗せんとするや、国中の勢力ある貴族、約八十名を捕へて之を死刑に処し、一挙にして貴族積年の勢力を打破し去つた。此時には、斯かる高圧手段を可能とするほど、王権は既に強化されて居たのである（註二）。

尤も従前よりポルトガル貴族は、国王の忠実なる臣下であつた。彼等の有力者は、概ね宮中に仕へて国王の参議となり、又は其子を宮廷に勤めしめて武士道の作法を習はせて居た。他国の封建領主の如く、その所領を一個の独立国たらしめんと図ることは、ポルトガル貴族の決して敢てせぬところであつた。乍併之を行政上より見れば、貴族領は殆ど完全に王権の外に在つた。貴族は随意に其の領土を治め、広汎なる裁判権を有し、且租税を納むることなかつた。ジョアン二世の英断は、この貴族の権利に対して、巨斧を其根に加へたるものである。

寺院領もまた広大にして、貴族領と同じく王権の支配外に置かれた。第十三・第十四世紀に於て、国王と高位の僧侶との間に幾多の争議を生じたが、ペドロ一世の時に至り、一三六一年エルヴァスに議会を召集し、寺院の司法権に厳格なる制限を加へ、且国王の認可なくして新に土地を獲得することを禁じた。この処置は、多少僧侶の勢力を殺いだけれど、尚彼等の数は多く、其富は豊かに、其の在上者の地位は高く、加ふるに国民の宗教心は熱

烈なりしが故に、教会は単り社会的のみならず、政治的にもまた儼然たる勢力を保持して居た。さり乍ら此の勢力は、次第に王権との対立を止め、貴族権力の打破によつて王権の益々確立せらるるに及び、教会は国王のために其の勢力を用ゐるに至つた。

寺院と相竝んで『教団 Ordre』があつた。そは十字軍が生みたる特殊なる宗教的・戦闘的団体にして、ホルトガルには第十五世紀初頭に四箇の大なる教団があつた。その最も有力なるは『基督団』にして、もと『神殿団』の支部として創立せられたものであるが、一三一二年羅馬法王によつて該教団の解散せらるるや、基督団の名称に之を改組し、その広大なる所領を継承せるものである。其他の三つは『聖ヨハネ団』・『アヴィス団』・『聖ヤコブ団』である。

此等の教団は、モール人との戦争が続行せられし間は、ホルトガル王国の常備軍の如き観を呈し、その信仰の敵にして、同時に国王の敵たる回教徒と、不断に干戈を交へて居た。国王は彼等の武力に頼ること多く、篤く其功に酬いるを常とした。而も第十三世紀中葉に至り、回教徒が全くホルトガルより駆逐せられし後は、教団の活動自ら鈍り、その訓練も昔日の如くならず、教団の『同胞』の生活は、一般貴族のそれと択ばざるに至つた。唯だ其の総長には、常に王族を以て之に任ずるのが例となり、教団領は一種の王室領たる観を呈するに至つた。

王領・貴族領・寺院領を通じ、その与へられたる『特権 Forces』により、或る程度の自治を許され、代表者を議会に送れる幾多の『都市 Concelhos』があつた。ホルトガルがモール人と死活の戦に従へるころ、此等の都市は真個国民的活動の中心であり、特権は其の武勲に対する行賞であつた。さり乍ら此等の自治体は、ネザーランドのそれと異なり、長く其の特権を護持する力を有たなかつた。そは都市の名に値するほどの人口を有せず、

従つて富をも有しなかつた。

市民は幾多の階級に分れて居たが、其の区別は職業によるに非ず、財産と門地とによれるものであつた。而して此の階級はまた軍隊編成の基礎ともなつて居た。即ち最下層の貧民並に半自由民は、一切の公共の負担及び兵役を免れた代りに、自治体の政治にも参与し得なかつた。市民は其の財産によつて歩兵及び騎兵に二大別され、更に幾多の階級に小分された。貴族の出なる市民は、富の多少によらず騎士の階級に属した。此等の階級は、それぞれ社会的名誉を異にし、司法上の特権を異にし、貴族の如きは租税をも免除された。かくの如く市民は、利害関係を異にする諸団体に分れて居たので、協力一致して其の特権を擁護するを得ず、次第に貴族のために蹂躙せられ、また国王によつて権利を制限されて行つた。

ホルトガルは、不断の戦争の間に生成せる国家なるが故に、軍隊組織と社会制度とを一致せしめたる一個の軍国であつた。軍隊の元首は国王にして、国王自身若しくは元帥によつて指揮された。歩兵は既に述べたる如く専ら下級市民から徴募された。騎兵は上層市民、教団の武士、領主の家臣、国王直属の武士から成つた。故にホルトガル軍は真個の国民軍にして外国傭兵を混へず、仮令他国武士の来りて参戦するものありしとは言へ、其数は軍隊の性質を左右するほど多くなかつた。第十五世紀初頭に於て、国王は立どころに歩兵約一万四千乃至二万、騎兵約四千乃至六千を動員することが出来た。

第十五世紀に至るまで、ホルトガルの関心は主として陸軍に存し、その初めて海軍を創設せるはデニス王の時である。王は一三一七年、ジェノア貴族の出身なる高名の船長マノエル・ペサニャ Manoel Pessanha を招聘して之をホルトガルの世襲海軍提督に任じ、且彼の下に在りて軍隊を操縦する二十名のジェノア人船長を傭使する

ことを許した。此等の船長は、平時に於て俸給を受けざる代りに、提督指揮の下に、其船をジェノア、フランドル及び其他諸国との通商に用ゐることを許された。此のデニス王とペサニャ家との契約は、ジョアン一世の時代まで効力を有し、ホルトガル海軍の首脳部を形成せるものはジェノア人であつた。

かくて、一四一五年ホルトガルが初めて海外遠征を企てし時の海軍は、尚極めて微力なるものであつた。ジョアン一世は、その北阿遠征に際し、アルガルヴェとセウタ間の言ふに足らぬ短距離をさへ、尚且甚だ遠隔なりとして嘆息し、其上に軍隊を輸送すべき船舶の調達にも苦しんだ（註三）。

〔註一〕之を『内心法』と名付けたるは、ジョアン一世が内心之を制定せるも公に発布するに至らざりしと言ふに因る。

〔註二〕H. M. Stephen, Ibid., pp. 159—163.

〔註三〕此節の叙述は主として前掲 Lannoy et Linden, Ibid., pp. 11—21 に拠る。

第四節　ホルトガルの国民性

相次いでホルトガルに入り来れるケルト人・ローマ人・ヴァンダル人・アラビア人の血液は、第十五世紀初頭までに、渾然融合して一個のホルトガル民族を生んで居た。僅にタグス河以南のホルトガル人が、河北葡人よりも多くアラビア人の血を混へたるを認め得る以外は、国民の間に何等の人種的差別も存在しなかつた。当時のホルトガルの記録によるも、将又異邦人の見聞記によるも、彼等は潑剌たる気力を具へ、而も其の生活は極めて質素にして、粗衣粗食に甘んじ、ややもすれば暴虎馮河に陥り易き大胆敢為の気象を有し、好個の軍人たるべき素質に富んで居た。彼等が如何に粗食なりしかを示す好個の文書は、ジョアン三世の時に、王弟の教師として来葡

せる一ベルギー人が、諧謔を交へて故国の友人に葡国風俗を報じたる一書簡にして、其中に高位の貴族の一日の食費を『水一セクステル、パン二レイス、蕪菁一レース半』と揶揄して居る（註一）。此の粗衣粗食の生活と、此国の高湿の気候に慣れて居たことが、彼等をして北欧人には到底耐え難かるべき熱帯の活動に堪えさせたのである。

モール人及び隣邦カスティルとの間に行はれたる不断の戦闘は、彼等の国民的団結を促し、君主の権力を強め強固なる政治的単位を形成せしめた。同時に此事は、好戦尚武の精神を国民に鼓吹し、冒険敢為の気風を助長し平和なる仕事を蔑如する傾向を養成した。加ふるに彼等の戦争は、人種的・政治的なりしと同時に、一層激しく宗教的戦争なりしが故に、強烈なる宗教的情熱を彼等の魂に煽り、必然彼等を不寛容と狂信とに導いた。彼等は国王のために地上の帝国を、信仰のために精神の王国を獲得すべく戦つた。而も戦つて倦むことを知らなかつた。第十四世紀後半ヴァスコ・デ・ソベイラ Vasco de Sobeira の筆に成り、弘く欧羅巴に読まれて幾多の『続篇』と模倣とを生みたる『ゴールのアマディス Amadis da Gaule』は、取りも直さず当代ポルトガルの理想的騎士を謳へる詩篇であり、彼等の面目を如実に今日に伝へるものと言はれる。

彼等の最も重んじたるは、勇武と、体面と、神への忠誠とであつた。神と王との敵と戦ひて栄誉を博すること以外、騎士にふさはしき勤めなきが故に、彼等は平時に於ても専ら槍仕合・野仕合などの武戯を事とした。多年に亘る此の風習は、貴族をして経済的活動を蔑視せしめ、農工商に従事することを卑しましめるに至つた。

されば モール人が国内に跡を絶ち、平和長く続く時代となつても、貴族は更に心を産業に用ゐず、或は宮中に仕へ、或は高位の貴族に仕へて、如何に貧困に陥つても、決して経済的活動によつて生活せんとしなかつた。ポルトガルは暖国であり、肉体的労働は苦痛である。かかる国土に於ては、指導階級の模範によつてのみ、僅に国

民を勤勉ならしめ得る。然るに彼等は其前に唯だ虚栄と遊惰の模範を示した。此等は甚だ面白からぬ影響を此国の経済的生活に及ぼした（註二）。

宮廷の風儀は、アヴィス王朝以後極めて放肆であつた。唯だジョアン一世の時に至り、貞淑賢明なる女王フィリッパの感化により、宮に風紀が整正せられたるのみならず、貴族の趣味も向上し、文学芸術を愛好するに至つた。但し当時のポルトガルは、知識にも道徳的にも、決して高き水準に達して居なかつた。一般に中世紀に於て発達せざりし学問は、ポルトガルに於ては尚更のことであつた。仮令大学の創設を見たとは言へ、第十六世紀中葉までは尚極めて幼稚であり、其の以前に於ては一人の偉大なる哲学者又は科学者をも、彼等の間から出さなかつた。

ポルトガルの道徳的生活が、また決して高くなかつたことを立証するものは、ポルトガル王室の乱脈である。建国者たるアフォンソ・エンリケスが、既に武力を以て其の生母の手から政権を奪取して居る。其母に如何なる欠点ありしにせよ、之をガリシア山中に逐ひ貧苦の裡に窮死せしむる如きは、子として許さるべきことでない。サンショ二世もまた、其弟アフォンソ三世のために武力を以て王位を逐はれ、此王もまた其子デニスと干戈を交へつつ世を逝つた。而も因果の車は更にめぐりて、デニス王もまた其子アフォンソ四世の叛乱に遭ひ、アフォンソ四世はまた其子ペドロ一世の愛人を殺せる故を以て不和の間柄となり、相戦ふまでには至らなかつたが、生涯父子の対面をせぬこととした。フェルディナンド王は、一貴族の妻を奪ひて王妃とし、そのために一身の破滅を招いたが、其妃はまたフェルディナンド王の生前から、平然として愛人を寵愛して居た。父子兄弟の間が斯くの如く紊れたる国民の道徳は、断じて高貴健実であり得ない。

吾等が次章に述べんとする王子エンリケは、神にも近き王子として尊敬せられ、また此の尊敬に値する偉人なりしにも拘らず、奴隷売買を毛頭悪事と考へて居なかつた（註三）。ヴァスコ・ダ・ガマを初め、多くのポルトガル人が印度に於て敢てせる残虐無比の行為も、またポルトガル精神文化の低調を立証するものである。蓋し彼等は精神的には尚未だ幼稚であつたが、適往果敢なる戦闘的匡民であり、而して其の海外に於ける成功は、旺盛無比なりし好戦的精神に負へるものである。

〔註一〕 Reis は約二厘、Sextile は其の六分の一なる故、供せて四レイス一セキシティル、即ち約八厘。もとより実数に非ず諧謔である。此の書簡は一五三九年に書かれたるものにして、Reiffenberg, Coup d'Oeil sur les Relations qui ont existé entre la Belgique et le Portugal に発表せらる。Lannoy et Linden, Ibid., p. 22.

〔註二〕 Lannoy et Linden, Ibid., pp. 22—24.

〔註三〕 E. J. Payne: The Age of Discovery, Cambridge Modern History. Vol. I, p. 12.

第二章　エンリケ王子と其の事業

第一節　北阿弗利加遠征

フェニキア人・ギリシア人・カルタゴ人が、亜細亜並に阿弗利加の沿海地方について有して居た知識は、幾世紀以来欧羅巴人に忘れられて居た。第十三世紀の交、イタリー人が初めて羅針盤を用ゐて海中海を出で、再び大西洋を航して西欧及び北欧の諸港と往復するに及び、阿弗利加並に大西洋上の諸島に関する興味が諸国の船乗の

間に復活した。かくて第十四世紀の海図には、既にアソーレス Azores・マデイラ Madeira・カナリー Canary 等の諸島が記載せられ、わけてもカナリー群島は、古人の所謂『極楽島 Insula fortunatae』とせられ、最も植民的活動の対象となつた。その発見者たるジェノア人ランセロット・マロセロ Lancelot Malocello は、夙く一二七〇年に於て、彼に因みて名づけられたるランザローテ Lanzarote 島上に一小堡を築いたと言はれ、第十四世紀にはポルトガルの探険船もまた此の群島を訪ねた。一三四四年法王クレメンス六世 Clemens VI が、之をスペインの貴族ルイス・デ・ラ・セルダ Luis de la Cerda に賜ふや、翌一三四五年葡王アフォンソ四世は、此の賜封に対して抗議した。但しルイスは毫も其の権利を行使しなかつた。一三八二年には、スペインの船乗等が暴風のために此島に漂着し、多年土人の間に住みて彼等を基督教に入らしめんと努めたが、ついに却て土人のために殺された。次で一四〇二年、仏国ディープ Diepe の近くに一城を構へしノルマンの貴族ジャン・ドウ・ベタンクール Jean de Bethencourt が、少数の同勢を率ゐて大胆なる遠征を試み、スペイン王の援助を求めて、その一封侯として群島を開拓せんと企てたが、是亦その志を遂げ得なかつた。彼が群島を去りてローマに赴きし時、羅馬法王は彼に向つて下の如く告げたと伝へられる――『汝は偉大なる事業の創始者である。汝の後に来る教会の児等が、やがてギネアの国を征服するであらう』（註二）。而して此の予言は、僅に十年の後、ポルトガルの王子エンリケの発心によつて充たされた。

ポルトガルの海外発展は、一四一五年ジョアン一世が北阿のモール人を攻めてセウタ Ceuta を奪取せる時に始まる。セウタ遠征は、その本質に於て純然たる十字軍にして、決して植民的活動でない。而も此の遠征は、ポルトガルをして初めて海外に領土を獲得せしめ、且北阿モール人に対する基督教国の代表戦士たらしめたること

によつて、此国の海外政策に決定的影響を与へた。北阿モール人と戦ふため、またセウタに糧食を補給するためには、強力なる海軍の建設を必要とし、かくて従前は大陸国たりしポルトガルが、此時より初めて真個の海上国たらざるを得なくなつた。王子エンリケ Henrique が此の遠征に加はつた。而して王子は、大西洋上の諸島並に河弗利加大陸に勢力を伸べて、大ポルトガルを建設せんとする堅き覚悟を、恐らく北の遠征中に抱いて帰つた。

セウタ遠征は、栄誉ある戦場に武勲を輝かさんとせるジョアン一世の三王子、ドゥアルテ・ペトロ・エンリケの発意によると言はれる。そのセウタを目標とせるは、一老将の進言によれるもの、、択び得て極めて適切であつた。蓋し此地は、北阿西部に於て最も形勝の地位を占むるが故に、アラビア海賊は此地を根拠としてジブラルタル海峡に出没し、常に基督教国の船舶を掠奪して居た。半島に渡りて基督教徒と戦ふ北阿の兵士も、またセウタに於て徴募された。それ故に人々はセウタを『基督教国の鍵・スペインの恐怖』と呼んで居た。初めジョアン一世は容易に王子等の言に耳を藉さなかつたが、女王フィリッパが王子等に左袒して懇願するところあつたので遂に乞を容れて遠征を断行した。

ジョアン一世が遠征を認可するに至れる真個の動機は忖度し難い。或は王家並に王国を護持するものは好戦尚武の精神に外ならぬ故に、国民をして遠度に軍事に慣れさせ置くことを必要と考へたからだとする。或はモロッコの海賊が、今や漸く盛大に赴かんとする葡国海運を脅威し、時としてはアルガルヴェ海岸の劫掠をさへ敢てしたので、手痛き教訓を彼等に与へ、以てポルトガル国旗に対する敬意を鼓吹せんとしたのだとする。或はまた、イギリス及びドイツの商人が、セウタの富と其の相当に盛んなる貿易を説くを聞き、之を占領することが自国商人に利益を与へると考へたからだとする（註二）。恐らく其の総てであつたらう。いづれにもせよ一旦遠征と決す

るや王は極めて迅速に一切の準備を整へ、遠征軍を載せたる船隊は、一四一五年リスボンを発し、八月下旬阿弗利加海岸に到着し、直ちに上陸してセウタを奪取した。而して三千の守備兵を留めて直ちに軍を回した。そは極めて、微弱なる兵力であるけれど、幸に当時モロッコは無政府状態たりしため、ホルトガルは此町を保持するを得た。但しセウタの住民は、悉く家を棄てて去つたので、竟に単なる葡軍駐屯地となり、その経済的意義は失はれた。

〔註一〕 O. Peschel : Geschichte des Zeitallers der Entdeckungen, Leipzig. 1930. S. 47.

〔註二〕 Lannoy et Linden : Ibid., pp. 30—31.

第二節　エンリケの動機

さてセウタ占領は王子エンリケ Henrique（一三九四—一四六〇）の偉大なる事業の出発点となれることによつて、特殊の地位をホルトガル史上に占める。父はエンリケの武勲に酬いるため、彼を「基督団」の総長とし、アルガルヴェの知事に任じたる上、セウタの守護をも彼に託した。彼は之に依つてモール人に対する戦闘の直接指導の任務を負ふこととなつたが、喜んで其為に一生を捧げた。彼は単にセウタの周囲に於てモール人と戦ふことを以て満足するものでなかつた。ペシェルが『如何なる酒も其唇に上らず、また此唇は剛き髯の生へ揃ひてよりは未だ曽て女子の吻を味はなかつた』と言へる如く（註一）、己れを持すること最も厳格、而も何人も其口より叱咤の言葉の漏れしを聞かざりしほど他に対して寛恕、まことに希有の君子人なりし上に、企業的精神と、僧侶の宗教的情熱と、知識を求めて止むことを知らぬ好学の心とを兼ね備へたる此の王子は、モール人と戦ひて之を

服するために、一箇雄渾なる計画を胸に描き、その実現は同時に基督教のため、学問のため、並にホルトガルのために、最も偉大なる貢献をなすべきことを確信した。

さてエンリケは、後世『航海王子』と呼びならはされ、その事業は専らホルトガルの海上発展を目的として航海を奨励指導し又は当初より印度に到る海路の発見及び大西洋上の探険を目指せるものの如く考へられて居る。而して此の目的のために、彼はホルトガルの西南端、聖ヴィセント岬頭サグレス Sagres に居を定め、天文台並に学校を此地に建て、天文学者・地理学者・数学者・製図家等を普く欧羅巴諸国より招きて、学術の研究と海員の養成とに従はしめたと言はれて居る（註二）。さり乍ら此の伝説は、第十六世紀及び第十七世紀に至りて初めて唱へられたるものにして、恐らく王子の功業を厳飾するためのものと思はれる。彼がサグレスに建てたる『サグレス荘』又は『王子荘』に住むやうになつたのは、彼と同時代の歴史家の言によれば、其の晩年のことに属し、一四五〇年以前のエンリケの文書にして、サグレスに於て書かれしものは一通も遺つて居ない。また綿密を極めたる其の遺言状の中に、毫もサグレスの学校に言及して居ない。故に此の物語は、一個の伝説として斥けねばならぬ。彼は決して大西洋上に探険を試みんとしたのでもなく、また阿弗利加の南端を回りて印度に到らんと考へたのでもない（註三）。

然らばエンリケは果して何を目指したか。此の疑問を解く最初の手がかりを吾等に与へるものは、彼が最後に認めたる遺言状の劈頭の章句である。彼は先づ主なる神と聖母マリアとに呼びかけたる後、更に『わが誕生の時より之に献げられたる吾主聖ルイよ』と呼びかけて、聖ルイ並に一切の天使と聖徒とが、彼の救拯を神に乞はんことを求めて居る。茲に聖ルイと言ふは、此時を距る二百年前、その不幸なる経験によつて、サラセン人を聖地

及びエジプトより駆逐することの不可能なるを知り、チュニズィ Tunisie を征服して北阿に於ける基督教恢弘の第一歩を築かんとせるフランス国王、後に聖徒に列せしめられたるルイ九世である。この遺言状の章句は、エンリケが深くルイ九世の志業を追慕せることを示し、エンリケの動機が、その最後の根柢に於て十字軍的なりしことを、先づ吾等に立証する（註四）。

然らばエンリケは、如何にして其の十字軍を遂行せんとしたか。曰く、サハラの彼方に在るギネアに宣教して之をポルトガルの属領とし、且ナイル河の上流に在りとせられし基督教国と相結びて、前後より回教徒を挾撃し根柢より其の勢力を脅威することが、彼の十字軍の作戦であつた。

さてナイル上流の基督教国アビシニアは、第十二世紀以来種々なる姿に於て西欧文献に現れし神父ヨハネの伝説的国家と同視せらるるに至つた。伝ふるところに拠れば、中央亜細亜に伝道せるネストリウス派の宣教師が、驍大なる一汗国の君主を改宗せしめ、親ら一身を聖職に捧げて伝道に従事するに至らしめた。この君主は、神父ヨハネの名によつて弘く欧羅巴に喧伝された。其子或は其弟が位を継ぎ、名をダビデと呼んだが、成吉思汗のために征服せられ、第十二世紀末葉、この基督教汗国は遂に滅亡した。それにも拘らず人々は常に此国の存在を信じ、而も其の所在を審かにせざりしより、或は之を支那に在りとし、或は之を『印度』（註五）に在りとしたが後に阿弗利加に移されてアビシニアと同視された。エンリケが果して両者を同視して居たか否かは確め難い。但しジョアン二世以後に両者を混一せることは疑なき事実である。

またサハラの南にセネガル Senegal 河によつて潅漑せらるる豊沃なる土地あることは、夙くよりアラビア人に知られ、一一五〇年アラビア地理学者エドリスィ Edrisi が、シシリー王ロージャー Roger 二世のために作

製せる地図には、明白に此地を『ビラード・ガナ Bilad Ghana』として記入して居る。ビラード・ガナは『富裕の国』の意味である。北阿の回教徒はカラヴァンによつてサハラを越え、此地の黒人部族と通商を営んで居た。ギネアの名はガナの転訛なること言ふまでもなく、其の黒人はギネア人 Guineos と呼ばれた。エンリケ王子は其のセウタ遠征に際し、此の富める国土と其の住民に関する知識を、出来るだけ豊富にしたに相違ない。而して阿弗利加西岸を航してギネアに達し、此地を征服して之を『基督団』の支配下に置き、その住民を基督教に入らしめんと考へたことであらう。

当時行はれし地理学上の謬見が、一層容易に王子をして如上の計画を描かしめた。蓋しギネアを潅漑して之を富める国土たらしむるセネガル河は、アラビア地理学者によつて其源をナイル河水源に近き湖水に発するものと信ぜられ、西ナイル河と呼ばれて居た。真個のナイル河即ちナイル河は、神父ヨハネの国アビシニアを貫流して居る。いま若し西ナイル河を其の河口より水源まで基督教化するに於ては、西方の欧羅巴基督教国は、東方の基督教国と手を握り、之によつてモール人の勢力を腹背より脅威し得るのみならず、進んで紅海及びアラビアの諸港、乃至は印度及び支那に至る路も、また欧人冒険者の前に開かれるであらう。されば若しエンリケ王子が印度との交通を考へて居たとすれば、そは海路によつてではなく実に陸路によらんとせるものとするを至当とする。但し吾等は、此点についてエンリケの想像が何処まで高く翔つたかを知るよしもない。ただ彼の直接目的が、ギネアの征服と其の教化に在りしことだけは、ほぼ確実に断言し得る。さればこそ、彼の生涯と其の事業とを書き遺せる公けの史家アズララ Azurara は、其の書名を『ギネア発見征服記』とした（註五）。

而もエンリケ王子は、その十字軍的動機、即ち宗教的・政治的動機以外、更に経済的動機を有して居た。彼は

一つにはポルトガルの国富を増すため、又一つには巨費を要する彼自身の事業の資金を補ふため、貿易によつて利益を収めんとした。而して其の貿易は、彼の伝記作者アズララが、努めて之を隠蔽せんとせるに拘らず、実に奴隷売買を主とせんとせるものであつた。従来ポルトガル人及びスペイン人はモール人から黒人を買つて居た。ポルトガルの南部一帯は、わけても荒蕪の地多く、貴族も寺院も之を開拓する労力を切望して居たので、奴隷の需要は甚だ大であり、その売買は最も有利なる取引であつた。エンリケは先づカナリー群島の土人を捕へることによつて奴隷狩を練習せしめたる後、サハラ沙漠の海岸に於て捕獲すべき黒人を求めしめた（註六）。而して後に述ぶる如く、彼の派遣せる船隊が、ギネアより黒人を輸入するに及んで、国民は初めて彼の事業の価値を認めた。

〔註一〕 Peschel : Ibid., S. 48.

〔註二〕 Zimmermann, Morris, Peschel 等の諸植民史家を初め、スティーヴンは上掲『ポルトガル史話』に於て、Gunther は其の『地理学史』に於て、皆な此の伝説を事実として居る。

〔註三〕 E. J. Payne : The Age of Discovery (The Cambridge Modern History, Vol. I, pp. 11—12) Lannoy et Linden : Ibid., p. 33.

〔註四〕 E. J. Payne : Ibid., p. 12.

〔註五〕 G. E. de Azurara の著書は C. R. Beazley の長文の序言を付して Chronicle of the Discovery and Conquest of Guinea として、一八九六—九九年 Hakluyt Society から出版されて居る。Cerveira といふ一記者が、再びこの王子の伝記を書いたが、それは政府のために押収せられ、讃美に満ちたるアズララの書が之に代つたと言はれる。アズララの読者は此事を念頭に置かねばならぬ。

〔註六〕 E. J. Payne : Ibid., p. 10.

第三節　エンリケの事業

エンリケは其志を行ふに当り、実に幾多の困難を克服せねばならなかつた。当時の船乗に取つてナン Não 岬以南の大西洋は恐怖すべき『暗黒の海』であつた（註一）。行けども行けども果てしなき阿弗利加海岸の烈日に焦けたる満目荒涼の砂浜は、船を泊すべき入江もなく、進んで赤道直下に至れば一切の生物其跡を絶つと言へる古来の伝説も決して偽りならずと思はれた。それ故にエンリケは、或は厳重なる命令により、或は少なからぬ賞与を懸けて、辛うじて乗組員を募集することが出来た。其上彼は航海上の知識を海員に与へるために、外国人の助力を仰がねばならなかつた。

最初の航海は既に一四一五年に始められたと言はれるが、その進歩は実に遅々たるものであつた。その最初の成績と見るべきは、一四一九年ジョアン・ゴンサルヴェス・サルコ João Gonçalvez Zarco 及びトリスタン・ヴァス・テイレイラ Tristão Vaz Teyreyra の両人が、暴風のために海上遠く吹流され、偶然マデイラ Madeira 群島の一島ポルト・サント Porto Santo を発見し、更に翌一四二〇年彼等が再び該島に航したる際、同群島の主島を発見し、その樹木鬱蒼たるに因みて之をマデイラと名けたることである。マデイラは『森』の意味である。群島は『基督団』に与へられ、エンリケ王子は国王の寵臣バルトロメウ・ペレストレロ Bartholomeu Perestrello をポルト・サント島の世襲知事に任じた（註二）。さり乍ら島々の発見は、もとエンリケの本旨に非ず、その目的とする所がギネアに達するに在りしことは、上述せる如くである。而もボジャドル Bojador 岬は、ホルトガルの船乗に取りて越え難き障碍であり、年々派遣せられし孰れの船隊も、敢て其南に進まんとしなかつた。

其後一四三四年に至り、ジル・エアンネス Gil Eannes 初めてボジャドル岬を回り、次でアフオンソ・ゴンサルヴェス・バルダヤ Affonso Gonçalves Baldaya が、一四三六年リオ・デ・オーロ Rio de Ouro に達するを得た。而して此時既に奴隷狩が試みられたらしい。この目的のために船中には馬をさへも積んで居た。而も此の海岸の混血黒人は慓悍敏捷、カナリー島土人などとは比ぶべくもなかつた。アズララの言葉に従へば探険隊員等は『彼等の主人の望みを叶へんとて、或は男子を生捕り、或は女子や小児を狩出さんと、リオ・デ・オーロの入江や、更に遠くはアングラ・デ・シントラ Angra de Cintra の入江を探しまはつた』が、遂に得るところ無かつた。彼等は僅に海豹の皮及び油を獲ただけであつた。

一四三七年の不幸なる第二次北阿遠征は、一時エンリケの事業を中止せしめた。この遠征は武勇に憬れし王弟フェルナン Fernão の切なる願望に動かされ、エンリケが当時既に王位に即きたる長兄ドゥアルテに乞ひ、重臣の多数、王子ペトロ、及び都市代表者等の反対を押して敢行されたものであつたが、所要兵数の半ばを募集し得たにすぎなかつた。エリンケは親ら軍を率ゐて北阿に上陸し、タンジール Tangier を攻めんとして却つて敵の大軍に囲まれ、弟フエルナンが人質として敵の手中に残つたので、辛うじて生還するを得た。敵はホルトガルがセウタを還附するに非ずばフェルナンを釈放せずと宣言した。エンリケは愛弟のためにセウタを放棄せんとしたが重臣等が之に反対したので、フェルナンは遂に長き幽囚の後、悲壮なる最期を遂げねばならなかつた。若し此時セウタを放棄したならば、単り王子の生命が助かりしのみならず、ホルトガル其ものに取りても極めて幸福であつたらう。之を維持することとなりし為に、ホルトガルの国力を疲弊せしめる北阿十字軍が、今後も続行されねばならなかつた。

次で、翌一四三八年ドゥアルテ死し、王位を継げるアフォンソ五世は、尚六歳の少年なりしを以て、エンリケの兄ペドロ王子が摂政となつた。やがて一四四一年に至り、エンリケはそれぞれ、アンタン・ゴンサルヴェス Antam Gonçalvez 及びヌノ・トリスタン Nuno Tristam を隊長として、二箇の探険船隊を派遣した。この航海に於て初めて両人ともリオ・デ・オーロに於て土人を捕へることが出来た。前者の捕へたのは男女各一名にすぎなかつたが、後者は男子十名及び若干の女子と少年を捕へ、中に一人の酋長さへも居た、翌一四四二年ゴンザルヴェスは、二人の酋長を捕へて之を五名の土人と交換し、且若干の金粉と鳥の卵とを齎し帰つた。翌一四四三年トリスタンは、遠くブランコ Blanco 岬を回りてアルギン Arguin 島に達し、其船に積み得るだけ多数の土人を捕へて帰つた。

此時までエンリケの事業は、殆ど賛成者を国民の間に有しなかつた。商人も船主も、彼の航海について何等知らんと欲しなかつた。それのみならず彼の大西洋諸島開拓は、国家の利益に反するものとして非難された。国内を荒廃に委ねて新しき領土を求むる君侯が何処に在るかと彼等は叫んだ。エンリケが多年此等の非難を浴び乍ら毫も其の初志を翻すことなく、何者を以てしても動かされざる堅固なる自信を以て、飽迄も其の事業を遂行し来れる堅忍不抜の精神は、後世永く嘆賞に値する。而も輿論は今や一変した。いまや彼は自己の資力を以て国富の源を開きたる国家の恩人として讃へらるるに至つた。アズララは其の目撃せるままに記して曰く『人々は第一船が奴隷を載せて到着せるを見、第二船が直ちに続けるを見、且第三船はヌノ・トリスタン之を指揮して海上に在りと聞いた。其時に非難の声は讃美の声と変り、王子は新アレキサンドルと呼ばれた』（註三）。此等の船が入港せるラゴス Lagos では、会社を組織して大規模に事業を行はんとし、その認可をエンリケに求めた。ラゴスの

税関長ランザローテ Lanzarote が、エンリケの認可を得て六焦の船を率ゐ、『基督団』の旗を掲げてブランコ岬に遠征し、二三五名の土人を捕へて帰港した。奴隷は飛ぶ如く売れた。税関長はエンリケによつて士分に引立てられた。

いまや阿弗利加事業は強く国民の関心を惹くに至つた。エンリケは一定の条件の下に総ての冒険者に遠征を許したので、永年に亘りて訪ふものなかりし阿弗利加西岸に、いまやポルトガル船舶の輻輳するを見た。一四四五年には二十六隻より成る船隊が、またもやランザローテの指揮の下にラゴスを出帆した。そのうちの六隻は、エンリケの命令を奉じてギネアを目指し、セネガル河を探るべく、南へ南へと航海を続けた。やがて彼等は椰子及び其他の鬱蒼たる樹林を見、美しき熱帯鳥類の船の周囲に飛び交ふを見、水中に泳ぐ魚類の変れるを見て、目的地の遠からぬを知つた。遂に彼等は海水が陸地を距る六哩の沖まで濁れるに会ひ、之を掬して其の淡水なるを確め、河口に至りて船を泊した。かくてエンリケの目的は先づ遂げられ、ビラード・ガナに基督団旗が翻された。彼の許可を得たる船主等は相次で此地に航し、初めて土人を捕へてより七年、セネガル河発見後三年に過ぎざる一四四八年には、実に九二七人の阿弗利加奴隷がポルトガル市場で売買せられ、其の多数がアズララの言葉によれば『真の救の道』に入つた。

セネガル河が発見せられし其年にエンリケの傭使せるヴェニス船長カ・ダ・モスト Ca da Mosto 及びジェノア船長アントニオ・デ・ノラ Antonio de Nola が共にヴェルデ Verde 岬を越えてガムビア Gambia 河に達した。一四四六年、両者は更にガムビア河口を越えてロソ Roxo 岬の南方に進み、且ヴェルデ岬群島をも発見した。而してヴェルデ岬以南の国土からは、エンリケを喜ばすべき珍奇なるもの、即ち象牙と生きたる獅子とを携

へ帰つた上に、此等の地方が黄金に富むといふ報告をも贈した。ガムビア河以南の国土に産する象牙と金粉とが、いまや奴隷よりも一層有利なる貿易品たらんとした。一四四八年にはアルギン Arguin に堡塁を築いて貿易の根拠地とした。一四五四年、羅馬法王はポルトガルの請に応じ、葡王の許可なくして他国船舶の『ナン岬よりギネアの果まで』阿弗利加沿岸に航することを禁じた（註四）。而して探険は其後も間断なく進められ、一四六〇年エンリケが死せる時には、恐らくシエラ・レオーネ Sierra Leone まで達して居た。

エンリケの業績は之を其の表面より見れば些々たるものであつた。その四十余年の探険航海は、僅に十八緯度の間を明かにしたにすぎぬ。而も彼の此の努力なくしては、ビーズリC. R. Beazley が適切に道破せる如く『ディアス、コルムブス、ダ・ダマ及びマジェランの偉大なる四十年（一四八〇―一五二〇）の成果は、長い間、恐らく何時とも知らぬ遠い未来に延ばされたことであらう』（註五）。

〔註一〕 Não は否定の言葉、ナン岬は勿来岬といふに当る。北緯二九度一八分。

〔註二〕 コルムブスの妻は此のペレストレロの女、彼は其妻と共に暫くポルト・サント島に住んだことがある。

〔註三〕 Azurara : Discovery and Conquest of Guinea, Vol. I, p. 61.

〔註四〕 ツィムママンを始め、多くの史家は、王子が既に一五四一年法王 Martin V からボジャドール岬より印度に至る間に発見せらるべき一切の国土の領有権を与へられたとして居る。こは João de Barros が其著『亜細亜』の中に此の法王教書を根拠としてジョアン二世が後にスペインに抗議したと述べて居るに拠れるものである。その信じ難きことは Lannoy が適切に説明を加へて居る（上掲書五三頁）。少くとも其の法王教書の原文は存在せず、日付も知られて居ない。

〔註五〕 Azurara : Ibid., Vol. I, vii.

第四節　喜望峰発見

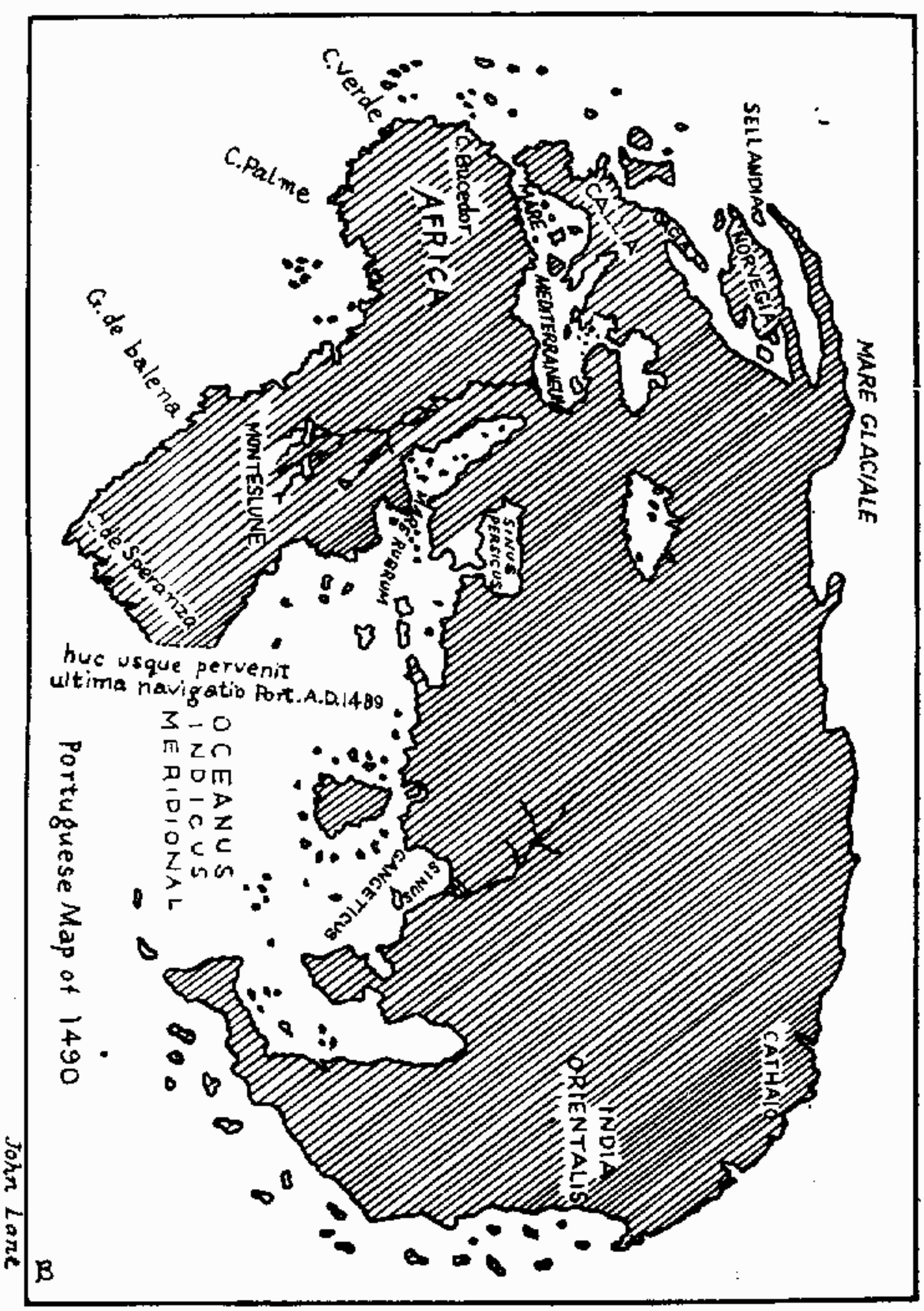
時の葡王アフォンソ五世は、その十字軍的精神の強烈に於て正にアヴィス家の血を継いで居た。一四五三年トルコ人のコンスタンチノープルを陥れるや、法王ニコラウス五世は基督教諸国の君主に向つて十字軍を慫慂した。王は直ちに之に応じて出征準備に着手したが、他国の君主は一人として之に加はらんとする者なかつた。かくて君府遠征は断念せねばならなかつたので、アフォンソ五世は其軍を北阿に用ゐ、一四五八年二万二千の大兵を率ゐて海を渡り、アルカーセル Alcacer を略取して一旦軍を回し、更に第二回遠征に上らんとせる時、叔父エンリケの死に遭つた。エンリケは独身の生涯を送りしを以て実子なく、アフォンソ五世の弟フェルナンを嗣子としたがフェルナンは其の叔父の遺業を続行する意図なかつた。蓋し彼は之に要する巨額の費用を恐れたのであらう。蓋しエンリケは基督団総長としての莫大なる収入を傾け尽せるのみならず、巨額の借財をさへ負うて居たのである。

而も国王はエンリケの崇拝者なりしを以て、自ら其の叔父の遺業を継承し、一四六一年アルギン堡を修復し、一四六一・六二年相次いで二回の遠征船隊を派遣した。ただ王が主として心惹かれたるは北阿征討なりしが故に事業の中絶せざらんため、毎年五〇〇クルサド Crusados を納付し、且毎年三百哩づつ沿岸探険を遂行する条件の下に、西阿貿易独占権を、五箇年間リスボン商人フェルナン・ゴーメス Fernão Gomez に与へた（註一）。ゴーメスの船は北阿の西南端パルマス Palmas 岬を回り、象牙海岸を過ぎ、黄金海岸に達した。そはダホーメ Dahomey・ベニン Benin 両国の海岸に沿ひて進み、ナイジャー Niger 河口のテルタを過ぎ、ビアフラ Biafra

湾に至りて海岸の南に屈曲するを見、之に沿ひて南下して聖カタリーナ Santa Catharina岬（南緯一度五二分）に達し、サン・トメ São Thomé、アンノボン Annobon、プリンシペ Principe 諸島を発見した。一方国王自身は専らモロッコ経略に従ひ、一四七一年アルズィラ Arzilla 及びタンジールの二市を占領した。この遠征は既に国民をして戦費の重課に悩ましめたが、其上国王は隣邦カスティルとも事を構へた。

一四八一年アフォンソ五世死し、ジョアン二世王位を継いだ。彼は既に述べたる如く、内に於ては貴族の勢力を抑へ、外に対してはジョアン大王の賢明なる政策に復帰してカスティルとの平和を回復し、且無用なる北阿遠征を止め、主として力をエンリケの遺業に傾倒した。このころは西阿貿易の有利なることが既に明瞭に知られて居た。王は即位と共に西阿海岸の諸地に商館を置き、一四八二年にはアプロビ Aprobi 金鉱に近きエルミナ El-mina に堡塁を築き、以て黄金海岸に於ける根拠地とし、沿海各地に石柱を樹てて葡領たることを銘記し、且公けに『ギネア君主』と称へた。而して航海術の進歩、船舶の改良のためにも熱心に努力した。

次で一四八四年ディエゴ・カン Diego Cam がコンゴー Congo 河口に達し、若干之を溯れる後、四人の土人を伴ひて帰国したが、彼等は容易にポルトガル語を習得し、彼等自身の国土並に其の彼方なる沿海地方について重要なる知識を葡人に提供した。翌年ディエゴ・カンは此等の土人と共に再びコンゴーに赴き、航路を南に進めたが、此度は多く得るところ無かつた。翌一四八六年王は、阿弗利加大陸の南端を窮めよと命じてバルトロメウ・ディアス Bartholomeu Diaz を派遣した。彼はコンゴー河口より陸地に沿ひてシエラ・パルダ Sierra Parda（今日の Lüderitz 湾附近）まで南下し、それより海岸を離れて海洋に出たが、強き西風のため再び海岸に吹寄せられモッセル Mossel 湾に到着した。即ち彼は自ら識らぬ間に喜望峰を回りて、その東方に達して居たので



Portuguese Map of 1490

John Lane

一四九〇年ポルトガルにて作成された世界地図

ある。彼は此地より陸地に沿ひてアルゴア Algoa 湾を過ぎ、グレート・フィッシュ Great Fish 河に達し、此処にて海岸線の遠く北東に向つて走れるを確め、其の航海の目的を遂げたことを知つた。かくて逆に喜望峰を回り、その風波の難を記念するため之を『嵐岬 Cabo Tormentoso』と命名し、一四八七年十二月帰国した。而して王は之を喜望峰といふ芽出度き名称に改めた。

先是ジョアン二世は、スペインに来れるアビシニアの僧侶、並に聖地巡礼より還れるポルトガル僧侶より、ナイル河上流の基督教国のことを聴き、之を以て名高き神父ヨハネの国なるべしと考へ、ペドロ・デ・コヴィリャン Pedro de Covilham 及びアフォンソ・デ・パイヴァ Affonso de Paiva の両人を此国に派し、其の実情を探らしめることにした。両人は一四八七年五月リスボンを発し、ナポリ、アレキサンドリアを経てカイロ Cairo に至り、更にモール人の隊商に加はりてアデン Aden に到達した。此処で両人は袂を分ち、カイロでの再会を約してコヴィリャンは印度に向ひ、パイヴァはアビシニアに入つた。前者は、モール人の船に同乗して印度マラバル Malabar 海岸に到り、カンナノル Cannanor、カリカット Calicut、ゴア Goa を見聞してペルシア湾頭オルムス Ormuz に出て、次で便船を得てアデンの対岸なる東阿の一港ゼイラ Zeila に到り、更に南下してソファラ Sofala に達し、海岸の西南に向つて走れること、及びマダガスカル Madagascar 島に関する知識を得た。彼は此の重大なる報告を携へて帰国の途を急いだが、一四九〇年カイロに至り、同伴者パイヴァの死を知つたので、王より此地に派遣せられし一猶太人に其の見聞を語りて国王に復命せしむることとし、彼自身は更にアビシニアに入つた。然るにアビシニア国王は、深く彼を信頼して其の帰国を許さなかつた。かくてコヴィリャンは、アビシニアに駐まること三十三年、遂に此国に死んだ。彼の報告の要旨は下の如きものであつた。曰く『ギネア

の海岸に沿ひて南航して止まざる船は、必ず大陸の南端に達すべし。船すでに東方の海に入らば、ソファラ又はマダガスカルを尋ねて航路を定むべし』。この報告は、ディアスの航海と相待ちて、海路印度に至り得べしとの確信を王に与へた。

さてポルトガルは阿弗利加海岸の探険を続行すること実に七十年、其間に探険目的に変化ありしことに何の不思議もない。この変化は、エンリケの死後に始まつたとするを至当とする。恐らくエンリケは其死に至るまで、最初の目的を易へなかつたであらう。王子の死後急速度に行はれし探険によつて、所謂『ギネア』の極めて広大の地域なることが確められ、阿弗利加大陸の形状もほぼ察知せられ、之と共に海路印度に到らんとする希望が生れ、ギネア征服よりも遥に有利なる東洋貿易が、ホルトガルの新しき目標となるに至つた。この推移、即ち経済的動機の優位と宗教的動機の優位との交替は、最もよく欧羅巴中世史より近世史への推移を象徴する。

而もホルトガルが尚未だ最後の目的を遂げざる前に、一四九二年コルムブスがスペイン君主のために大西洋の彼岸に『印度』を発見した。コルムブスは曾てホルトガルに向つて其の計画を提議したが、荒唐無稽として斥けられ、去つてスペインに赴けるものである。それは種々なる意味に於て深甚なる衝動をリスボンに与へた。ジョアン二世は武力を以てスペインの西航を阻止すべく、その艦隊に戦争を準備せしめた。スペイン君主はホルトガルとの衝突を避けて法王の審判を仰ぐこととした。而して時の法王アレキサンドル六世は、一四九三年五月三日の教書によつて、コルムブス及び其他のスペイン国民の発見する国土に対し、曾て法王が阿弗利加に於てホルトガル人に与へたると同一の権利を与へた。而して更に翌五月四日の教書に於て、アソーレス及びヴェルデ岬群島の西方一〇〇レグァの地点を横ぎりて『極より極に至る』一線を劃し、その『西方及び南方』の国土をスペインに

属すべきものとした。

この教書は、アソーレス群島とヴェルデ岬群島とを混同せるのみならず、境界線の『南方』なる語が無意味であり、従つて極めて不完全なる判決なりしに拘らず、永く西葡両国の外交折衝の基礎となつた。而して一四九四年六月七日、両国の間に締結せられ、一五〇六年一月二十四日、法王ユリウス二世によつて批准せられしトルデシラス Tordesillas 条約により、境界線はヴェルデ岬群島の西三七〇レグアの地を横ぎることとなつた。但しそは群島中の孰れの一島を起点とするかを定めず、またレグアの長さも正確に定められず、或は之を五二九〇米とし、或は之を六一三五米とせるが故に、後に屢々紛議の因となつた。さり乍らそは西葡両国の征服の方向を、一は西へ、他は東へと定め、かくして互に相争ふ両国を、それぞれ別箇の途に進ましめたる点に於て、境界線としての役目を勤めたものと言ひ得る。

〔註一〕 Danvers, Stephen, Payne 等の所説による。 Lannoy は期限六年、納付金三〇〇ミルレイス（九三七〇法）とし、Peschel, Zimmermann は期限五年、納付金五〇〇ドゥカットとする。

第三章　印度航路発見と初期印度遠征

第一節　ヴァスコ・ダ・ガマの印度航路発見

コルムブスの成功は、ポルトガルをして其の志業の遂行を急がしめたが、ジョアン二世は遠征準備中に死

一四九五年マノエル Manoel の即位を見た。而して葡国八十年の努力の結果は、此王によつて掴得されることとなつた。ホルトガルは此王の時代に於て、実に空前絶後の隆興を見た。而も此の栄誉は、主として彼の祖先の遺徳によるものにして、彼自身の力によるものに非ざる故、葡国史家は決して彼を『大王』とは呼ばず、いみじくも之を『幸運王』と名づけた。いづれにせよ彼は父王の志を継いで印度への航路を開くべく、父王が選び置きたる貴族ヴァスコ・ダ・ガマ Vasco da Gama を指導者として、即位の翌年直ちに遠征の準備を整へしめた。ダ・ガマは此時齢三十六歳、丈高からず、顔色晴れやかにして体躯肥大、その挙措は乱暴、気性は残酷にして激越、万難に堪ゆる体力と、滾々不尽の精力と、不撓不屈の意力とを具へ、まことに鋼鉄の如き人物であつた。かくの如きダ・ガマの性格は、ホルトガル人の印度に対する初期の関係に、極めて重大なる影響を及ぼして居る。

さてリスボンより印度への航海は、実に空前の大業であつた。ヴィルデ岬より喜望峰に至る此の航海の最初の部分だけでさへ、沿岸航海を避けて出来るだけ海上を直行しても、コルムブスの航程より遥に大である。コルムブスはカナリー群島よりバハマ Bahama 群島までの二六〇〇哩を、三十六日で航海した。然るにヴィルデ岬より喜望峰までの距離は、実に三七七〇哩に達する。逆風と潮流とに苦しめられしダ・ガマは、此間を航するに九十三日を要した。彼が一切の準備を了へてリスボンを出帆せるは一四九七年七月八日、船隊は四隻より成り、乗組員は総じて一六〇名であつた（註一）。その八月三日ヴィルデ岬群島を発してよりは、十一月に入るまで陸地を見ず、此月八日セント・ヘレナ St. Helena 湾に碇泊し、八日間滞在して船舶を修繕し、薪水を積んだ。十六日此地を出帆し、二十二日喜望峰を回り、二十五日モッセル湾に入りて十三日間滞在、十二月八日また航程につき、八日の後曽てディアスの航海の終点なりしグレート・フィッシュ河口を過き、逆潮に会ひて難航を続け乍ら

基督降誕祭の日に一碇泊所に着し、依つて此地をナタル Natal と名づけた。ナタルは誕生の意である。次でローレンソ・マルケス Lourenço Marques 湾及びキリマン Kiliman 河口に寄港せる後、岸を離れて再び海上に出で、一四九八年三月二日、モサンビク Mozambique に到着した。此地の回教徒はアラビア語を話したので、ダ・ガマは其の携行せる通訳者によつて、自由に彼等と意思を疎通することが出来た。それ故にダ・ガマは、もはや此地に於て東西両洋を結付けたと言ひ得るであろう。

此後の航海は困難でなかつた。この海洋は上古からアラビアの船乗及び商人に知られて居た。彼等は好意を以てダ・ガマを迎へ、彼のために一水先案内を周旋した。彼はモサムビクよりモムバサ Mombassa に至り、此処に初めて印度人に会ひ、之を基督教徒と思込んだ。次でマリンディ Malindi に至りて一層多数の『基督教徒』即ち印度人の居留せるを見た。彼は此地で一人の『基督教徒』の水先案内を得、無事に印度洋を横ぎり、五月二十日印度マラバル海岸なるカリカット Calicut の沖に投錨するを得た。リスボンを出帆してより実に十箇月と十二日を経て居る。

後に詳述する如く、カリカットは当時世界に於ける最大最富の商港の一つであつた。マラバル海岸の胡椒と生薑、セーロン Ceylon の肉桂、モルッカ Molucca 群島の香料、乃至は支那の産物まで、皆な此地に集まり、アラビア人の手によつて欧羅巴に供給されて居た。アラビア商人は夙くより此地に居留し、二箇の礼拝堂と一箇の裁判所とを有して居た。此等のアラビア商人に取りて、葡人の出現は最も望ましからぬ事であつた。彼等が商人としての鋭き直覚は、その独占し来れる欧亜貿易が、この闖入者によつて必ず打撃を蒙るべきを知つた。但し此国の君主に取りては、風波に暴されたるダ・ガマの船と、その多くもあらぬ乗組員とは、特別に警戒を要するも

のと見えなかつた。彼は葡人渡印の深甚なる意義を洞察し得なかつた。それ故に彼はアラビア商人の讒誣に拘らず、大体に於て好意を以てダ・ガマを遇した。而してダ・ガマは、アラビア人の妨害に拘らず、其船に胡椒・生薑・肉桂・丁子・肉荳・及び紅玉其他の宝石を積むを得た。但だダ・ガマが此港に商品と代理人とを駐在せしむる許可を求めたるに対し、君主は慣例による関税の支払を求めた。然るにダ・ガマは此の要求に応じ得なかつたので、君主は代理人を捕へ、且商品を押収した。ダ・ガマは之に対する報復として、印度人十数名を捕へて人質とした。而して其後君主が葡人並に其の商品を還付せる後も、ダ・ガマは五名の印度人を捕へたままカリカットを去つた。此事は極めて悪き印象を君主に与へた。かくて彼は暫くマラバル沿岸を航したる後、帰国の途につき一四九九年九月リスボンに帰着した。船は四隻のうち二隻を失ひ、生還せる乗組員は一六〇名のうち僅に五五名であつた。

初め国王のダ・ガマを印度に派遣せんとするや、重臣は挙つて之に反対し、人民もまた悪罵を沿びせて出帆せる船隊を見送つた（註二）。而も今ダ・ガマが高価なる東洋貨物を舶来し、其の価格は実に船舶艤装費に六十倍せるを見るに及んで、国王の満足は言ふまでもなく、国民また悉く歓呼の声を揚げた（註三）。彼等は曩日の悪罵を忘れ、世界最富の国がポルトガルの為に開かれたるを欣び、ダ・ガマの成功は全国を通じて祝賀された。国王は『エティオピア・アラビア・ペルシア・印度の航海・征服・通商の主』と称へた。ダ・ガマは多額の賞金を賜はり、世襲印度海軍提督に任ぜられし上、年々二百クルサドの肉桂を印度にて購ひ、之を無賃にてポルトガルに将来する世襲権を与へられた。

〔註一〕F. C. Danvers : The Portuguese in India. London, 1894. Vol. I, p, 43. 船舶の噸数並に乗組人員につ

いては数種の異説あるが、コルムブス四百年記念祭に際して、ホルトガル政府が発行せる印刷物に拠りて、乗組員を一六〇〇名とした。

〔註二〕 Sir W. W. Hunter: A History of British India. London, 1919. Vol. I, p. 91.

〔註三〕 F. C. Danvers: Ibid., p. 64.

第二節　初期印度遠征

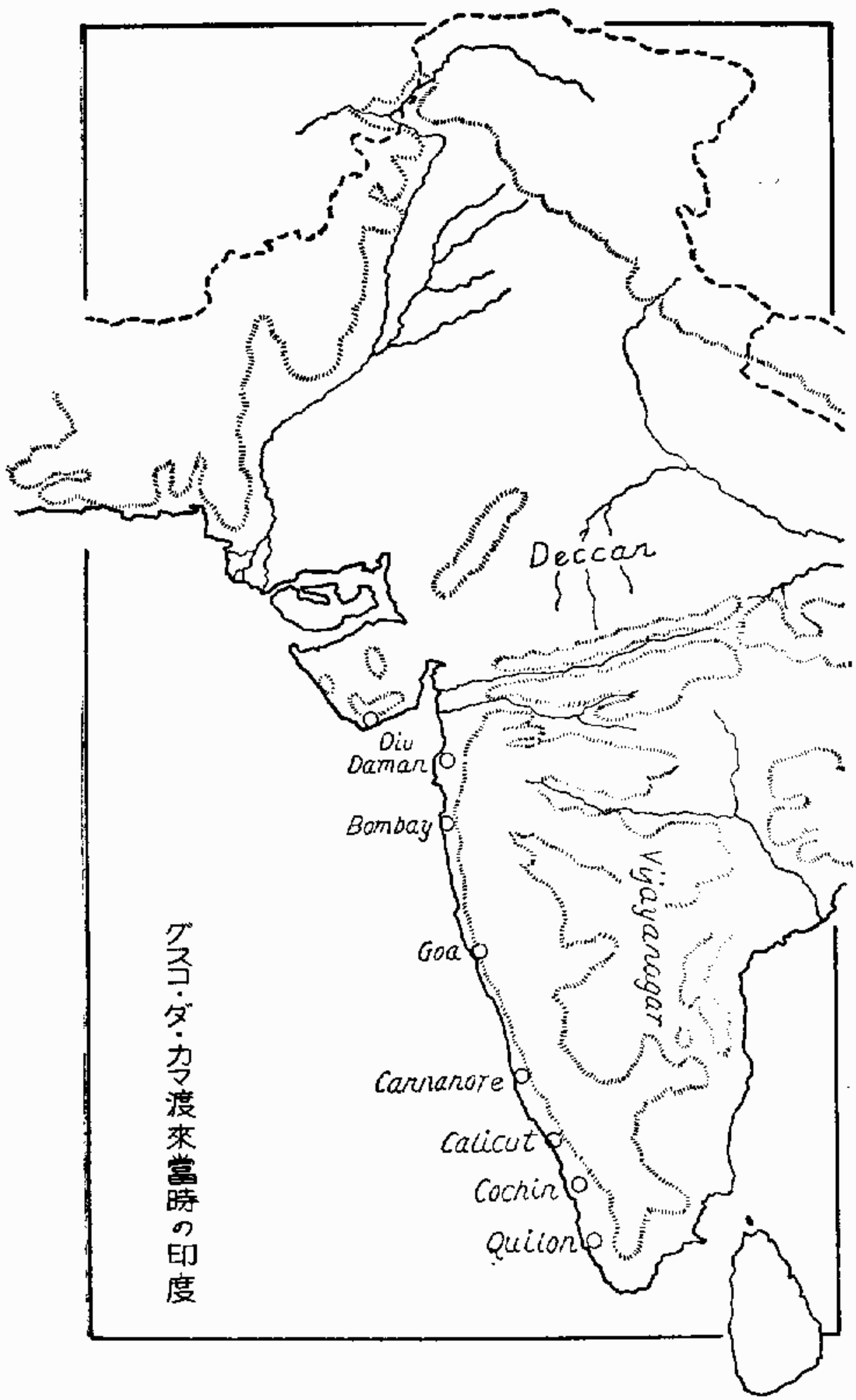
ヴァスコ・ダ・ガマ以前に於て、葡人は印度について殆ど何事をも知らなかつた。ダ・ガマの遠征の主なる目的は、印度に至る航路の発見と、印度事情の調査とに在つた。而してダ・ガマの調査が如何に不完全なるものなりしかは、彼が回教徒以外のマラバル印度人を、基督教徒と信じて疑はざりしことによつて察せられる。但し彼は、印度貿易がアラビア人によつて掌握されていること、ホルトガルが其の目的を遂げるためには、東洋に於てもまた回教徒と戦はねばならぬことだけは、誤りなく看取して来た。かくて彼の報告に基き、遺憾なく武装せる十三隻の船隊を編成し、一二〇〇名の船員を乗組ませ、ペドロ・アルヴァレス・カブラル Pedro Alvares Cabral を司令官とし、一五〇〇年三月九日、印度に向つてリスボンを出帆せしめた。カブラルは数々の命令を国王より受けたが、その最も肝要なるは、マラバル海岸に商館を置き、東洋貨物を仕入れて年々来船すべき王室の船舶に積込ますことであつた。

カブラルの率ゐし船隊は、潮流と東風とのために遠く阿弗利加の海岸を離れ、四月二十一日偶然南米ブラジルを発見した。五月三日再び針路を東南に取りて喜望峰に向つたが、途中暴風に遭ひて四隻沈没、一隻はマダガス

カル島に乗上げ、僅に六隻を率ゐて九月十三日カリカットに着いた。カリカットの君主は彼の要求に応じ、条約を結んで商館の設立を許した。而も此間アラビア人は極力葡人の香料買入を妨げたので、土地の事情に通ぜざる葡人は、到着後三箇月に垂んとするも、其の集め得たる貨物は僅に二隻の船を満たすにさへ足らなかつた。カブラルは君主の助力を請うたが、それでもはかばかしく運ばなかつた。依て彼は十二月十六日、港内に碇泊中の一アラビア船を襲ひ、其の積荷を掠奪した。この暴行は住民を激昂せしめた。彼等は葡国商館を襲ひ、葡人五十名を殺した。カブラルは之に対する報復として、事件とは何の関係もなきアラビア船十隻を襲ひ、火を之に放ちて船員を焚殺し、且二日間カリカット市を砲撃したる後、錨を抜いてコーチン Cochin に赴いた。

カリカットと反目の間柄なりしコーチン王は、カブラルの来航を歓迎し、廉価に香料を提供したので、二週間以内に貨物を満載することを得た。彼はコーチン王と条約を結び、他日王をカリカットの君主たらしむべしと約し、商館の設置を許された。コーチン碇泊中、彼はカンナノル Cannanore 及びキロン Quilon の君主からも親善なる招待を受けたので、マラバル海岸にはカリカット以外、幾多の商港あるを知つた。一五〇一年一月九日、彼はカリカット王が八十隻の船隊を以て彼の討伐に向へりとの報道に接し、陸上に残せし三十名の葡人に挨拶する遑もなく、また船上の人質をコーチン王に還す遑もなく、匆惶として其夜密かに出港した。而して途に更に一隻の船を失ひ、僅に五隻だけが七月リスボンに帰着した。而も其の齎せる貨物からの利益は、全航海費を償うて余りあつた。

国王はカブラル帰着に先だち、既に一五〇一年四月、ジョアン・ダ・ノヴ João da Nova の率ゐる四隻の船隊を印度に派遣したが、彼もまたカブラルと同じく、カリカット碇泊中の船舶を劫掠し、コーチン・カンナノル



グスコ・ダ・カマ渡來當時の印度

の諸港より貨物を積みて帰国の途につき、一五〇二年リスボンに着いた。

カブラルの印度航行は、彼が政治的に無為無能なることを示せるものであるが、その経験はポルトガルの対印政策を決せしめた。即ちマノエル王は、マルバル諸港との平和なる貿易を捨て、アラビア人を駆逐し、武力による印度貿易の独占を期するに至つた。王は此の目的のために、一五〇二年春（註二）、再びヴァスコ・ダ・ガマを司令官とし、二十隻より成る一大船隊を印度に派遣し、うち五隻は之を印度に残して、マラバル海岸の警備に従はしめることとした。ダ・ガマの第一遠征は、既に述べたる如く発見調査のためであつた。第二のそれは、貿易独占のため印度海岸に恒久的根拠地を確保するに在つた。而して彼は大体に於て此の目的を遂げた。彼は印度に至る途上、東阿の諸港に寄泊し、ソファラ、モサンビクに商館を置き、キロア Kilwa (Quiloa) 王に服従を誓はしめ、十月下旬カリカットに到着した。カリカット君主は和議を進めんとしたが、ダ・ガマはカリカットに於ける回教徒全部の放逐を要求したので破談となつた。彼はカリカットに砲火を沿びせ、アラビア人の商船を劫掠せる後去つてコーチン・カンナノル・キロン及びバテイカラ Baticala の諸港と密接なる通商関係を結び、コーチン及びカンナノルに商館を設置した。カンナノルでは、君主の許可を得て大砲弾薬を陸揚したが、人民の反感を激成せんことを恐れ、之を地中に埋蔵した。而してヴィセンテ・ソドレ Vicente Sodré を司令官として一艦隊を印度海上に残し、自らは帰国の途についた。

而も此の遠征の間に於ける彼の行動は、言語を絶して残忍酷薄であつた。彼は印度海岸に達せる時、二四〇名の男子、及び多数の女子と幼者とを載せて紅海より来れる回教徒の商船と会ひ、八日に亘る迫害の後、火を之に放ちて乗組員の殆ど総てを焚殺した。その目撃者の一人は『此日は予の生涯忘れ得ぬ日であつた』と書き遺して

居る（註二）。また彼のカリカット碇泊中偶々コロマンデル Coromandel 海岸より米を積みて来りし印度船舶を襲ひ、その貨物を掠奪せる後、乗組員八〇〇名の手を斬り、耳及び鼻を殺ぎ、脚を縛りたる上に棍棒もて其歯を挫き、之を数隻の船に積み、蓆や枯草もて其上を蔽ひ、火を放ちて岸辺に流しやつた。またカリカット君主の使者として来船せる一婆羅門は、間諜なりとの故を以て唇と耳とを殺がれ、代りに犬の耳を縫付けて追ひかへされた（註三）。

かくてヴァスコ・ダ・ガマは、一五〇三年九月、一応その任務を果たしてリスボンに凱旋した。而も彼の残忍酷薄に憤激せるカリカット君主並に回教徒は、彼の印度を去るや、直ちにコーチンを攻めて其都を囲み、在留葡人の引渡を要求した。コーチン王は此の要求を拒みて勇敢に苦戦を続け、新しき艦隊のポルトガルより来着せるによつて救はれた。即ち此年三月アフォンソ・ダルブケルケ Affonso d' Albuquerque は三隻、四月には其の従弟フランシスコ・ダルブケルケ Francisco d' Albuquerque は四隻の艦隊を率ゐてリスボンを発し、稍々後れてアントニオ・デ・サルダニヤ Antonio de Saldanha の艦隊も亦其後を追うた。而してフランシスコの艦隊が九月印度に先着し、次でアフォンソの艦隊また到着したので、カリカット軍をコーチンより撃退し、王の許可を得てポルトガル要塞をコーチンに築いた。而してドゥアルテ・パシェコ Duarte Pacheco 以下九〇名の葡人を要塞に残して帰途についた。サルダニヤの第三艦隊は、東阿海岸を探険し、海上アラビア人の船と見れば悉く之を掠奪しつつ、紅海の入口まで進み、印度エジプト間の通商を妨げた。ダ・ガマが印度に残せるソドレの艦隊も、また紅海より来るエジプト貿易船を捕獲するために出動したが、ソコトラ Socotra 沖に難船してソドレは水死した。

さてカリカット君主は、一旦アルブケルケのために撃退されたが、其の艦隊が帰国の途に就くや、直ちにまた大軍を挙げてコーチンを攻めた。パシェコは、僅に九〇名の葡人と三〇〇名の印度兵とを中堅とし、味方に数十倍するカリカット軍と戦ふこと五箇月、一五〇四年六月に至り、遂にカリカット君主をして攻撃を断念して退軍せしむるに至つた。そはパシェコをして『葡国アキレス』の名誉ある称号を博せしめたとともに、葡人の武勇はマラバル海岸一帯を震駭せしめた。而してポルトガルは此の戦勝によつて、二箇の最も重要なる経験と教訓とを得た。一はポルトガルが印度に於て地歩を確保するためには、相反目する君主の一方を援くることの有利なること、他は印度兵を訓練して葡人指揮の下に置けば、大なる武力を養ひ得ること。

同じく一五〇四年四月、ポルトガルに於て建造せられし空前の巨艦十三隻よりなる艦隊が、ロポ・ソアレス・デ・アルベルガリア Lopo Soarez de Albergaria に率ゐられてリスボンを発し、九月印度に到着した。彼は飽迄もアラビア勢力をマラバル諸港より駆逐する政策を強行し、カリカットを砲撃し、クランガノル Cranganor 及び其の港内に碇泊せる船舶を焼いた。かくてアラビア商人中の要慎深き者は、年々来航する葡国艦隊に対し、マラバル海岸印度諸君主のつひに無力なるを見、一大船隊に財貨を積み、印度よりペルシア及びエジプト方面に引上げんとした。而してソアレスは其の一七隻を拿捕して貨物を奪ひ、老若男女二千を殺し、殆どマラバル海岸に於けるアラビア人の覇権を覆し去つた。

かくて一四九九年ヴァスコ・ダ・ガマがリスボンに凱旋してより六年の間に、ポルトガルの対印政策は四箇の段階を経た。『第一は単に船舶の往復によつて印度貿易を営まんとした。第二は陸上に商館を置き、密に之が防備を講じた。第三は公けに堡塁を印度に築き、武力を以て貿易を強行せんとした。第四に南印諸港に於けるアラ

ビア勢力に一大打撃を加へ、そのペルシヤ並にエジプトとの交通を妨げ、マラバル海上に於ける葡国勢力を夙くも確立した』（註四）。

〔註一〕その出帆の日は、或は三月二十五日とし、或は二月十日とする。
〔註二〕Whiteway : Ibid., pp. 91—92.
〔註三〕Danvers : Ibid., Vol. I, p. 85. Hunter : Ibid., Vol. I, p. 109.
〔註四〕Hunter : Ibid., Vol. I, p. 113.

第三節　第十六世紀初頭の印度

茲で吾等は翻つて当時に於ける印度の状態を省みなければならぬ。多くの史家が異口同音に言ふ如く、ポルトガル人が第十五世紀末葉に印度マラバル海岸に到着せることは、実に時と処とを得たるものにして、彼等にとりて此上もなき幸運であつた。

マラバルは西ガッツ West Ghats 山脈と印度洋との間に横はる狭長なる沿岸地帯にして、嶮峻なる連山によつて印度の他地方と隔離されている。ヴァスコ・ダ・ガマが最初に投錨せるカリカットは、チェーラ Chera 国の跡に形成せられし幾多の小国の一つに君臨せる一王の首府であつた。伝説によればチェーラ国の最後の王は、第九世紀のころ回教に帰依し、国を捨ててメヂナ Medina に去つた。かくて其の版図の一部は、当時南印第一の大国なりしヴィジャヤナガル Vijyanagar 国に併せられ、其余は北方より来れる回教徒の割拠する所となつたが第十四・十五世紀に至り、バーマニ Bahmani 王朝の下に統一された。ガッツ山脈によつて叙上両国と隔てられ

たるマラバル海岸には、幾多小国の分立を見たが、カリカット君主が覇権を握つた。君主は普通ザモーリン Zamorin と呼ばれた（註一）。そは海上王の意味にして、海上貿易が此国に対して重大なる意義を有せることを示して居る。ザモーリンは時として皇帝と飜訳せられ、従つて其国は偉大なる国家なるかの如き観念を抱かしめるけれど、カリカットとは『鶏鳴』の意味にして、此町の最大なる殿堂に養はるる鶏の声の届く範囲を其の区域とせるより来れるものである（註二）。カリカット既に然り、其他の王国の狭小なること、推して知るに難くない。

されば此等の小君主等は、啻に独力を以てポルトガルに抵抗する力なかりしのみならず、古へより喜んで其港を外国人に開いて来た。そは実に有史以前より東南貨物の集散地であつた。東亜よりのジャンクは、セーロン島に寄港せる後、マラバル海岸に沿うて北上し、キロン・コーチン・カリカット・カンナノルに来りてアラビア人の船と取引した。セーロン及ビマラッカ Malacca と直接取引を行へるエジプト商人の船も、印度洋を横ぎりて紅海又はペルシア湾に向ふ前に、先づマラバル海岸に憩ふを常とした。かくて彼等は、交易のために来る外国人に対して、如何なる敵意をも有たなかつた。

次にマラバル諸国の君主は、彼等の港に来りて通商を営む諸国人の宗教に対して、甚だ寛大であつた。自国の人民其もの、が、既に種々なる信仰を抱いて居た。まづ下層民と山間の民とは原始的宗教を昔乍ら伝へて居た。武士階級ともいふべきナイル Nair 族は、彼等自身の信仰と儀礼とを有して居た。印度教は、厳格なる意味では少数の婆羅門の名に限られて居たが、此等の婆羅門は国王の顧問として大なる勢力を有して居た。かくてマラバル諸君主は、毫も外人の宗教に干渉することなく、ユダヤ人の如きは極めて古くより此の地方に来住し、ヴァスコ・ダ・ガマ来印当時、すでに西南印度の海岸に一箇の社会を形成して居たが、それは今日までも継続して居る。

次にはネストリウス派の基督教が、此の海岸に少なからぬ信者を有し『聖トマス基督者』と呼ばれて居た。それは聖トマスと呼ばるる神父が、印度に来りて普く教を布き、紀元六八年、遂にマドラス附近に於て殉教せりとの伝説に因るものである。彼等はナイル族と同等の社会的地位を保ち、彼等と同じく兵役に服して居たと言はれる。

回教を奉ずるアラビア人も、またマラバルに於て排斥を受ける道理はなかつた。印度人が彼等をモプラー Moplahs 又はマッピラ Mappillas と呼ぶは、もと一種の敬称である（註二）。而してダ・ガマ来航当時のマラバル回教徒は、二つの要素から成つて居た。一は早くより此地に移住せるアラビア人の子孫にして、他教に対して寛大であり、他はエジプト又はペルシアよりの新来者にして、十字軍によつて敵愾心を煽られ、グラナダ陥落によつて一層油を注がれたる者であつた。マラバル諸君主は、人種と宗教の如何を問はず、新しく渡来する者と通商することを厭はなかつた。而も此の第二の部類に属する回教徒は、ホルトガル人に於て彼等の信仰と利益とを同時に脅す強敵を見た。

かくの如くにしてマラバルは、ホルトガル人にとりて決して他に求め得ぬ絶好の場処であつた。而して到着の場処に於て爾く幸運なりし以上に、其の到着の時期に於ても幸福であつた。当時南印の大国ヴィジャナガルは、北方に出現せる回教諸国に脅され、マラバル海岸に羅列せる小国の興亡などを顧る遑がなかつた。而して一五六四年に至り、四百五十年の歴史を有する此国は、遂に回教徒のために亡ぼされた。また南印諸国を統一せるバーマニ Bahmani 王朝も、ダ・ガマ来航前後より分裂を始め、一五二五年にはデッカン Deccan に五回教国の対立を見るに至つた。而して此等の五国のうちの四国は、西ガッツ山脈によつて隔てられたる狭長なる沿海地帯と何等の交渉をも有せず、唯だ其の一国ビジャープル Bijapur のみが葡人と干戈を交へた。

叙上奥地の印度教国竝に回教諸国は、マラバル諸邦よりは遥に有力であつたが、之を北方の大国に比ぶれば同日の談でなかつた。而も北印度に於けるアフガン人の勢力は、当時既に衰へ初めて居た。一三九八・九九年ティムール Timur の侵入によつて蹂躙せられしデーリ Delhi 王国は、一敗してまた起つことを得ず、其跡に印度教国・回教国の割拠を見たが、一五二六年に至り、モーガル Mogul 人の侵入の前に悉く俯れ伏さねばならなかつた。而もモーガル帝国の真個の建設者アクバル Akbar の即位は、其後更に三十年を経てのことである。かくて第十五世紀末葉より第十六世紀初頭にかけての印度は、南北を通じて旧き勢力が悉く崩壊し、新しき勢力の尚未だ結成せられざりし時代であつた。偶々かかる時代にダ・ガマは印度に到着した。されば此こそポルトガル人はマラバル海岸に於て自由に活動するを得たのである（註四）。

次に吾等は当時のマラバルが、如何なる程度の文明を有して居たかを明かにしたい。而して之を知るべき資料は決して少くない。その第一に引用すべきは、ヴァスコ・ダ・ガマに先だつこと五十六年、一四四二年にカリカットを訪へるペルシア回教徒アブドゥル・ラザック Abdur Razzak の記述である――『此町には常住の在留者たる若干の回教徒あり、金曜日毎に祈禱を捧ぐる二個の会堂を建てて居る。……此町にては、治安と裁判とが極めて厳正に行はれて居るので、最も富める商人が海外より貨物を取寄せ、之を陸揚げし、直ちに之を市場に送りて其間毫も計算を引合せ又は品物を見張りする必要を感じない。税関の役人は自ら商品監視の任に当り、昼夜之を見守つて居る。商品が売れた時は、従価四十分一の税を課し、売れざる時は厘毛も課税しない。カリカットでは何処より来りまた何処へ向ふ船であらうとも、一旦港内に入れば平等に待遇せられ、何等の煩はしきこともない』（註五）。

第二には一五〇五年カリカットを訪へるイタリー人ヴァルテーマ Ludovico di Varthema の記述である。彼もまた此地の治安の行届けること、及び商人の正直なることを称揚した（註六）。其後約百年を経て、一六〇七年カリカットに赴けるフランス人ピラール・ドゥ・ラヴール Pyrard de Lavard は、印度人のポルトガル人に対する憎悪の極めて深刻なること、並に百年に亘る兵燹の厄に拘らず、此地の到達せる文化の程度の高きに驚いて下の如く言ふ――『印度全土を通じ、多くの人がカリカットに於ける如く満足して生活して居る地方はない。これ其の国土が豊かにして美しきと、総ての宗教信者が自由に其の宗教を奉じ得る故である』。『そは全印度に於て最も殷賑なる、最も通商貿易の盛んなる地である。保護と自由とを与へらるるが故に、世界の到る処より、総ての国々総ての信仰の人々が此国に来る。国王は有らゆる宗教を奉ずることを許すが、之について語り、論じ、諍ふことは堅く禁ぜられて居る』。『司法権は独り国王より出で、全国を通じて国王以外に裁判官がない。賞罰は極めて明かである』（註七）

かくの如くペルシア人・イタリー人・フランス人が、筆を揃へてカリカットの生活を称讃するを見れば、吾等は之を真実として承認せねばならぬ。婆羅門の到達せる印度精神文化の崇高については、更めて茲に言及する必要を見ない。唯だ吾等は如上の引用によつて当時のマラバル印度人が、政治的並に社会的に、ポルトガル人よりも高き水準に達していたことを知り得る。単に如上の引用のみならず、歴史的事実もまた其のポルトガル人より高き文化を有せることを示す。例へば之を戦争に於ける捕虜の待遇について見よ。此事は常に一国文化の高度を測る絶好の標準であるが、葡人の残虐至らざるなきに比し、印度人は常に寛大であつた。初代印度太守アルメイダ Almeida の最も頑強なる敵マリック・アイヤズ Malik Aiyaz は、アルメイダに書を送りて、干戈を交へつ

つある間は互に他を征服する以外または他事なきも、一旦干戈を戢めたる後は兄弟の如くなるべしと言つた。而して此の書面の通りに実行した。之を葡人が言語に絶する手段を以て其の捕虜を拷問し虐殺せるに比ぶれば同日に談るべくもない。

斯くの如くマラバル人は葡人よりも高き文化を有せしに拘らず、その武器及び戦争の方法に於て、著しく葡人に劣つて居た。葡人は数世紀に亘りて『神及び国王の敵』と戦ひ来りし尚武の民である。其戦は直ちに彼等の存亡を決するものなるが故に、勢ひ必死とならざるを得ない。然るにマラバルに於ては、戦争は常に人種を同じうし信仰を同じうする者の間に行はれしが故に、後には戦争と言はんよりも寧ろ厳重なる規則によつて支配せらる仕合の如きものとなり、此の規則を破ることは、死するよりも恥とせるるに至つた。そは一種の仕合なるが故に、青天白日の下に堂々と戦はれ、夜戦奇襲の如きは其の知らざる所であつた。日没すれば両軍は戦を止め、陣地を接して安らかに睡眠を取る。日出づれば起きて武具を着け、檳榔実を噛み、敵味方互に談笑を交はしたる後陣鼓蓼々と響いて初めてまた合戦となる。而して其の武器と言へば弓矢と刀槍と盾だけであり、護身の装具は綿入と帷子とだけであつた。大砲は知られて居たが、殆ど之を用いなかつた（註八）。それ故に大小の火器を有し、鋼鉄の甲冑に身を固めたる葡人に対して、彼等は恰も狼の前の羊群の如くであつた。さればこそカリカット君主は、全国の武力を挙げて百人内外のポルトガル人を攻むること五箇月、遂にパシェコのために撃退されたのである。此事は種々なる教訓を吾等に与へる。ひとりマラバルに於てのみならず、唯だ武力に於て優りしことが、殆ど総ての場合に欧羅巴のために世界制覇の路を拓いた（註九）。

〔註一〕 ザモリンはタミル語 Sâmûri の転訛にして、梵語 Samudri より来る。サームドリは『海の主』の意味。

〔註二〕 カリカットは Kali-Kukkuga 即ち『鶏鳴』より来るとせらる。
〔註三〕 モプラー又はマツピラは、梵語 Mahâ pilla の転訛。マハーピラは『大なる児』の意味。
〔註四〕 此の一節の叙述は主として上掲ハンター『英領印度史』第一巻第九三―一〇三頁に拠った。
〔註五〕 R. H. Major: India in the XIIth Century, p. 13. Hakluyt Society, 1874. 上掲ホワイトウェー著書中の引用に拠る。
〔註六〕 Ludorigo di Varthema: Travels, p. 168. Hakluyt Society, 1863. 同右。
〔註七〕 Pyrard de Laval: Voyage, Vol. I, pp. 366, 401, 407. Hakluyt Society, 1887—90. 同右。
〔註八〕 一五〇二年ヴァスコ・ダ・ガマの遠征に際し、砲火をカリカットに浴びせた時、ザモーリンは二門の貧弱なる大砲を有して居たが、覘を定めることさへ知らなかった。一五〇六年葡船がセーロンを訪へる時、島民は火薬を知らず、轟然たる砲声を聞いただけで、既に戦意を失った。
〔註九〕 上掲ホワイトウェー『印度に於ける葡国勢力の降興』中に、当時の武器及び戦法に関する一節がある。予は主として之に拠った。同著第三三―四一頁。

第四節　欧亜貿易とアラビア人

さて吾等は進んでポルトガル人の印度経略を叙べる前に、当時の印度に於けるアラビア人、並に其の欧亜貿易に於て占め来れる地位を顧みねばならぬ。

回教勃興以前、欧羅巴は多かれ少なかれ印度・ペルシア等の亜細亜諸国と、直接通商を行つて居た。然るに回教徒は、古来の貿易路による欧人の進出を、総ての方面に於て阻止した。かくて欧亜貿易路は、数世紀の間、僅に少数のユダヤ人及びシリア人の往復するあるだけであつた。然るに第十世紀に至り、アマルフィ Amalfi、プリンディシ Prindisi、タラント Taranto 等の南部イタリー諸市が、船を地中海に浮べて近東貿易を開始し、次

でジェノア Genoa、ピサ Piza、ヴェニス Venice 等の北部イタリー諸市、また之に倣つた。かくて小亜・黒海・エジプトの海岸に於ける欧亜貿易の復興は、既に十字軍以前に始まつて居たが、最も之を促進せるは十字軍（一〇九五―一二七〇年）であつた。ヴェニス・ジェノア・ピザの諸港は、地の利を占めたるが故に、船舶と食糧とを十字軍に提供して、其間に巨利を博したが、就中之によつて巨富を積みたるはヴェニスであつた。まことに十字軍は之を其の経済的結果についてのみ見れば、イタリー諸市の貿易伸展のために戦はれしが如き観を呈する。

十字軍は啻に伊人をして東洋貨物を西欧に将来せしめたるのみならず、その需要を増加せしめた。十字軍将士は、東洋の豪華に関する驚くべき物語を齎し帰つた。彼等は其の遠征中に、東方の絹布乃至香料に対する嗜好を得て帰つた。彼等はまた戦死せる異教徒より奪へる珍奇なる宝石を携へ帰りて、その隣人を羨ましめた。当時西欧の富は急速に増しつつありしが故に、イタリー商人の輸入せる東洋貨物は、富裕なる人々の歓迎を受けた。

何故に人々は東洋貨物を歓迎したか。第一に香料が今日に比べて遥に重要なる商品であつた。当時の食事は簡単にして単調、香料のみが之に風味を与へたので、肉類はいふに及ばず、麦酒や葡萄酒にさへ香料を加へ、胡椒は其儘で珍味として賞味された。それ故に其の高価にも拘らず、スマトラ Sumatra、セーロン、西南印度より、至難の旅を経て地中海又は黒海の岸に来る香料が、主としてイタリー商人、次ではマルセーユ Marseilles やバルセロナ Barcelona の商人に売渡され、彼等の手によつて西方に送られた。次に宝石の需要もまた多かつた。そは個人的並に宗教的装飾のために用ゐられた。加ふるに宝石は、それぞれ特異の魔力を有するとせる中世以来の迷信が、一層宝石を貴重なものにした。例へばサー・ジョン・マンデヴィル Sir John Mandeville の著とせらるる旅行記を見よ。此書の著者はダイヤモンドの徳を讃へて、此の宝石は其の所持者をして能く其敵に勝たし

め、智慧を豊かにせしめ、闘諍を免れしめ、悪霊の支配を受けざらしむと言つて居る。而して当時ダイヤモンド・ルビー・真珠其他の宝石は、総てペルシア・印度・セーロンより来た。

右の外スマトラ及びボルネオ Borneo 産の樟脳、支那よりの麝香、アラビア・ペルシアよりのインディゴ・白檀・伽羅木、小亜よりの明礬も、また各種の目的のために大なる需要があつた。加ふるに東洋は、叙上の天産物を有する上に、当時の欧羅巴の企及すべくもなき精巧なる製造品、即ち硝子・陶器・絹布・繻子・敷物・金銀細工の生産地であつた。

自然は欧亜の交通を至難とした。第十五世紀に於ては、三つの貿易路が辛うじて両大陸を結んで居た。第一はティグリス Tigris 谿谷による中央貿易路である。東洋貨物は先づペルシア湾頭オルムス Ormuz に集まり、此処よりティグリス河口に到り、其処よりバグダード Bagdad に運ばれた。而してバグダードよりはカラヴァンによつてアレッポ Aleppo 及びアンティオク Antioch に送られるか、又は砂漠を横ぎつてダマスコ Damascus 及びシリア諸港に送られ、其処で欧人の手に渡つた。第二は紅海を経由する南方路である。海路紅海まで運ばれたる貨物は、ジッダ Jidda に於て小船に積換へてスエズ Suez に送られ、此処より更にカイロ及びアレキサンドリアに運ばれた。第三は北方路である。支那・印度よりの商人が、先づ中央亜細亜のサマルカンド Samarcand 及びブハラ Buchara に会し、ブハラ以西でそれぞれの路を択ぶ。或者はヴォルガ Volga 河口アストハラン Astrachan を経て、クリム Novgord 及びバルト Balt 海に進んだ。或者はヴォルガ Sudak 一名ソルダイア Soldaia 及びカッファ Kaffa に到り、また或者は裏海南 Crim 半島の東南岸スタック Sudak 一名ソルダイア Soldaia を経て黒海岸トレビゾント Trebizont に着いた。岸を進みて、タブリス Tabris 及びアルメニア Armenia

イタリー諸市、就中ヴェニスの商人は、既に述べたる如く、初めは小亜及びエジプト諸港に於て、後にトルコ人が君府を征服して西方に侵略の歩みを進めてよりは主としてアレキサンドリアに於て、東洋より来れる貴重なる貨物を受取り、之を西欧諸国に供給して莫大なる利益を収めた。而して欧亜貿易に対してヴェニスが欧羅巴又は地中海に於て占めたる地位を、亜細亜又は印度洋に於て占めて居たのが、取りも直さずアラビア人であつた。生れ乍らの商人ともいふべきアラビア人は、古へより殆ど印度洋貿易を独占して来たが、第十五世紀末葉に於ては、西は東阿弗利加海岸より、東は支那に至るまで、最も有利なる貿易を甚だ組織的に行なつて居た。

彼等は阿弗利加に於ては、その海岸地帯の住民が野蛮人なりしを以て、古へのフェニキア人の如く、諸処に独立せる植民地を建設して居た。而して蛮人の襲撃を避けるため、出来るだけ防禦に便なる地点を択んだ。印度に於ては、彼等は原則として政治的発展を試みることなく、商業居留地を置くことを以て満足した。東方半開のマレー Malay 半島に於ても、敢て政治的野心を示さなかつたが、宗教的には印度に於てよりも伝道に努力した。蓋し印度には、既に回教よりも古く且高き宗教あり、印度人にして回教に転信する者は、概ね之によつて社会的地位を向上せしめんとせる下層種姓を主とした。例へば印度教徒としては、百歩以内に婆羅門に近づくを得ず、その過ぐる時は犬の如く蹲踞せねばならぬ者でも、一旦回教徒となれば直ちに上層種姓に伍するを得た。されば印度に於ては上流階級の回教帰依者は極めて少なかつた。之に反してマレーに於ては、君主の家族が多く之に帰依し、人民もまた之に倣つた。

東亜及び香料群島と、印度とを結ぶ交通路を瞰制するマラッカ Malacca は、もとシャムの属領であつたが、第十五世紀末葉に到りて独立を宣言した。此地は毎年一定の期間、支那及び東方より来る貨物と、西方より来る

貨物との交換市場であつた。アラビア人は夙くより此地に居留地を置き、強大なる商業的地歩を占めて居た。而して東方に於てマラッカが占むると同様の地位を西方に於て占めたるは、ペルシア湾頭のオルムズであつた。東方とペルシアとの、またペルシアを通して欧羅巴との貿易は、此の関門を経ねばならなかつた。此の小島及び其の対岸の小地域は、ペルシアを宗主国とする回教君主の治下に在り、是亦アラビア人の貿易根拠地であつた。此等両者に次では紅海のジッダがある。ジッダは単に回教聖地メッカ Mecca への上陸地点なるのみならず、此の地以北の紅海は暗礁と浅瀬とに富むが故に、遠洋航路の船は此地を終点とし、小船に其荷を積換へねばならなかつた。後にはジッタよりも更に南に位し、紅海の門戸を扼するアデン Aden が、ジッダに代りて海洋船の終点となり、此の地もまたアラビア人の経済的支配の下に置かれた。

印度西海岸に於ては、到る処の港々に、多かれ少なかれアラビア人の居留を見たが、その活動の中心はカリカットであつた。カリカットは、何等出入なき海岸に位し、港としては極めて不完全であるが、此の地の君主が常に多大の好意をアラビア商人に示せるため彼等は此地を印度貿易の中心とした。香料は、金銀及び高価なる毛皮と共に、最も強烈に人心を惹ける商品の一であるが、マラバルは香料の主位を占めたる胡椒栽培の中心地であり その黒胡椒の如きは今日尚ほ珍重されて居る。そのほかマラバルは、生薑と肉荳蔻とを産したが、後者は中世紀に於て甚だ愛好されて居た。セーロンは肉桂を産し、東方モルッカ群島は肉荳蔻及び丁子を産した。総て此等の有利なる商品が、実にアラビア人によつて取扱はれて居たのである。従つて彼等にとりてポルトガル人の闖入は非常な出来事であつた。彼等が極力ポルトガル人排斥を企てたのに何の不思議もない。かくて西に於て信仰と権力とのために回教徒と戦へるポルトガル人は、東に於てもまた利欲のために其戦を続けねばならなかつた。

第四章　印度に於ける葡国勢力の盛衰

第一節　アルメイダ

ホルトガル人が東洋に於てアラビア人との戦争を決意せる如く、アラビア人もまた同様の覚悟を抱いた。而して此の戦は、中世紀に於て基督教徒と回教徒との間に繰返されたる第三回の、而して最後の決戦たるべきものであつた。パレスティナを戦場とせる最初の戦争は、遂に回教徒の勝利であつた。イベリア半島に於ける戦争は、基督教徒の勝利に終つた。いまや印度洋争奪のための戦が、またもや両者の間に始められたのだ。回教諸国は此の戦争の重大なる意義を熟知して居た。さればこそカリカット君主がアラビア商人の言に聴き、使節をカイロに派してエジプトの援助を乞ひたる時、北印度のカムベー Cambay、オルムス、アデン等の回教諸国、皆なカリカットと行動を共にするに決した。而してエジプト自身も既に葡人の進出によつて通商上の損失、関税収入の激減を痛感して居たので、直ちにカリカットの乞に応じ、先づ羅馬法王ユリウス二世に向つて、若し葡人の東洋進出を阻止せずば、国内の総ての基督教徒を屠り、聖墓を破壊し去るべしと威嚇した。而して貿易上に致命的打撃を受けたるヴェニス、またエジプトと呼応して法王を脅した。但し此の威嚇は、仮令羅馬法王を畏怖せしめ得たとしても、ホルトガル国王に対しては遂に無効であつた。

かくの如くにして印度の形勢は、年々の艦隊派遣だけでは不十分となつた。それ故に国王は印度に総督を常駐

せしむるに決し、下の如き三箇の重大なる任務を与へて、フランシスコ・ダ・アルメイダ Francisco da Almeida を初代印度太守に任命した。即ち第一には東阿弗利加海岸に根拠地を確立すること、第二にはマラバル諸港に於けるアラビア勢力を駆逐し、葡国商館を設置し、堡塁を築くこと、第三には単りカリカットに於けるアラビア船艦のみならず、エジプト王の海軍を印度洋上に撃滅すること、是れである。

アルメイダは名門の出にして、武勇の誉れ高く、時に齢四十五歳、一子ローレンソ Lourenço を伴ひ、水夫以外千五百の兵を乗せたる二十二隻の一大船隊を率ゐ、一五〇五年三月、満腔の十字軍的精神を以てリスボンを出帆した。彼は途上東阿に於てキロアに堡塁を築き、モムバサに臣従を誓はしめ、メリンデ Melinde との国交を緊密ならしめ、其の第一の任務を果たした。既にして印度に到着するや、統治の中心をコーチンに置き、四年の間に到る処アラビア勢力を威圧し、且百二十の小船と八十四隻の大船とより成るカリカット王の艦隊を撃滅し、三千の回教徒を殺したのみならず、其子ローレンソはセーロンに遠征して其の君主を臣従せしめ、かくして一応第二の任務をも果した。

かかる間にエジプトもまた戦備を進めた。外交折衝の無用なるを見たる埃及王は、エミール・ホサイン Emir Husain を提督とし、一大艦隊を印度に派遣した。ホサインは一五〇七年二月十五日スエズを発し、九月二十日北印カムベー国ディウ Diu に着し、此町の長官マリック・アイヤズ Malik Aiyaz の率ゐる艦隊と合流した。翌一五〇八年三月、小艦隊を率ゐて沿岸巡航中のローレンソが、図らず此の艦隊と邂逅し、忽ち其の攻撃を受けて遂に戦死した。若しホサインの主張に従ひ、回教徒側が此の戦勝を十分に善用したならば、葡人の運命逆睹し難きものがあつた。然るにマリック・アイヤズは、直ちに全力を糾合して葡国艦隊を襲はんとせるホサインの作

戦を斥けたので、ポルトガル人に勢力回復の時間を与へた。かくてアルメイダは、翌一五〇九年春、十九隻の艦隊を率ゐて北航し、先づダボル Dabhol を陥れ、次で回教聯合艦隊とディウ沖に戦ひて之を撃滅し、三千の回教徒を殺した。此の勝利は、印度洋に於けるアラビア勢力を覆し、爾来此海は百年間ポルトガル支配の下に置かれることとなつた。かくして第三の任務も果たされた。マメルク・エジプトはやがて一五一六年トルコのために亡ぼされた。

さてアルメイダは、多数の堡塁を印度に築き、直接ポルトガルの支配を東洋に確立するを不利とし、唯だ必要の地に商館を置きて通商関係を密接にし、アラビア人と同様の方法を以て東洋貿易を支配するに努むべしとした。而して此為に海上権の獲得並に其の維持に全力を注ぐことを主張した。アルメイダは、ポルトガルの寡少なる人口を以てしては、到底有効に陸上を支配し、植民帝国を万里の外に維持し得ずと考へた。彼の此の意見は、マノエル王に宛てたる書翰中に明示されて居る――『陛下の有する堡塁の数愈々多ければ、陛下の権力愈々薄弱となるべし。吾等の全力を海上に集注せしめよ。蓋し吾等若し海上に於て強大ならざりせば（斯かる事は神之を許さず）形勢は悉く吾等に不利とならん。……いま吾等はヴェニス人及びサルタンのトルコ人と戦はんとす。……吾等が海上に有する力を以て、吾等は此の新しき敵と輸贏を決せんとす。予は神が吾等を眷顧して仁慈を垂れ給ふべきを信ず。総て爾余の敵は言ふに足らざるなり。予は断乎として言ふ、陛下が海上に於て優勢なる限り、印度は陛下のものなるべく、若し此力を有せずば、陸上の堡塁は殆ど無用なるべしと。モール人を此国より掃蕩することについては、既に良策を発見せりと雖、いま之を述ぶるは長きに過ぐ。神欲し給ふ時、此事は成就せらるべし』（註一）。

アルメイダの此の穩健堅実なる政策は、これまでの偉大なる成功に意気軒昂たりし幸運王を喜ばしめなかつた。かくて宗教的にも政治的にも、アルメイダより遥に雄大なる計画を抱き、アルメイダが最も憎悪してあらゆる敵意を示せるアフオンソ・ダ・アルブケルケが、いやま彼に代つて印度総督に任ぜられることとなつた。（註二）

〔註一〕 H. M. Stephen : Albuquerque. Clarendon Press, 1892. p. 40.

〔註二〕 アルメイダは、アルブケルケ部下の船長にして、彼に反感を抱いて脱走し去れる三人を好遇した。恐らく此等の船長は、口を極めてアルブケルケを讒誣し、アルメイダは之を信じたものと思はれる。彼は、常にアルブケルケを『馬鹿者』又は『狂人』と呼んで居た。政策を異にせる上に、人格に対する誤解を抱いて居たので、アルメイダの彼に対する憎悪は深刻であつた。ダンヴース上掲第一巻第一四七頁参照。

第二節　アルブケルケ

アルブケルケは、自己の領土と、自己の軍隊と、自己の艦隊と、自己の財政とを有する真個の植民帝国を印度に築かんと欲して居た。固より彼といへども印度の奥地に広大なる領土を拡めんとしたのではなく、その目指せる所は、単に沿海地帯であつた。而も此為には、必要なる地点に堅固なる堡塁を築かねばならぬ。海上を支配した上に、此等の堡塁を根拠地並に補給地として、土人に対して巧妙なる政策を施すならば、ホルトガルは其の居留地を中心として、広き範囲に其の支配を確立し得るであろう。アルブケルケの計画の中には、東阿の海岸地帯紅海及びペルシア湾、印度、モルッカ群島、さてはマルコ・ポーロの物語によつて其の富を知られたる支那までが悉く抱擁されて居た。彼が一五〇九年総督に就任せる時、ホルトガルは印度洋に於て僅に下の七堡を有するに

過ぎなかつた。即ち阿弗利加海岸にソファラ・モサムビク・キルワの三堡、ソコトラ Socotra 島上に一堡、マラバル海岸にコーチン・カンナノルの二堡、及びゴアに近きアンジェディヴァ Anjediva 島に一堡。アルブケルケはコーチンの位置が南に偏する故を以て、印度西海岸の中央に位し、好個の碇泊所にして防禦に便なるゴアを択び此の地を葡国勢力の中心たらしむるに決した。彼はまた香料に富める群島と、東亜の諸大国とに通ずる海路を瞰制するマラッカを経略して、之を東方の拠点とし、ペルシア湾を制するオルムズ、紅海の関門を扼するアデンを西方の拠点とするに非ずば、完全に印度洋上の貿易を支配し得ざるべきを看取し、その目的を遂ぐるために努力した。

ゴアはバーマニ王国崩壊後に出現せるデッカン五回教国の一なるビジャープル Bijapur 国の要港であつた。アルブケルケは、一五一一年二月容易に之を占領したが、八月に至つてビジャープル国王ユスフ・アディル・シャー Yusuf Adil Shah のために奪回せられたので、十一月大軍を催して之を攻め、回教徒二千を殺して再び之を奪ひ、葡国勢力を確立した。ゴア陥落の報道は印度を震駭せしめ、進んで友好を求むる君主多く、カリカット王さへも領内に 塁を築くことを承諾した。ゴア占領によつて、西南印度に於けるポルトガルの海上権は、最早動きなきものとなつた。

次で彼の眼は東方に向けられた。当時のマラバル諸港は、東はマラッカを始発点とし、西は紅海のエジプト諸港を終着点とする厖大なるアラビア貿易の謂はば仲継港となつて居た。次第に東漸せるアラビア人は、マラッカを以て東亜貿易の中心地となし、此処でモルッカ群島の丁子、バンダ Banda 諸島の肉荳蔻、ティモール Timor の白檀、ボルネオの樟脳、及び爪哇・暹羅・フィリッピン・支那より来る百貨を仕入れて居た。マラバル諸港に

於て取引される商品としては、主として同地方に産する胡椒及び生薑、セーロンよりの肉桂に過ぎなかつた。それ故にアルブケルケは、マラッカを略取してアラビア貿易の源頭を抑へんとした。かくて彼は自ら艦隊を率ゐてマラッカに赴き、一五一一年之を略取して堡塁を築き、爾後百年に亘る葡国勢力をマレー半島に確立した。（註一）。

次で彼は一五一三年西征してアデン征服を企てたが、兵力不足のため目的を遂ぐる能はず、紅海を探険せるのみにて帰途についた。但し一五一五年にはオルムズに強固なる堡塁を築き、印度とエジプトとを結ぶ貿易路の一つだけは、之を掌裡に収めることが出来た。彼の抱負は奔放であつた。彼はアビシニアより隧道を掘りてナイルの河水を紅海に導き、以てエジプトを砂漠化せんとし、屢々国王に向つてマディラの熟練石工を送らんことを請うた。また彼はメッカを攻めてマホメットの遺骨を奪取し、之によつて回教徒の聖地侵略に報復せんと考へて居た。彼は斯く言ふ――『ジッダ及びメッカには軍人居らず、居るものは行者のみ。アビシニアには馬が多い。五百のポルトガル騎馬武者の前に、三千のモール人何かあらん。五百騎で足らずば千騎とせよ。メッカ略取は難事でない』

唯だ幸道王は、其の野心の燃ゆるが如くなりしに似ず、その野心を遂ぐるために充分の物資と人力とを提供することを嫌つた。此の矛盾は屢々アルブケルケを苦しめた。一五一二年四月一日附の彼の国王に宛てたる書翰を見よ――『貨物を入手し得べき地にしてアラビア人の往来する所にては、吾等は穏便なる手段にて宝石又は香料を得ること能はず。若し彼等の意に反して之を強奪せんとすれば、彼等と一戦を交へざる可からず。而して斯かる場所にては、二年又は三年は如何なる利益をも収め難かるべし。但し若し彼等にして吾等の威武堂々たるを見

ば、彼等は吾等を尊敬し、吾等を欺瞞せんとするが如きことなく、戦はずして彼等の貨物を渡し、吾等の貨物を受取り、且吾等を印度より遂はんとする非望を抛つべし。陛下は此地に於けるアラビア人の常套手段を知り給ふや。予が船隊を率ゐて彼等の港に入るや、彼等の最大の注意は吾等の兵力と武器とを知るに在り。若し吾が武力の到底抵抗し難きを見る時は、彼等は吾等を歓迎して従順に其の貨物を与へ、吾が貨物を取る。而も若し吾等が微力にして少数なるを見る時は、陛下予を信ぜよ、彼等は断乎吾等に抗して為さざる所なし。これ予が自らオルムズ及びマラッカに於て経験せる所なり。……再び繰返して言ふ、若し陛下にして印度に於て戦を避け、その諸王と親善を保たんと欲せば、多くの人数と精鋭なる武器とを送り、且此の地の主要なる海岸地点を略取せざる可からず』。

またビジャーブル国王は屢々ゴア奪回を企て、在印葡人のうち彼に快からざる者は、書を国王に贈りて彼を非難し、ゴア占領の無用を説いた。而して国王が之に動かされて其の放棄を求め来れるに対し、一五一三年彼より国王に宛てたる名高き書翰は、最も明瞭に彼の印度政策を述べて居る――『……若し陛下の参議諸子にして印度事情に通ずること予の如くならんには、単に陛下の力を海上に置くのみにては、決して陛下が印度の如き広大なる地域の主たり得ざるを知るべし。かくの如きは成敗疑はしく、同時に甚だしく不便なる政策なり。堡塁を築かず、海上にのみ拠ることは、此地のモール人の陛下に望むところなりとす。蓋し彼等は、海軍にのみ頼る領土の永続せざるべきを熟知し、而して彼等は自己の土地財産を以て生活し、彼等が保有する昔乍らの市場に其の香料を運ばんとするが故なり。而も彼等は陛下に臣従するを欲せず、陛下と通商し、又は親善ならんことを欲せざるなり』

アルブケルケは、印度に於て活動せる総てのポルトガル人のうち、疑ひもなく第一等の偉人であつた。彼は勝れたる将軍にして、同時に抜群の政治家であつた。彼は敬虔・忠誠・廉潔であつた。能く大局に通じて経綸を立てると共に、事務の才幹をも兼ねて励精無比、部下の無為怠慢を鞭撻して仮借するところなかつた。自ら潔白なるが故に、不正なる官吏を厳罰に処した。如何なる富をも積み得る地位に在り乍ら、殆ど財産を遺さず、病床に在りて遺言する際に、いつも乍らの諧謔を以て『財産を競売することは勘弁してくれ。ボロボロのズボンを見られたくないから』と言つた（註四）。彼は其の絶倫の精力、行動の敏捷、成功の迅速によつて印度人を畏敬せしめた。彼の直覚は能く印度人の心裡を洞察して陰謀を看取したので、一層彼等の崇拝を受けた。其上一旦服従せる者に対しては、公平と正義とを以て遇し、其の約束は必ず守られ、其の賞罰は正しく行はれた。彼の死後、彼の後継者より受けたる不正と厭迫とに対し、印度人は彼の冥加を乞ふために、彼の墓に詣でて供物を献げた。（註五）而も彼の多くの敵が、遂に国王を動かして彼を罷免するに至らしめた。彼は死床に在りて、新総督が彼の罷免せる多数の官吏を高官に任用して渡印の途上に在るを聴き乍ら、一五一五年十二月十六日朝、六十三歳を以て其の英雄的生涯を終へた。彼は其骨を母国に葬らんことを遺言せるに拘らず、マノエル王は彼の遺骨ゴアに在る間は印度安泰なるべしとの迷信から、之を許さなかつた。而してゴア市民もまた之に反対したので、彼の遺言が実行されたのは、実に五十年の後であつた。

（註一）先是国王は一五〇八年ディオゴ・ロペス・デ・セケイラ Diogo Lopes de Sequeira を此の地方に派した。彼は一五〇九年九月マラッカに着し、商館を置いたが、アラビア商人の反感を買い、且此の国の官吏に裏切られ、商館と蕃人二十名を残して遁げ帰らねばならなかった。

〔註二〕 Whiteway : Ibid., pp. 156—157.
〔註三〕 Danvers : Ibid., Vol. I, p. 259.
〔註四〕 Whiteway : Ibid., p. 166. Hunter : Ibid., Vol. I, p. 140.
〔註五〕 Danvers : Ibid., Vol. I, p. 326.

第三節　印度政策の遂行

アルブケルケ死後も、ポルトガルの印度政策は、彼の指示したる方向に進められた。東方に於ては、彼等はモルッカ群島に進出を試みた。アルブケルケは一五一一年既に此の群島を探険せしめたが、其の後一五一九年第二回探険隊、一五二一年第三回探険隊派遣せられ、パセム Pacem 及びテルナーテ Ternate に商館が置かれた。而して、此の時図らず二隻の船舶がスペイン国旗を翻して隣島ティドール Tidor に来り、島王と条約を結べることを知つた。そはスペインのために南米の南端を廻りて此の地に到達せるマジェラン Fernão da Magalhães の艦隊に属せるものであつた。マジェランはポルトガル人であるが、故国に於て志を得ざりしため、去つてスペインに赴き、スペイン君主を説得して五隻の船舶を己れのために艤装せしめ、一五一九年之を率ゐて遠征の途に上り、幾多の艱難と戦ひて南米沿岸を南下し、一五二〇年十月、今日彼の名を負ふ海峡を通過して太平洋に出で一五二一年三月末、つひにフィリッピン群島に到着したが、土人の争闘に加担せるため、同年四月二十五日マタン Matan 島に於て多数の同伴者と共に土人の凶刃に斃れた。残留せる二隻の船は、此の年十一月八日ティドールに着し、大にサルタンの歓迎を受けて通商条約を結び、その一隻は丁子を満載して、歳暮喜望峰に向ひ、見事

に最初の世界周航を終へて、一五二二年九月六日セヴィル Seville に帰着した。

全く反対の方向に進み行きたる西葡両植民国は、今や世界に於て最も熱望せられたる地域に於て遭遇した。而して両国とも此の地域が、トルデシラス条約によつて定められたる自国の領内に在ることを主張した。経度の正確なる測定のみが此の争議を解決し得るが故に、一五二四年両国の天文学者・水先案内・法律家たちが、バダジョスに集まりて会議を開いた。而もヴェルデ岬群島のいづれに測定の起点を起くべきか、赤道経度の長さは幾何なるか等の先決問題さへ解き得ないで、到底意見の一致を見るべくもなかつた。かくて両国はモルッカ群島に於て衝突を見るに至つたが、固より此処ではポルトガルが遥に優勢であつた。かくてスペインのカルロ五世は、一方欧羅巴に於ける戦争に忙殺せられたると、他方亜米利加を迂回する航路の労多くして所得少なきことを思ひ、一五二九年四月二十二日サラゴッサ Saragossa 条約に於て、テルナーテ島の東十七度、即ち東経一四三度三分を以て境界線とし、モルッカ群島を葡領と認め、之に対してポルトガルは三五〇、〇〇〇金ドゥカットの償金をスペインに払つた。之によればフィリピン群島もまた葡領たるべき筈であるが、其後フィリップ二世の時、スペイン人は一五六五年より七三年に至る八年間に、ミンダナオ Mindanao を除く全フィリピン群島を征服した。而してポルトガルは之に対して何等の抗議をも提出しなかつた。

サラゴッサ条約締結以後、ポルトガルは其の力をモルッカ群島に注ぎ初めた。当時此処では一種独得の国家形態が発達して居た。そは大別して三国に分れ、其中のバジャン Bajan だけは最小なる、従つて纒まれる一国を成して居たが、他の二大国テルナーテ及びティドールは、セレベス Celebes よりニュー・ギニア New Guinea まで竝にミンダナオよりティモール Timor に至る間の多数の島々を包擁し、それぞれテルナーテ及びティモー

ルと呼ばれし小島に拠りて之を支配して居た。但し両国の勢力は、属島諸君主の向背によつて左右せられる故、決して安固ならず、従つて乗ずべき隙を其敵に与へた。初めポルトガル人は若干の堡塁を群島に築けるに過ぎなかつたが、土人の政治的竝に私的対立を利用して、次第に其の地位を確実にした。而もポルトガル人の横暴は、夙くも土人の憎悪を買ひたるのみならず、基督教の宣伝が、回教徒たる土人の反感を煽つた。かくて従来互に相争へる諸君主が、一致してポルトガル人に反抗したが、一五三六年群島知事となれるアントニオ・ガルヴァン Antonoa Galvão の才幹によつて事なきを得た。彼は其の仁慈公正なる政治によつて土人を悦服せしめたが、彼の後継者は再び以前の無思慮なる政策を取つたので、勢力は伸びたけれど、到処土人のために敵視されて居た。従つて群島に於けるポルトガルの地位は、決して堅実なるものでなかつた。

ポルトガルと支那との通商は、一五一八年葡船が初めて広東を訪へるに始まる。而も彼等の傲慢なる態度が支那人の嫌悪を買ひ、一五二一年武力を以て広東から放逐された。支那貿易の極めて有利なるを知れるポルトガル人は、一五四〇年頃より再び渡航を試み、海賊征討に加勢したる廉により、一五五七年広東河口の小島澳門 Ma-cao に居留地を置くことを許された。此処で彼等の貿易は栄え、一五八三年には治外法権を与へられ、一五八七年その独立を承認せられ、今日まで葡領となつて居る。また一五四二年には、颱風に吹流されて一隻の葡船が図らずも日本に到着した。当時日本は群雄割拠の戦国時代で、ポルトガル人に取りては、貿易にも将又伝道にも有利な国情であつた。但し中央集権の確立と共に、日本は彼等に対して厳重に鎖国した。

印度本部に於いても、幾多の政弊が夙くも簇出し初めたるに拘らず、葡国勢力は興隆の途を歩んだ。一五三五年には多年の宿望たりしディウに堡塁を築くを得た。ディウはカティワル Kathiwar 半島の突端に位する一小島

にしてグジャラート Gujarat の要港であり、之に拠る者は能く北印度の沿岸航路を制し得るが故に、アルブケルケは最も熱心に其の領有を主張して居た。然るに今やカムベイ国王は、まさに勃興途上に在りしモーガル帝国の脅威に対し、ホルトガル人と相結ぶを有利と考へ、港内への自由出入と堡塁とを許したのである。其後に至り国王は、ホルトガル人より受くる援助の過小にして、其の負へる羈絆の過大なるを悔ひたけれど、それは最早晩かつた。国王の乞を容れてカイロ総督がスエズより印度に向はしめたる船舶七十隻、兵七千を乗せたる一大艦隊は、一五三八年九月ディウに着し、葡国艦隊と激戦を交へたが、遂に葡人掃蕩の目的を遂げずして帰国した。次で一五五九年にはコンスタンティノ・デ・ブラガンザ Constantino de Braganza が、グジャラートの要港ダマーン Daman を取り、一五六〇年にはラッカディヴ Laccadive 群島を占領した。

単り印度の西岸に於てのみならず、ホルトガルの商人と伝道者は、コロマンデル Coromandel 海岸に於ても活動した。但し此処では政治的勢力は扶植されなかつた。ネーガパタム Negapatam に置かれたる葡国商館は、マドラス Madras 以南の全海岸を通商範囲として、盛んに貿易を営んだ。マドラスではフランシスコ派の僧侶が熱心に伝道したが、婆羅門教の殿堂に対して暴行を敢てしたので、土人の激怒を買ひ、為に一五五八年ヴィジャナガル国王の干渉を見た。北方では僅にホグリ Hugli 河畔に一商館を置いただけであつた。此処でもモーガル帝国の真の建設者バーバル Babar が、一五二六年パーニパット Panipat の戦勝によつて帝国の礎を置き、恰も吾等が辿りつつある時代に於ては、アクバル Akbar 大帝（一五六〇—一六〇五年）が盛んに勢力を張つて居た。ホルトガル人は其前には全く無力であつた。

印度の西方に於ては、ホルトガル勢力は爾く順調に伸びなかつた。幾たびか強大なる艦隊を派したるに拘らず

つひに紅海の関門を扼して此海を其の支配下に置くを得なかつた。第十六世紀後半に至り、エジプトを征服せるトルコ人が、その勢力を紅海に確立し初めた。ホルトガル人は一五二四年一旦アデンを占領したが、一五五一年之を失ひ、翌年更にマスカット Muscat を失つたので、葡国勢力はアラビアの南岸を洗ふ海上から駆逐された。

但し東阿弗利加の海岸に於ては、ホルトガルの勢力は次第に伸展した。一五四四年にはローレンソ・マルケス Lourenço Marquez が、デラゴア Delagoa 湾までを其の勢力圏に入れた。其上ザムベジ Zambezi 河を溯りて奥地にも進んだ。そは東海岸より内地に至る唯一の水路なるのみならず、此河の南方に、今日のローデシア Rhodesia の一部を含む黄金産地モノモタパ Monomotapa 国ありし故である。モノモタパは、旧約聖書にソロモンが其の黄金を得たと言はれるオフィル Ophir 国だと信ぜられた。ホルトガルは一五三一年此河の畔にセナ Sena を建て後更にテテ Tete を建設して通商根拠地とした。一五七一年葡王セバスティアノ Sebastiano は、東阿統治のためにモノモタパ総督府を置き、曾て印度総督たりしフランシスコ・バレット Francisco Barreto を初代総督に任じた。総督は黄金を求めて奥地に進んだが、得るところ無くして死し、次代総督の探鉱もまた得るところ無かつた。其後モノモタパ総督府は廃止されたが、モノモタパ国王との友好は維持せられ、通商も継続された。ただ第十六世紀末葉より、東阿に於ける回教徒の勢力頓に擡頭し、そのためホルトガルの地位が不安になつた。

第四節　葡国勢力の衰退

印度に於けるホルトガルの事業は、その規模の雄大なる点に於て、成功の迅速なる点に於て、並に影響の深甚なる点に於て、而もホルトガル其者が新興の一小国なりし点に於て、殆んど世界史に類例を見ざるものである。

そはヴァスコ・ダ・ガマが初めて印度航路を発見してより、アルブケルケが世を逝るまでの十五年間に、東阿及び印度の諸要地に根拠地を確立し、阿弗利加よりモルッカ群島に至る東西六千哩、喜望峰よりペルシア湾に至る南北四千哩の印度洋上に制海権を樹立し、かくして世界に於て最も有利なりし東洋貿易を独占したのである。併し乍らポルトガルは、多くの植民史家が好んで用ゐる比喩を藉り来れば、出場するまでに疲労し去れる競走者の観があつた。蓋し其の事業は、恐らく其の国力に不相応なる偉大なるものなりしが故に、最初の異常なる活躍の後、疲労困憊が直ちに之に続いたのである。

さて印度に於けるポルトガル勢力の衰退が初めて顕著となりしは、一五五七年ジョアン三世の死後であるが、その衰兆はアルブケルケが葡国勢力を其の絶頂に高めたる時に、夙く既に萠して居た。第一に官吏が甚だしく無能であつた。アルブケルケは彼等について下の如き辛棘なる罵倒を浴びせてゐる。――『彼等はバザーで二銭のパンを買ふにも役立たぬ。フロレンス人バルトロメウの店で鍛へられた一人の番頭の方が、国王が印度に於て有する役人全体に優る』(註一)。次に彼等は不正であつた。彼等は極めて薄給であつたが、容易に富を積む途を覚え、其の在職中に専ら私腹を肥やすことに努めた。一神父の言によれば、彼等は『盗む』といふ動詞を、総てのムードに活用させて居た。一五五二年、ゴアの一判事兼市参事会員は、国王に宛てたる書翰の中に、印度に於て公正の行はれぬこと、官吏の唯一の目的は『一切の方法を以て金銭を集むるに在る』ことを訴へ、『陛下よ、吾等に仁慈を垂れ給へ、仁慈を、仁慈を！　陛下よ、吾等を助け給へ、吾等は沈み去らんとす』と述べて居る(註二)。

その勇武を以て印度を震駭せしめたるポルトガル軍隊も、マノエル王の末年より既に衰兆顕著となつた。アル

ブケルケは、リスボンより送り来れる武器と兵士とについて、幾たびか其の脆弱老朽と無能懦弱とを抗議した。将校の堕落は特に甚だしかつたので、アルブケルケは好んで一般水夫を『吾が武士』と呼んだ。其後、俸給不払となるや、新に本国より到来せる兵士等は、在留葡人の嘲弄の的となり、而も正当なる生計の途なかりしより、或は街頭に餓死し、或は憐憫を富者に乞ひ、或は無頼漢となり、或は奥地に入りて印度人の間に生活した(註三)。一五四八年総督ジョアン・エンリケス João Henriquez は国王に一書を呈して、下の理由から兵士に俸給を支払わねばならぬことを切言した――『何となれば彼等は日夜戸毎に施与を乞ふ。それのみならば尚可なり、彼等は去つてモール人の許に至る。蓋しモール人は彼等に給料を与へて自由に生活せしむるが故なり』(註四)。もとポルトガル軍隊は、異教徒に対する彼等の戦が、必ず神護を蒙るべきことを信じ、この確信が彼等を無比に勇敢ならしめたのである。運命は常に彼等に幸ひして、或は思はざる援軍の来着により、或は敵軍に疫病の発生するありて、奇蹟的に勝利を得たることも多かつた。而も後には神又は聖徒の加護に対する純真なる信仰が、つひに僥倖を希ふ迷信と化し、往年の意気、地を払ふに至つた。

次いで植民地に於ける放埒にして豪奢なる生活が、一般に在印葡人を堕落せしめた。例へば之をゴアに見よ。ポルトガルの諺に『ゴアを見たる者はリスボンを見るに及ばず』といふ。そは商業の繁栄と、教会の荘厳と、軍隊の威武とを兼備し、黄金のゴア Goa Dourado と呼ばれたが、そのポルトガル社会は、二箇の怠惰なる組に分かれていた。一は即ち街頭及び賭博場の男子組、他は屋内に籠居する女子組である。重税を政府に納め、華美を極めたる賭博場は、ダンサー、俳優、幇間を置き、罪悪の巣窟となつて居たが、此処に宿泊して日夜を分たず勝負を争ふ者もあつた。屋内の女子は女奴隷に取捲かれ、不躾なる半裸の姿にて歌舞雑談に日を送り、わけても

『夫の目を忍ぶ手練手管を考へ』暮らした。彼等は其の情事の数々を互に誇り合つた。此頃ゴアを訪へる旅行者は、ゴアのポルトガル婦人の大胆なる情事を驚き伝へて居る。

此等の婦人に取りては、教会通ひが屋外の唯一の仕事であつた。其時には華美を極めたる服装を纏ひ、豪華なる輿に乗つて往復した。足には『五寸も高き踵』ある靴を穿いて居るので、一人又は二人の男子に扶けられ、僅に四十歩又は五十歩を隔てたる己れの席に行きつくまで、少くとも十五分を要せるほど、それほど威儀を整ひつつ徐々と歩いた。

男子は派手なる仕着せを纏へる多数の従者を引具し、美々しく飾れる馬に跨りて往来した。而して貧しき紳士等もまた之に倣つた。合宿せる数人の紳士が、共有の一着の美衣を交々着用して外出した。日傘を翳しかける奴僕を外出の度毎雇入れた。かかる虚栄は、ゴアが衰へ果ててからも尚止まず、葡国婦人は輿に乗りて街頭に乞食に出た。而して其の奴婢をして通りがかりの富者に哀を乞はしめた（註五）。かかる腐敗堕落は単りゴアのみのことでなく、其他の都市も大同小異であつた。

一五二四年国王が老齢のヴァスコ・ダ・ガマを印度の太守に任じたのは、恐らく印度に於ける綱紀紊乱の甚だしきを聴き、之を粛正せしめんために此の厳酷なる老将を起用したものと思はれる。彼は着々政弊を改革したが幾くもなく病死した。彼の後には上に述べたるディウ経略の功勲者ヌノ・ダ・クニャ Nuno da Cunha（一五二九—三八年）大ガマの子エステヴァン・ダ・ガマ Estevão da Gama（一五四〇—四二年）等が政治の振興に努力したが、一五四五年にはジョアン・デ・カストロ João de Castro が総督となつた。彼は品性の高潔を以て知られたる政治家にして、ディウの叛乱を鎮圧し、マラッカを襲へるスマトラ艦隊を撃退すると同時に、ゴアの風紀を

粛正するために努力したが、不幸にして一五四八年病死した。彼は唯だ一振の劍しか其子に遺さぬほど貧しかつた。而して『其劍は、さして高価ならぬ若干の宝石と、価格に積もり得ぬ光栄とを以て飾られていた』(註六)。

ホルトガルの史家マルティンス Martins は次の如く言ふ――「印度の統治は三人の偉人を創造した。カストロは聖者と呼ばるべく、アルブケルケは英雄と呼ぶに適はしく、アルメイダは賢明なる政治家・聰明なる代官である』(註七)。而も吾等は、叙上三人の外にルイス・デ・アタイデ Luis de Ataide を加へ得ると思ふ。彼は一五六八年、総督として印度に赴任した。彼は嘗に勇武絶倫の武将なりしのみならず、人となり清廉潔白、多くの総督は巨富を積んで帰国するを常としたのに、彼は唯だインダス・ガンジス・チグリス・ユーフラテス四河の水を容れたる四つの水甕を携へて帰国した。彼が着任のころ、印度の形勢は極めて険悪であつたが、一五七〇年に至り、ビジャープル国王アリ・アデル・シャー Ali Adel Shah は、カリカットのザモーリン、マラッカのサルタン竝に遠くトルコと相通じ、徹底してホルトガル勢力を印度より駆逐する策を樹て、此年十二月十万の大軍を催してゴアを攻めた。爾来海陸の激戦十箇月に亙り、ゴアの守備屢々危きを告げたが、能く敵軍と対峙し、遂に彼等をして勝利を断念せしめたのは、実にアタイデの鉄石の意志と金剛の勇気とに負ふ。而も彼を最後の有為なる総督として、その後継者等の姓名は、急速なる没落途上の里程標たるに過ぎなくなつた。

さて印度に於けるホルトガル勢力の衰退は、母国の凋落と相伴つた。ホルトガルは、ジョアン三世の後を継げるセバスティアノ王(一五五七―七八年)の世に於て、母国も植民地も等しく衰退の途を急いだ。此王は国力を顧みずしてあらゆる方面に膨脹政策を遂行した。そは先づモサムビクよりモノモタパに対する遠征を試みて失敗した。次にはアンゴラ Angola を征服して新しき植民地を西阿弗利加に獲得した。偶然に獲得せるブラジルを除

けば、従来ホルトガルは専ら沿海地帯に根拠地を占領せんとし、領土の獲得を目指せることはなかつた。故に叙上の二遠征は、ホルトガル植民史上の新しき努力といふべきである。

而も最も国王の心を捉へたるはモロッコであつた。一五七四年先づタンジールに小遠征が試みられた。次で重臣並にリスボン市会の請願を斥け、親ら軍を率ゐてモロッコに渡り、一五七八年八月アルカーセル Alcacer の会戦に於て、彼に伴へる多数の貴族と共に戦死した。国王は子なかりし故、マノエル王の子にして六十歳の老人なりしエンリケスが王位を継いだ。一五八〇年其死するや、其母によつてマノエル王の孫に当るスペイン国王フィリペ二世が、黄金によつて葡国貴族を買収し、武力によつて国民を威圧し、一五八一年四月十五日、ホルトガル国王となつた。此時よりホルトガルは、スペインが其の欧羅巴政策によつて招ける一切の紛糾に捲込まれた。この合邦は、スペインの敵なるオランダ・イギリス・フランスに対し、南米並に東洋に於ける葡領を攻撃する口実を与へた。但し合邦は葡国衰微の歩度を速めただけで、決して其の原因となつたのではない。少なくとも印度に於けるホルトガル領は、次第に薄弱微力となり、つひには一指を加ふれば倒潰すべき状態に進みつつあつたのである。

さて葡王となれるフィリペ二世は、トマル Thomar に開かれたるホルトガル国民会議に於て、ホルトガルとスペインとの合同は、純然たる君合国なるべきことを誓つた。即ちホルトガルの政治は、国王自身か、然らずばホルトガル人の太守又は王族によつて行はれ、葡人の自由と権利は尊重せられ、国民会議は随時召集され、葡領植民地との通商は葡国船舶によることとされた。かくてホルトガルと其の領土とは、ハプスブルク Habsburg 家の治下に在りても、スペインとは別箇の国家を形成し、在来の法律によつて治められることとなつた。

一切の植民地のうち、フィリペ二世の主權を承認しなかつたのは、アゾーレス群島中のテルシェラ Terciera だけで、其他はフィリペ二世を以て、外敵に対して彼等を保護するに足る強力なる君主として之を承認した。この希望は全然架空ではなかつた。蓋しフィリペ二世時代に於て、ホルトガルのアンゴラ及びセイロンの征服が続行せられ、トルコ人は阿弗利加東岸及びペルシア湾より逐はれ、金鉱探険によつて新領土をモサムビクに拡張したからである。併し乍ら蘭英両国の葡領植民地攻撃が、既に第十六世紀末年より始められた。英仏海賊は、合邦以前にも葡領を襲うて居たが、彼等は公然政府の支援を受けることが出来なかつた。然るに今や事情は極めてホルトガルに不利となつた。

ホルトガルの海外発展に対する最初の大なる打撃は、オランダ商人によつて加へられた。彼等は一五九七年先づジャワ Java に商館を置いた。一六〇一年にはマラッカを襲ひ、一六〇七年にはモルッカ群島及びスマトラのホルトガル植民地を征服した。一六一八年にはジャワにバタヴィア Batavia 市を築いたが、やがて此地は香料貿易の中心となり、啻にマラッカに取つて代れるのみならず、幾くもなくしてゴアをさへ凌駕した。後には印度及びセーロンに於けるホルトガルの根拠地もオランダ人に襲はれた。但しゴアだけは常に彼等の襲撃を免れたので之を聖フランシスコ・ザヴィル Francisco Xavier の遺骨の冥加に帰して居た。

オランダと相竝んで、英国商人もまた葡領侵略を開始した。当初彼等は全然征服の意図なく、唯だ貿易のために東洋に来航したのであるが、一六一五年スラート Surat に於て、ホルトガル人のために貨物積込を妨害せらるるに及んで、初めて之と戦端を開いて勝利を博した。従来ホルトガル人は、印度の西北海岸に於て常勝不敗の名を博して居たが、此の一戦によつて此の名誉を失ふこととなつた。其上イギリス商人は印度諸王、殊にモーガル

皇帝に懇懃を通じたので、容易に通商関係を結び得た。彼等は一六二二年にはペルシアを助けて、ペルシア湾頭の最も重要なる根拠地オルムスを、ホルトガル人より奪取せしめた。かくして亜細亜に於けるホルトガルの覇権は脆くも覆された。その東亜竝にモルッカ群島に於ける貿易はオランダに奪はれた。ペルシア及び西北印度に於けける貿易はイギリスに奪はれた。而して一六二九年には、ホグリ河畔の根拠地が、シャー・ジェハン Shah Jehan のために破壊せられ、一千の葡人は殺され、同じく四千の老若男女は捕虜となり、ベンガル Bengal 方面に於ける葡国貿易は全滅した。

スペイン王フィリペ四世は、ホルトガルの印度貿易衰微を憂ひ、オランダ及びイギリスに倣つて会社を創立するに決し、一六二〇年三月十五日の勅令を以て一会社を設立し、国王自ら百五十万クルサドを払込み、同額資本の払込を公衆に求めたけれど、若干の都市が之に応じただけで、個人応募者は一人もなく、幾くもなく会社は解散せねばならなかつた。一六三〇年十一月十五日、スペインは宿敵イギリスと平和条約を結んだが、印度に関しては条文の解釈を異にせるため、紛争容易に解けず、一六三五に至り、漸く印度に於ける両国代表者の間に諒解成り、互に兵を収めた。即ちホルトガルは一定条約の下に自国領内に於てイギリス人の商業経営を許可したのである。此年ホルトガルは、支那との通商に用ふべき一隻の自国船さへなく、英国船舶を賃借せねばならなかつた。而してゴアでは総てのホルトガル人が先を争ひて此船に貨物を積込んだ。蓋し彼等は、英国国旗が葡国国旗よりも有力にして安全なりと信じたのである（註八）。一方オランダは、一六三六年より一層ホルトガルに対して攻撃に出で、マラッカ海峡は遂にオランダの制するところとなつた。次でオランダは日本政府に勧めてホルトガル人を日本から放逐せしめた。セーロンに於けるホルトガルの地位も危くなつた。かくて一六四〇年ホルトガル

がスペインより分離して再び独立せる時は、交趾支那よりスンダ Sunda 群島に至る商権はオランダの手に帰して居た。而してポルトガルの通商はイギリスの船舶に頼る外に途なきに至つて居た。

〔註一〕 Whiteway : Ibid., p. 174.
〔註二〕 Hunter : Ibid., Vol. I, p. 185.
〔註三〕 Whiteway :Ibid., p. 73.
〔註四〕 Hunter : Ibid., Vol. I, p. 163.
〔註五〕 Hunter : Ibid., Vol. I pp. 155—159.
〔註六〕 Stephen : Ibid., p. 212.
〔註七〕 J. P. O. Martins : Historia de Portugal, Vol. I, p. 294. Lisbon, 1901. (A. G. Keller : Colonisation, p. 117. 引用による)。
〔註八〕 Danvers : Ibid., Vol. I, p. 248.

第五章　印度に於けるポルトガルの植民政策

第一節　印度行政と其の腐敗

茲で吾等は翻つてポルトガルが如何にして其の植民地を統治したかを見るであろう。ジョアン二世（一四八一—九五年）以前に在りては、海外領土は王族の采邑とせられ、その統治は王子に委ねられ、国王は僅に重罪犯人の裁判、住民に対する特権の賦与、十分一税徴収等の権利を保有せるに止まつた。かくて第十五世紀中葉までは

ホルトガル植民地の全権を握りしは王子エンリケにして、彼はセウタの知事、マデイラ群島の領主、並にアソーレス群島の大部分の領主であつた。其上に彼は『基督団』総長として、羅馬法王から全ホルトガル海外領に対する精神的支配権をも与えられて居た。一四五〇年アフォンソ五世は、セウタを王室直轄としたが、其他の領土は依然之をエンリケの下に置き、其後も之を王族に委ねた。

後にホルトガルがギネア及び印度に進出するに及び、王室は初めて熱心に植民地のことを鞅掌するに至つた。そは最早之を領主に委ねることなく、国王親ら其の政治的並に経済的支配の任に当つた。そは真に重大多難なる任務であつたが、国王は其為にリスボンに植民地統治の中央機関を新設して、自己の負担を軽からしめんとはしなかつた。スペインとの合同以前に於て、ホルトガルには植民地の政務を管理し、勅令を起草し、其の実施を監督すべき会議もなく官庁もなかつた。蓋しジョアン二世が最後に貴族の勢力を抑へ去れる後、アヴィス家の諸王は、些かなりとも王権を掣肘すべき会議又は団体の発生を欲しなかつたのである。国民会議は殆ど召集せられず国務会議の参議等は、国王によつて任命せらるる名誉職となつた。一切の権力は国王より出で、国王の信頼せる政治家によつて行使された。植民地統治もまた本国のそれと同じく、国王の寵臣の手に委ねられた。

唯だ一五一六年に至り、財務監督官 Vedores da fazenda を新設して、財政上の改革を試みた。この官吏は本国・阿弗利加・印度の財政事務を監督した。そは本国及び植民地の会計を検査し、王室に属する権利の租借に関する契約を締結し、歳入の収受を監督した。阿弗利加諸島の歳入を収受する『諸島館』ギネア貿易のための『ギネア館』印度貿易のための『印度館』もまた其の管轄下に置かれた。この最後の機関は、印度向きの貨物を準備し、関係者間に利益を分配し、到着貨物を国王に有利に売却し、植民地軍隊の兵士を登録した。

かくて財務監督官の任務は、今日の大蔵省及び会計検査院のそれを兼ねたものであつた。第十六世紀を通じて葡国王室の最大関心事は印度貿易による収益なりしが故に、財務監督官は植民地に対して大なる権力を有して居た。若し財務監督官の職務が強固に組織せられ、本国並に植民地の政治に於ける確実なる活動の分野を与へられたならば、そは恐らく植民省に代り得たであろう。然るに財務監督官は、自己の方針に従つて行動する独立の政務機関に非ず、唯だ幾多の特別の役所又は分立せる局課を監督し又は命令するに過ぎず、従つて互に連絡なき事務のために忙殺されて居た。

フィリペ二世のポルトガル国王を兼ぬるや、ポルトガル植民の衰微を其の統治制度の欠陥に帰し、一五九一年財務監督官を廃し、代ふるに財政会議 Conselho da fazenda を以てし、大なる権能を之に賦与した。この会議は四部に分たれ、一は本国財政を、二はエルミナ・ギネア・ブラジル・サントメ・ヴィルデ岬群島・印度の財政を、三はマデイラ及びアゾーレス両群島のそれを、四はモロッコのそれを鞅掌した。然るに此の改革も、また思はしき成績を挙げ得なかつたので、フィリペ三世の宰相レルメ公 Duc de Lerme は、一六〇四年更に『印度会議』を新設した。そは二部に分たれ、一はブラジル及び阿弗利加を、他は印度を管轄した。そは植民地に於ける行政・司法・及び宗教に関する権能を与へられたが、如何なる理由によつてか、植民地貿易を従来通り財政会議の支配下に置いた。そのため両機関の間に幾多の衝突を生じ、印度会議をして有効に植民地統治を改革することを困難ならしめた。

それにも拘らずレルメ公の改革は、決して全然無効ではなかつた。そは其の与へられたる権能により、財政会議よりも遥に熱心に植民地事情を調査し、幾多の弊害を除くことに努めた。但し其の権力は、ホルトガル政府の

他機関に於けると同じく、スペイン王の下に於けるホルトガル統治に内在せる根本的欠点のために無力となつた。即ち一切の重要事項が、リスボンに於て決せられず、マドリッドで決せられた。之を決するに当りてスペイン国王に意見を具申する者は、リスボンに在りてホルトガルの政務に当れる国務会議・財政会議・印度会議等の参議に非ず、マドリッドに設置せられし『ホルトガル会議』の参議であつた。従つて其の決定は或は時機を逸し或は適切を欠くを常とした。而して一六四〇年ホルトガルがブラガンザ Braganza 家のジョアン四世を奉じてスペイン時代の制度を大体に於て継紹した（註一）。

植民地統治の中央機関が、上述の如く極めて不完全なりし如く、その地方機関もまた不完全であつた。多くの地方機関は何等環境の変化を顧慮することなく、唯だ本国のそれを其儘に模写せるに過ぎなかつた。そは統一ある計画の下に創立せられず、常に当面の必要によつて生れ、その官吏の権限・階級・職分は、一般的なる法律又は規則によつて定められず、幾多の特別命令によつて其の都度々々に定められた。

さてホルトガルが喜望峰の彼方に進出せる主要目的は、最も有利なる東洋貿易の独占に在りしが故に、その政策は出来るだけ広大なる海岸線を支配することで、陸上に国土を略取することではなかつた。それ故にホルトガルは、原則として土人君主を存置し、唯だ其の国内に於て貿易上の特権か、又は一種の主権を獲得するに止めた。而してホルトガルに対する従属の程度により、所謂『印度帝国 Estado da India』を形成する植民地は、下の三種に分たれた。

第一はゴア・ディウ・マラッカの如き純然たるホルトガル領にして、土人国家と何等の関係なきものである。

此等の領土は極めて狭小にして、その最大なるゴアさへ約七百方粁の面積を有せるに過ぎぬ。

第二はホルトガルと同盟を結べる、又はホルトガルの保護の下に立つ土人君主の国土にして、最も多数を占めて居た。此等の国々に居てホルトガル人は、一簡の都市、又は其の一部分、又は一箇の堡塁だけを直接支配の下に置いた。而して第十六世紀中葉までは、殆ど土人国の内政に干渉しなかつた。彼等の求めたる所は、主として土人君主より貿易上の特権を獲得し又は強奪するに在つた。但し其後土人の改宗を企つるに及んで、彼等の態度も自ら変化し、例へば一六一三年の如き、若干の島々に於て、君主に代りて全島の統治を行はんとした。西葡合邦時代に於て行はれし此の企図は、恐らくスペインのメキシコ征服及び其の統治に倣はんとしたものであるが、遂に成功しなかつた。

第三は全然ホルトガルより独立せる諸国に築かれたる居留地にして、僅に貿易上の制限せられたる権利を有せるに過ぎない。即ち支那の澳門・ベンガルのチッタゴン Chittagong・ジャワのバンタム Bantam・セレベス Celebes 島のマカッサル Macassar に於ける商館の如き是れである。

ホルトガルは原則として都市及び其の周囲に住める土人だけを直接支配した。一五六〇年以前には、田舎の土人を殆ど念頭に置かなかつた。其後土人改宗の目的を以て、半ば官吏、半ば僧侶による政治が、田舎の土人に対しても行はれた。都市に於ける彼等の土人政策は、出来るだけ彼等をカトリック教に改宗せしめ、且ホルトガル人と土人女子との結婚を奨励するに在つた。土人との結婚奨励はアルブケルケに始まる。彼はゴア征服の後、その私淑せるアルキサンダーの亜細亜に於ける、並にハミルカ Hamilcar のスペインに於ける例に倣ひ、其の兵士に土人の女子を妻帯せしめた。兵士等は既に本国に於て雑婚と混血児とに慣れたるが故に、之に対して何等の偏見をも有しなかつた。而して国王は此の結婚に対して婚資を賜はつた。斯かる妻帯者は、後には諸種の特権を

有する一種姓を形成し、官庁に於ける小さき役目は彼等によつて占められ、ゴアの周囲に在る王領土地も彼等に分与された。

印度帝国の最高官庁はゴアに置かれ、総督が此処に駐在した。総督の任期は三年にして、殆ど延長されることはなかつた。ヌノ・ダ・クーニャが一五二九年より一五三八年まで在任せる如きは、特別の例外に属する。総督は印度帝国の文官武官を総帥し、殆ど国王に等しき威厳を与へられた。例へばセバスティアノ王は、如何に高位の人といへども、脱帽せずして総督に物言ふことを禁じた。第十七世紀中葉に於て、その俸給は八千クルサド（約八万八千法）にして、外に胡椒六百キンタルを賜はつた。そは『印度の王にして神』であり、国王に対する外、何人にも責任を負はず、印度に於て裁判に附せらるることがなかつた。但し彼は総ての重大なる問題について参議たちの意見を徴せねばならぬこととなつて居たので、そのために少なからず行動の自由を束縛された。

諸植民地には甲比丹 Capitão と呼ばれし長官あり、商務官、監督官、書記、裁判官が之を補佐した。ダボル及びバティカラの如き重要ならざる植民地では、単独の駐在官が行政並に貿易に関する一切の事務に当つて居た。此等の甲比丹は土人君主との親善を維持し、ホルトガルに帰したる領土を治め、租税を徴し、且最も重要なる任務として貿易に関する一切の事務を執つた。彼等はゴアに送るべき貨物を購入し、ホルトガルより送附せられたる貨物を販売し、若干品目の貨物の貿易独占を国王に留保せる条約の励行を監視した。

ホルトガルの建設せる『印度帝国』は、之を善く治むることが至難であつた。まづ植民地間の距離が大なる上船舶は貿易風を利用するのみなれば、相互の往来は頻繁ならず、その連絡は緊密でない。植民地官吏は、熱帯の気候に影響せられ、印度の柔弱奢侈なる生活に感化された。交はるべき母国の同胞なきが故に、奨励を受くるま

でもなく多く土人女子と同棲したが、第十六世紀末年に至りて官吏の大部分は此等の混血児から採用された。第十七世紀に於て、政府はリスボン孤児院より両親なき女子をゴアに送り、純血なる家族を造らしめんとしたが、もとより大勢を左右すべくもなかつた。

さて植民地相互の孤立、気候風土の影響、行政部内に於ける多数混血児の採用は、植民地の腐敗を甚だしくしたには相違ないが、その最大の責任者は、貪欲にして猜疑心に充ち、狭量にして怠慢なるリスボン政府そのものであつた。猜疑と不信とによつて、任期を三年と限られたる総督は、十分に政績を挙ぐべき時日を有せず、従つて其の職務に大なる関心を有ち得なかつた。卑劣なる密告が盛んに行はれ、而も啻にそれが看過せられしのみならず、奨励さへもされた。直接本国政府と交通する権利を与へられて居た官吏は、屢々総督の政策を国王に誹謗したが、総督は之を弁解する途を有たなかつた。

加ふるに官吏任命の方法もまた弊害に充ちて居た。財務官、甲比丹の大部分、及び司法官は、国王親ら之を任用するを常としたが、時には除外例もあつた。例へば或る総督は印度検事総長をリスボンから伴つて来た。或る総督は自ら澳門知事・ディウ甲比丹を任命した。甲比丹の部下は、時として国王自身により、時として印度総督により時として甲比丹によつて任命された。多数の官吏、殊に甲比丹の任期は三年であつた。官吏の任用は才能識見によるに非ず、主として因縁情実によつて行はれた。国王は高官の子息にして全然印度を知らざる者に重要なる地位を与へた。また貴族の年若き娘に婚資として甲比丹の職を与へ、彼女の配偶者が其の職務を行つた。而して総督及び知事も、また国王の此種の例に倣つた。清廉潔白を以て聞えたるガルシア・デ・ノローニャ Garcia de Noronha 及びジョアン・デ・カストロの如きさへ、親戚故旧の一団を伴ひて印度に着任し、有利なる地位を

彼等に与へた。また或る総督は官職を競売に附した。

多数の競争者を満足させるために、政府は予め一群の候補者に一箇の地位を約束し、順番に之を就任させる慣例を作つた。而も候補者の数は爾く多く、後から登録されたものは到底生前に順番の回り来る可能なきに至つた。時には死亡したと信ぜられたる先任権所有者が現れたので、現在の在官者が罷免されることもあつた。

かかる政治組織に於て綱紀の振張せらるる道理はない。国王の眷顧によつて任用せられし官吏、就中門地高き貴族に属する者は、植民地裁判官の支配を受けず、総督の権威をさへも蔑視した。而も印度政治に於て最も官紀を紊りしものは、行政事務と貿易上の取引とが、同一官吏によつて行はれし制度であつた。規則は官吏が個人として商業を営むことを禁止した。彼は国王の代理者としてのみ行動せねばならぬ。但し此の禁止は毫も遵守されなかつた。既に初代総督の時から、植民地知事たちは貿易に従事し、その悪例は部下の倣ふところとなつた。セバスティアノ王（一五五七―七八年）時代には、植民地高官は総て貿易に従事し、其の権力を営利のために悪用した。彼等は之によつて常に王室の貿易独占を犯した。而して此の侵犯は国王が官吏に向つて、或は俸給の一部として、或は賞与として胡椒乃至其他の王室独占貨物を与へた為に、一層行はれ易かつた。

純然たる行政事務に携はるものも、亦彼等に倣つて私腹を肥やした。彼等は商売によつて利益を得難きにより一層不正なる手段によつて収入を図らねばならなかつた。例へば、軍隊給与官は、俸給だけを請求して兵士の実数を減じた。後年ゴアの給与官は、一万七千人の給料を受取りて、実際は四千の兵を維持せるに過ぎなかつた。

リスボン政府は、此等の弊害を改めんとしたけれど、一切の努力は水泡に帰した。蓋し真に植民地の官紀を振粛するためには、リスボン政府そのものの根本的改革を必要とした。而して此事は当時のポルトガルに対して望む

べくもなかつた。

かくして印度に於けるホルトガル領は、竟にアルブケルケが理想とせる如き『印度帝国』と決してなり得なかつた。総督はゴアを治め、軍事的遠征を指揮し、諸植民地とリスボンとの通商を統制し、国王の命令を諸甲比丹に伝達したが、マラバル海岸を除いては其他の植民地の政治に干渉しなかつた。而して軍事上の事柄を除き、総督の権威は印度内の植民地に対してさへ次第に衰へて行つた。印度洋沿岸、支那海沿岸、及びモルッカ海上に散在せる諸植民地の間には、殆ど何等の行政的連絡なく、互に孤立して居た。一五一七年セバスティアノ王は此の分散を匡正するため、亜細亜に於けるホルトガル領を三分し、ガルダフイ Guardafui 岬よりセーロン島までを印総督府、ガルダフイ岬よりコリエンテス Corientes 岬までをモノモタパ総督府、ビルマより支那までをマラッカ総督府の管轄としたが、実際に於て何等益するところなく、後の両総督府は幾くもなく廃止された。フィリペ三世が一六〇四年に創設せる印度会議も、印度統治改善のために努力したが、上述の如く遂に頽勢を如何ともし得なかつた。

第二節　ホルトガルの経済政策

印度航路の初めて発見せられし時、マノエル王は往年のエンリケ王子の政策を踏襲し、年賦金を国王に納附することを条件として、印度貿易をホルトガル又は外国の商人に委ねんとした。国王はホルトガルの資本のみでは、広大なる印度の富源を開拓し得まじと考へた。されば初期の遠征艦隊にも、ヴァスコ・ダ・ガマの建議を容れてフロレンス其他の外商を之に参加せしめた。一五〇〇年の国王の宣言によれば『吾等が主なる神の恩恵によつて

発見し之を領有する』印度との貿易は、総てのポルトガル人及び『吾が国に往居して帰化証を所持する外国人』に対して、平等に許可せられることとなつた。その条件としては、少なくとも二百噸以上の船舶を使用し、利益の四分の一を王室金庫に納入することであつた。一五〇一年にはリスボン在留のフロレンス豪商バルトロメウを社長とする一会社の成立を見、二隻の船舶をジョアン・ダ・ノヴァの指揮の下に印度に派遣せる船隊に加入せしめた。

然るにジョアン・ダ・ノヴァの出帆後幾くもなくしてカブラル船隊の帰国するや国王は如上の方針を一変した。蓋しダ・ガマの齎せる貨物による利益は遠征費に六十倍し、いまたカブラルの齎せる貨物による利益は、四隻の難破ありしに拘らず、実に二十万ドゥカット（約二百四十万法）を要せる遠征費に五倍した。この実状を見たる国王は、もはや外国人を参加せしむる必要なきを知り爾来特別なる例外を除いて印度貿易を外国人に閉鎖した。而して単り外国人のみならず自国商人の参加をも困難ならしめ、印度貿易の一切の利益を王室の手に収めんとした。即ち国王は自国商人のギネア貿易又は印度貿易に従事することを、正式に禁止はしなかつたが、胡椒を初めとし、殆ど総ての有利なる東洋貨物の取引を、順次王室の独占とした。而して単り印度とリスボン間の貿易のみならず、ゴアと重要植民地即ちマラッカ・オルムス・モサンビク間の貿易も、乃至ベンガル・ペグー・モルッカ諸島・支那・日本との取引も、また同様の制限の下に置かれた。

政府専売の貨物、殊に胡椒の大部分は、之を産出する諸国の君主と条約を結び、之によつて定められたる価格で購入された。カリカット・カンナノル・コーチン・キロン・セーロン・モルッカ諸島の君主等は、彼等の国内に産する胡椒・生薑・肉桂・丁子・肉荳・を、ホルトガル政府以外に売却することを禁ぜられた。集められたる香料の額が、リスボン市場の需要を超過せる場合は、その過剰を即座に焼棄した。リスボンより印度に送る貨物

は多くなつたので、支払の大部分は正貨及び金塊で行はれた。金塊は、東阿ソファラの土人に、硝子玉首飾や印度産木綿を売つて手に入れた。

印度における専売貨物は、原則として商務官が直接之を集めた。反之ギネアとの貿易、並に主要植民地相互間の航海は、之を競売に附し又は之を恩賜した。第十六世紀中葉には、斯くして特権を与へられたる船舶の航行が頻繁となり、王室商務官は往々にして此等の特許商人が貨物を買ひ去れる後にオルムス又はマラッカに到着し、貨物の購入が不可能となりし場合もあつた。時を経るに従ひ、此等の航海の多くは、競売に附せられる代りに、或る官職に附随する役得となつた。例へばモサムビク・ゴア間の航海はモサムビク知事の役得となり、アラビア馬のゴア輸入はオルムス知事の役得となれる類ひである。かくて印度の貿易制度は、単なる個人商人の参加を至難ならしめた。通商の最も有利なる部門は王室の独占であつた。其の部門は原則として彼等に開放されていたが実際は官吏が其の利益を壟断して居た。そは勅令によつて禁止されて居たが、如何なる官吏も之を守らうとしなかつた。

貿易独占の監督を容易ならしめるため、土人船舶は、官憲の発行せる許可証を携帯するに非ずば、ホルトガルの支配下に在る海上の航行を禁ぜられた。同様の目的から次の如く貿易を集中した。東阿弗利加海岸の産物はモサムビクとメリンデに、ペルシア及びアラビアの産物はオルムスに、スンダ及びモルッカ群島のそれはマラッカに、支那及び日本のそれは澳門に、而してホルトガルに送らるべき一切の貨物は、一旦悉くゴアに集められた。この制度のために、母国とゴア間の一寄港地たる東阿のモサムビクさへ、直接には母国と何等の通商関係なく、唯だゴアと之を有するのみであつた。

ゴア・リスボン間の貿易は、植民地相互間のそれに比ぶれば、大なる自由を個人に与へたる如く見えた。輸送は総て王室の船舶によつて行はれるけれど、商人は之に貨物を託すことが出来る。毎年二月又は三月、通例七隻より成る船隊が、ゴアに向つてリスボンを出帆した。その航程は厳重に規定せられ、極めて重大なる理由あるに非ずば、決して之を変更し得なかつた。そは喜望峰を回りて後、時日の余裕あればモサムビクに寄港し、然らざる時はゴアに直航した。一航海は往復十八箇月とされた。各船隊は、在印商務官が購入せる貨物の代価として支払ふべき現金を携行した。其額は知り難いけれど、一六〇七年度の携行金額はファルカン Falcão によれば一五〇、〇〇〇クルサド（約一、五〇〇、〇〇〇法）であつた。其上に個人商人が印度に輸出する貨物をも積込んだ。彼等は従価三割の輸出税を国王に納め、且印度諸港でも関税を納めねばならなかつた。加之種々繁瑣なる規則が此の自由を制限したので、後には殆ど有名無実となつた。

セバスティアノ王の時代まで、胡椒輸送は常に直接王室商務官の手によつて行はれたが、一五七八年国王は之をリスボン在留のアウグスブルク商人コンラード・ロート Conrad Roth に委ねた。即ち輸入する胡椒の一半は無償にて彼のものとなり、国王は其の他半を一キンタルにつき三〇ドゥカットで彼に売却することとした。此の契約はスペインとの合邦以後も継続した。かくて印度貨物の輸送は、悉く此の独逸商人の責任となつたので、ポルトガル官吏は、王室の倉庫と船舶とを閑却し去るに至つた（註二）。

印度貿易は言ふまでもなく巨利をポルトガルに与へた。一時ポルトガルの輸入せる香料は、欧羅巴の需要額を超過し、また彼等の齎せる香料は、ヴィニス商人の取扱へるものより劣等だとされた。事実彼等は、此の貿易の初期に於て、香料の品質が産地によりて優劣あるを知らず、手当り次第に之を買込んだが、ヴィニス商人は多年

の経験により、良質のものだけを取扱つて居た（註三）。其等の事情による香料価格の低落ありしにも拘らず、此の貿易は極めて有利であつた。一例を挙ぐれば、一五一三年、フロレンスの商人ジロラモ・セルニジ Gilorano Sernigi は、国王の特許を得て四隻の船を印度に送り、その三隻を失ひて僅に一隻だけがリスボンに帰着したが、それでさへ艤装費乃至租税等の一切の費用を差引きて、猶且六割乃至七割の利益を挙げた。同様の特許を得て一五〇六年に創立せられしアウグスブルグ商人等の会社に至つては、一航海につき実に十五割乃至十七割五分の利益を挙げたと言はれる。

印度の中心たるゴアには、文字通り百貨輻輳した。モサムビクからは黒人奴隷・黒檀・象牙・黄金が来た。オルムスからは絹・ペルシア絨緞・薬木・銀貨・真珠が来た。印度諸港では、ディウからインディゴ、チャウルから絹、オノル・カンナノル・カリカット・クランガノル・コーチンから胡椒が来た。次にはマラッカに於て、ゴアに送るべき東亜の諸貨物が集められた。マラッカからペグー・シャム・印度支那に向けて年々派遣された船舶は、金・錫・銅・麝香・青玉・紅玉を積んで帰つた。モルッカ群島からは肉荳蔻・丁字等の高価なる香料が集まつた。而して第十六世紀末葉に至り、支那及び日本との交通が開けるに及び、マラッカは一層重要なるホルトガルの商業中心地となつた。

かくしてホルトガルは、第十六世紀に於て、空前にして絶後なる地位を欧羅巴市場に占めた。蓋し此の以前に於ては固より、此の以後に於ても、一国が欧亜貿易を独占する如きことは、竟に在り得なかつたからである。而して此為に最も深刻なる打撃を受けたのはヴェニスであつた。そはエジプト及びトルコと協力して、ホルトガルの貿易独占を妨げることに死力を尽したが、遂に目的を果たし得なかつた。最後に彼等は、毎年ホルトガルに齎

さるる香料全部を、ホルトガルが要求する以上の値段で引取りたいと申込んだがマノエル王は之をも拒絶した。かくの如くにしてヴェニスは、其の最大の富源をホルトガルのために奪はれ同時に強国としての地位を失つた。

種々なる租税の徴収及び土人君主の調貢によつて、ホルトガルが印度に於て幾何の歳入を得て居たかは、之を精確に知る道がない。当時のホルトガル政府は、予算を編成せず、会計をも発表しなかつた。其上各植民地の会計帳簿も殆ど保存されていない。印度に於けるホルトガル王室収入を稍々明細に示せるものは、一六〇七年国王秘書ファルカン Lous de Figueiredo Falcão の調査だけである。彼によれば印度の歳入は三五五、五六〇ミルレイス、即ち約八百五十方法である。此額はリンスホーテン Linschoten が一五八五年、之を約百万ドゥカット（約一千六十万法）と推算せるに比べて稍々少ない。そは恐らくファルカンの時には、ホルトガルがオランダとの競争に敗れて、モルッカ群島からの収入が殆ど皆無になつたからでもあらう。

而して叙上の歳入は、印度に於ける歳出を償ふに足りなかつた。王室は東洋貨物購入のために、年々現金をゴアに送らねばならなかつた。初代印度総督アルメイダ以来、印度総督府は歴代政費に不足し、軍隊に俸給を払ひ得なかつた。而して征服の歩みを進めるに従つて、財政状態は悪化して行つた。ソファラからの黄金、土人君主の納貢、及び諸税収入を合せても、到底歳出を支辨し得なくなつた。それでも第十六世紀中葉までは、国家の利益に忠実なる人物が要路に当れば、尚歳入歳出の均衡を保たしめることが可能であつた。例へば、マルティン・アフォンソ・デ・ソウサ Martin Affonso de Sousa（一五四二―四五年）は、その厳酷と吝嗇とを以て一般に悪まれ、最悪なる総督の一人に数へられたに拘らず、その在職中に前任者の負債四十五万ミルレイスを償却した上、約五万クルサド（約五十七万五千法）を金庫の中に残し得た。但し之は例外のことに属し、セバスティアノ王時

代以後は、斯かる事は絶無であつた。即ち負債は年と共に増加し、歳入の増加は支出の濫費に伴はなかつた。

かくの如くなるが故に、ポルトガルが印度より得たる経済的利益は、専ら其の貿易だけから収められた。唯だ茲に注意すべきは、欧亜の貿易は毎年一回、六隻又は七隻より成る一船隊の往復に限られていたことである。もと此の規則は、マノエル王が一時に多量の東洋貨物を輸入することによつて、欧羅巴市場に於ける価格の低落を防止するために設けられたものであつた。蓋しポルトガルは、曽て香料貿易の中心たりしヴェニスよりも、二倍乃至三倍の香料を此の船隊によつて輸入した。それにも拘らず欧羅巴の需要が激増せるため、価格は啻に暴落せざりしのみならず、一層多量の消化力あることを示した。同時に欧羅巴貨物の東洋に於ける販路拡張も、また十分に可能であつた。かくてリスボン及びゴアには、搭載し切れぬほど貨物が累積せるに拘らず、王室は決して船舶数を増さうとせず、また派遣回数を頻繁にしようとしなかつた。唯だ出来るだけ多量の貨物を積取るため、巨大なる船舶を建造することだけが許された。

斯くの如く制限されては居たが、印度貿易による利益は甚大なるものに相違なかつた。もとより輸出品は輸入品に比ぶれば物の数でなかつた。その大部分は、前述の如く香料購入に充てらるべき正貨であつた。但し個人商人が船隊に託して輸出せる貨物は、印度市場に於て極めて高価に売れた。そは葡萄酒、油、英国製又はフランドル製の精巧なる毛織物、ナポリの絹、ジェノアの天鵞絨、リュクの緞子、及び其他の奢侈品であつた。また珊瑚、水銀、朱、銅線、ヴェニスの板硝子並に硝子器は、王室の独占輸出品であつた。

復航は亜細亜の諸製品、薬種、殊に香料を積んで帰つた。香料は極めて廉価に購入せられ、時としては条約によつて法外なる廉価を土人君主に強ひた。例へば第十六世紀中葉に於て、セイロン王は肉桂三百バハル（約五二、

八〇〇瓩）を無料にてポルトガルに交付し、其以上は一バハルにつき三ゼラフィンにて売渡すことを契約させられた。即ち一キンタルにつき約八法三十である。然るに当時に於けるリスボン市場の肉桂相場は、一キンタルにつき実に七〇ミルレイス即ち二千法であつた。胡椒はマラバルに於て一キンタル約二クルサド半で購入せられ、リスボンに於て三十乃至三十二クルサドで売られた。

初めマノエル王は、直接外国人に東洋貨物を売らんとし、船をオランダ及びイギリスに派して香料を輸出させたが、後には主として一四九四年アントワープに設置せるポルトガル商館の手に委ねた。このためにアントワープは頓に繁栄した。英・蘭・独の商人等は、当時の国際貿易に於て最も重要なる商品たりし胡椒を手に入れるため、総てアントワープに来ねばならなかつた。かくして一五四九年までは、香料は主として此地で処理された。アントワープに輸送せる残余の香料は、リスボンの特許商等に売渡された。然るに此年ジョアン三世は、アントワープの葡国商館の維持を煩はしとなし、リスボンに於て総ての香料を競売に附することとした。次でセバスティアノ王の時に至り、財政逼迫のため、巨額の前金を収受して、自己の責任を以て印度より輸入する一商人に、胡椒販売を特許した。

香料の売上金は、年額四百万法乃至六百万法に達したが、その大部分は船舶艤装費に充てられた。一五八五年リンスホーテンは、香料売上高及び輸入貨物に対する関税収入を六十万ドゥカット、船舶艤装費を三十万ドゥカットと評価した。即ち三十万ドゥカット（約三百十八万法）の純益である。ファルカンも一六〇七年略ば同額に評価した（十三万ミルレイス即ち三百十四万六千法）。但し如上の評価は、臨時費又は難船による損失を度外せるものである。例へば一五二八年ヌノ・ダ・クーニャの船隊艤装費は実に二十万クルサド（二百五十万法）であり、

一五三三年ペドロ・デ・カステロのそれも十万クルサドを要した。加ふるに船舶の約一割は難破せるが故に、その損失はジョアン三世の末年、即ち一五五七年までに百三十四万ミルレイス（約三千二百万法）以上に達した。即ち一年平均約五十五万法である（註四）。それ故に印度貿易による毎年の純益は、精々二百五十万法と見ねばならぬ（註五）。

〔註一〕 Hunter, I, pp. 104—105. Lannoy et Linden, Ibid., p. 139.

〔註二〕 Lannoy et Linden, Ibid., pp 140—143.

〔註三〕 W. Heyd, Histoire du commerce du Levant au moyen âge. Vol. II, p. 599.

〔註四〕 ハンターが引用せるファルカンの記述によれば、ポルトガルは一四九七年より一六一二年の間に、八〇四隻の船舶を印度に派遣した。そのうち四二五隻は欧羅巴に帰航し、二八五隻は印度に残留し、九五隻は難破した。

〔註五〕 此の一節の記述は殆ど Lannoy et Linden に拠った。

第三節　ポルトガルの宗教的活動

征服と貿易と伝道とは、葡人が万難を排して印度に進出せる動機であつた。吾等は略ぼ其の征服と貿易の跡を辿り、進んで彼等の宗教的活動を述べんとするに当り、先づ明かにせねばならぬことは、彼等の奉じたる基督教の性質である。第一章に述べたる如く、イベリア半島の基督教徒は、実に第八世紀初頭より第十五世紀末葉まで、死活の戦を回教徒と戦つて来た。セム民族の神は嫉妬の神である。此点に於てエホバとアラーとは何等異なるところがない。嫉妬の神エホバを崇むる宗教として、本来排他的なりし基督教は、イベリア半島に於ける回教徒との戦の間に、不幸にも一層甚だしく排他的となり、他国に於て見るを得ざる不寛容の精神を、ポルトガル人並に

スペイン人の魂に植付けた。

此の精神はポルトガル人をして単り回教徒に対してのみならず、総て基督教徒以外のものに対して、何の容赦もなく『火と剣』とを用ひしめた。王室史家バロス João de Barros の言葉を藉り来れば『モール人及び異教徒は、エス・キリストの法律の外』に在り、従つて基督教徒は彼等に対して如何なる義務をも有しない』のである。此の不健全なる信仰の下に、ポルトガル人は印度に於てモール人及び印度人に対し、残忍無比の行動を敢てした。吾等は既にヴァスコ・ダ・ガマの残酷なる行為を叙べた。アルブケルケの如きも、アラビア海岸に於て女子の鼻を殺ぎ、男子の手を断つた。甚だしきは母親たちをして其の児等を磨臼の中に投ぜしめ、その磨殺さるるを見せつけた後、その母親たちの首を刎ねた総督さへもあつた（註一）。東阿海岸ブラヴァ Brava 攻略の際には、貪慾無残の葡国兵士等が、簡単に耳飾と腕輪を奪取するために、婦女子の手と耳とを斬り棄てた（註二）。かくの如き行動は、一部分は印度人に恐怖心を鼓吹するための政略でもあつたらう。蓋し彼等の印度に於ける兵力は極めて微弱なりし故に、抵抗または叛乱を防ぐため、かかる手段によつて土人を威嚇したのであらう。彼等は故国に於て回教徒に対して残酷なりしが故に、その習慣が亜細亜の民にも平気で適用された。此際彼等の神は、決して彼等を咎めなかつた。彼等は戦ひ勝てる後、婦人及び小児をさへ一人残らず屠り尽して、熱烈なる勝利の感謝を神に捧げて居た。

異教徒に対する叙上の如き極度の不寛容が、その同一の精神から、改宗せる土人に対する法外の寛容となりて現はれた。人間は一旦カトリック教の信仰に入り、其掟を守るに至れば、人種と、皮膚の色と、伝統と、文化の程度とを問ふことなく、直ちに正しく考へ、正しく行ひ得る者とされた。それ故一旦基督教に改宗すれば、土人

は直ちにポルトガル人と同等のものとなり、同一法律の下に生活し得るのである。此の原則は幾多の勅令中に示されているが、一五五七年六月十五日の勅令によつて最も具体的になつた。この勅令によつて、一切のカトリック教を奉ずる印度人は、全然ポルトガル人と同一の権利を与へられた。かくてポルトガルは、伝道によつて土人を改宗せしめ、カトリック教を基礎とする社会を植民地に於て組織し、奴隷を除く総ての植民地住民を、人種的差別なく待遇せんとした。

さてポルトガルの印度経略初期に於ては、一切の宗教的情熱は、政治的並に経済的動機と相結び、東洋に於ける新しき十字軍即ち印度に於けるモール人征討のために傾倒せられたるが故に、仮令フランシスコ派、アウグスティノ派、ドミニコ派の僧侶が次々に渡来したとは言へ、教会本来の宗教的活動は決して活発ならず、従つて其の勢力も微弱であつた。例へばアルブケルケがゴアに於て、其の部下の水夫に土人女子との結婚を許せる時、宣教師は其の教会の儀式によらざりしことを抗議せるに対し、アルブケルケは『教会の儀式には依らないが、アルブケルケの儀式によつた』という一言で之を斥けた。またカンナノルに於て一土人基督教徒が一印度教徒を殺して教会に避難せる時も、アルブケルケは其の治外法権を無視して該土人を捕へ、之を断手の刑に処した。而して教会は之を如何ともし難かつた。

然るに一五四〇年頃よりポルトガルの宗教政策は、内外とも一転期に入つた。即ち此頃に至りてジョアン三世は、宗教審問とエスイト団との助力の下に、新にポルトガル本国に於けるユダヤ人並に異端者の迫害を開始し、一切の非カトリック要素を国外に駆逐せんとした。而して国王は海外に於ても此の『浄化』を強行せんとし、亜細亜領土にカトリック教の信仰を栄えしめんと努力するに至つた。この新しき政策は、一五四〇年ゴア島上の一

切の印度教殿堂の破壊を以て始められた。そはジョアン三世の勅令によつて行はれ、爾来二世紀の間、福音の宣伝と、教会の利益の保護と、異教徒の迫害とが、印度に於て手を携へて行はれた。

かくて国王は、海外に於ける教会の勢力を増すために新司教区を設くる許可を羅馬法王から得た。国王は国家より俸給を受くる僧侶の数を増し、土地及び金銭の賜与によつて諸教団の僧侶を印度及び其他の植民地に誘致した。彼等は印度に於て、強固なる組織を有する既成宗教、即ち婆羅門教、回教、猶太教、乃至ネストリウス派が其の聖職者、その儀礼、その殿堂を以て、多数の信者を擁するを見た。而して彼等は之に対してカトリック教の勝利を獲るためには、暴力を以てする破壊を必要と考へた。当時印度に於ける最も熱烈なる狂信者ミゲル・ヴァス Miguel Vaz は、一五四五年ホルトガルに帰り、ジョアン三世によつて伝道総監に任ぜられ、且最も乱暴なる迫害を行ふ権能を与へられて、一五四六年再び渡印した。彼は一切の非基督教徒を官職より逐ふ権利をも与へられて居た。彼は帰来無遠慮に此の権利を行使したが、幾くもなく毒殺せられ、その下手人は遂に知られなかつた。

一五四三年ゴアの一医師が、異端の故を以て初めて印度に於て火刑に処せられた。其後一五六〇年に至り、宗教審問所が印度にも開設せられ、爾来百七十三年間に邪教徒処刑の行はれしこと七十一回、刑罰に処せられしもの四〇四六名、その一二一名は火刑を宣告せられ、うち五七名は生き乍ら焚かれた。この宗教審問による迫害は主としてネストリウス派の信者に加へられた。而して母国の宗教審問を免れて渡印せるユダア人は、此処でも同様の迫害に遭はねばならぬこととなつた。

教会の此の偏狭なる神を明示すること、一五六七年ゴアに於て発布せられし法律に若くはない。これによれば信者は非信者を奴婢とし、非信者の医師を依頼し、非信者の理髪師に顔を剃らせてはならぬ。印度教徒及び回教

徒は、その宗教に用ゐる何物をも購買することを許されず、その教師は悉く放逐された。総ての印度教徒の名簿が作成せられ、五十名づつ一団となし、日曜毎に、基督教の功績を讃へる説教を聴聞させられた。夫又は妻の孰れかが改宗した時は、改宗せざる夫又は妻は、その真意を探るに必要なる期間だけ、有徳なる人士の許に預けられた。非信者の父が幼児を遺して死せる時は、国家が之を養育して信者とした。其後に発布せられし法律では、一切の非基督教信者は、ゴア及び其の周囲に於て、一見異教徒たることを辨ずべき服装をなし、乗馬、乗輿及び日傘の携帯を禁ぜられた。それ故に夙く既に一五六一年頃よりゴア及び周囲の諸島の人口は減退し、此の世紀の末葉には、豊沃なるサルセット Salsette 島さへ荒蕪地と化した(註四)。一七二九年十二月十九日、時の総督ジョアン・デ・サルダーニャ・ダ・ガマ João de Saldanha da Gama は、書を国王に呈し、葡領印度の衰頽は商業の衰微により、商業の衰微は宗教審問を恐怖せる商人即ち土人及びモール人が、悉くホルトガル領を去れるによると説明したる後、下の如く述べて居る――『予は宗教審問所が如何なる権利によつてカトリックならざる者を裁判し得るかを知らず、予は唯だ下の事実を目撃するのみ、即ち宗教審問による法外の拘禁者のために、一切の北部地方は人煙稀薄となり、見事なりしタンナ Tanna の葡国商館は亡び、之に代る一商館がボムベー Bombay に建てられ、英人は此処より絹物、毛織物及び其他の商品を仕入れ、之をホルトガルに輸入す』(註五)。かくの如き努力にも拘らず、教会は印度人に対して殆ど精神的感化を及ぼさなかつた。その改宗者は多く物質的利益を目指せるためにして、決して精神的幸福を求めてではなかつた。故にフランシスコ・サヴィエル Francisco Xavier の如き無私篤信なる宗教家の慈心悲腸が、一時大なる感化を与へたるにも拘らず、基督教は遂に其根を印度に下ろし得なかつた。

加之、教会は次第に政府の大なる負担となつた。僧侶は到処に会堂と僧院とを建てた。ゴアは一時三十の僧院と三万の出家とを有して居た。一六二六年総督フランシスコ・ダ・ガマは、ゴア其他の亜細亜植民地に於ける僧侶の数は、俗人に倍すると述べて居る（註六）。一六三五年ごろ、ゴアに於ける僧侶の数は、軍人を含む白人の数より多かつた。而して彼等は遠慮なく政府の収入を使用した。一五五二年財政監督官シマン・ボテリョ Simão Botelho は、国王に下の如く書き送つた――『此国の宗教家は極めて放肆に多くの施与を行ふが故に、陛下の収入の大部分は此の為に費さる』。彼の計算によれば、当時教会に対する国家の補助は約七千磅であつた。而して一六一二年フェルカンの計算によれば、それが二万六千磅に増加した。

かくて僧侶の勢力次第に大となり、国庫は空しきを告ぐるも教会は富むに至り、漸く其の跋扈を抑へる必要を感じて来た。一六三一年総督ミシャエル・デ・ノローニャ Michael de Noronha は、フィリップ四世に下の如く書き送つた、――『僧侶等は啻に予の命令を奉ぜざるのみならず、エスイト団の如きは、自らテューティコリン Tuticorin の支配者となり、武装団体を擁して政府を蔑視す。彼等はトラヴァンコール Travancore 及び其の海岸の真珠を絶対に支配し、海上に於て陛下の船長に挑戦す。加之彼等はオランダ人、モール人等と連絡を取り、印度に大害を及ぼす。甚だしきに至りては彼等は陛下が印度君主たることを拒み、王命を蔑如す』（註七）。かくの如くにして基督教伝道は、ポルトガルのためにも印度のためにも、殆ど何等の利益をも与へなかつた。

〔註一〕 Danvers: Ibid., Vol. II, p. 198. 此の残忍なる総督は Jeronimo de Azevedo (1611—17)。
〔註二〕 Hunter: Ibid., Vol I, p. 139.
〔註三〕 Whiteway: Ibid., pp. 196—197.

〔註四〕 Hunter : Ibid., Vol. I, p. 315.
〔註五〕 Whiteway : Ibid., pp. 66—67.
〔註六〕 Danvers : Ibid., Vol. I, xl—xli.
〔註七〕 Danvers : Ibid., Vol. II, p. 222.
〔註八〕 Danvers : Ibid., Vol. II. pp. 234—235. ヱスイト団は一七五九年 Pombal によつて一切の葡領から驅逐された。

第四節　本国に及ぼせる影響

ホルトガル国民は、第十五世紀に於て、賢明なる君主及び王子の指導の下に、内には政治的団結を堅固にして文化を向上せしむると共に、外には有為大胆なる海員を養成した。而して第十六世紀に於て、彼等は此の努力に対する十分の報償を得た。リスボンはヴェニスに代つて東洋貨物の集散地となつた。ペルシャ・印度・日本との貿易は彼等の独占に帰した。ヴァスコ・ダ・ガマ、アルブケルケ、カストロ、アタイデを初め、幾多の英雄が雲の如く輩出した。バロスの如き史家、カモエンス Luis de Camões の如き詩人を生んで、葡国文学の黄金時代を現出せしめた（註一）。而して欧羅巴第一の富国ともなつた。然るに其の同じ世紀に於て、吾等は早くも葡国勢力の沈淪を見た。そはアフォンソ・エンリケスによつて建設せられ、ジョン一世によつて強化せられし独立をさへも保ち難く、当代第一の強国たりしホルトガルは、脆くもスペインに併合された。富と力の増進と共に、腐敗と荒廃之に伴ひ、世界史の転回点となりしダ・ガマの印度航路発見以来百年ならずして、ホルトガルは既に亡国の途を辿りつつあつた。第十六世紀の葡国史は、一国の偉大は決して其の富と商業の繁栄とにのみよるものに非ざ

ることを痛切に示して居る。吾等はいまホルトガルが如何にして衰退の路を急いだかを点検せねばならぬ。

印度の発見は、ホルトガル国民をして、征服と貿易と伝道とのために、無限の国土が其前に開かれたる如く感ぜしめた。海外に於ける活躍に比ぶれば、国民生活の日常の利害は、平凡にして些末なるものとなつた。冒険の気象、乾坤一擲の賭博的気分、乃至宗教的熱情が、ホルトガル人の魂を捉へ去つた。彼等は悉く印度に赴きて此の新しき天地に雄飛せんと欲した。第十六世紀前半に於て、此の小国が示せる企業的精神の旺盛と、英雄的精神の潑剌とは、真に後世をして驚嘆に堪えざらしめるものである。而も是くの如き風潮は、他面に於てホルトガル人に堅実沈着の気象を失はしめた。

もと回教徒の国土たりし南部ホルトガル、即ちアルムテジョ Alemtejo 及びアルガルヴェ Algarve は、多年の戦乱によつて荒蕪の地と化し、つねに回教時代の繁栄に復ることを得なかつた。かくてタグス河南の地は、宗教軍団又は大貴族の領土として、人口稀薄のままに放置された。而して第十五世紀末葉より第十六世紀初頭へかけての大発見は、さなきだに少なき人口の増加を一層阻止した。啻に青年が欣然志願して印度遠征に加はりしのみならず、家を挙げてマデイラ群島に移住するものも多く、一五三〇年以後には、ブラジルにも渡航した。アルブケルケ及び其の後継者は、其の船隊と軍隊とのために、容易に必要なる人員を募集し得た。而して亜細亜に赴ける青年は、或は海上に死し、或は戦場の露と消え、生残れる者も土人女子と結婚して印度に居住し、帰国する者とては殆どなかつた。其上ホルトガル本国に於て連年猖獗を極めし流行病のために、竝に悪政による農民生活の極度の窮迫のために、ホルトガルの人口増加は早くも停止した。

加ふるに母国に残留せる者も、田園に止まりて農耕に従事するは少く、争うてリスボンに集まりて職を求めた。

かくてリスボンは、其の甚だしき非衛生的状態のために、疫病の流行絶ゆる時なかりしに拘らず、その人口は八十年間に三倍した。農民の離村は、急速に増加せる奴隷輸入によつて補充せられたるが故に、大地主即ち王室・宗教軍団・貴族等は、多く痛痒を感じなかつた。コルヴォ J. de A. Corvo によれば、一五三五年以後リスボンへの奴隷輸入は一万人にして、一五七三年にはポルトガル全体への輸入が四万人に達した（註二）。第十六世紀中葉にはリスボンの奴隷人口は、自由民を超過するに至つた。この阿弗利加黒人の増加は、混血其他の理由により、ポルトガル国民の素質を悪化した。

加ふるに奴隷輸入による低廉労働の供給は、自ら大地主の出現を促し、土地の兼併を容易ならしめたので、小貴族又は郷士の産を失ふもの多く、而も彼等は期せずして疾病と罪悪の巣窟たる都会に集まつた。而して彼等は皆な権門の戸を叩きて、国王独占の貿易の余沢に与らんと奔いたので、政府は止むなく彼等を印度に送りて衣食の途を与へねばならなかつた。印度の政費が嵩むのに何の不思議があらう。かくて下層階級は上層階級に頼り、上層階級は国王に頼り、葡国全体が印度貿易に頼つた。而して国内資源の開発は全然閑却せられ、胡椒に非ず、真珠に非ず、黄金にも非ざる国民真箇の富は顧られなかつた。されば一旦貿易が彼等の手より奪はれた時には、彼等は直ちに路頭に迷ふ外なかつた。

ポルトガルに於て商工業の発達せざりし諸原因のうち、最も重要なるもののうちに数ふべきは、一四九九年マノエル王が、スペイン君主フェルナンド Fernando 及びイサベラ Ysabel の第一王女イサベラと結婚し、あはよくば此国の王位を兼ねんと夢みて、スペイン君主を歓ばすため、基督教に改宗せざるモール人及びユダア人を其国より放逐することを彼等に約束せる事である。それは啻にアヴィス王朝の国是たりし、寛容政策を放棄せるもの

なりしのみならず、ホルトガルのために故らに経済的危機を誘発せるものであつた。何となれば当時のホルトガルは、モール人並にユダア人を除けば、商業並に工業を営む知能才幹及び資本を有せるものなかりし故である。ホルトガル人が如何に商業を厭へるかは、一五三五年ベルギー人クレーネール Cleynaerts がエヴォラ Evora より故国に書き送れる書翰中に『若し一群の外国人及びベルギー人が工芸に従事して居なかつたならば、実際吾等は靴工や理髪師にも不自由するに相違ない』とあるによつても知り得る（註三）。一五五一年リスボンの人口は約十万、うち一万は奴隷、七千は外国人にして、彼等は各種の労働乃至手工業に従事してホルトガル人の欠陥を補つて居た。

かくて勤勉有為なるモール人及びユダア人を国外に放逐せることは、ホルトガルに取りて償ふべからざる損失であつた。わけてもユダア人は商才に秀で、一五三六年頃までは、基督教に改宗せるユダア人が、葡国外国貿易の相当なる役割を勤めて居た。彼等はアントワープ Anvers に避難せる『新帰依者』即ち改宗ユダア人と相結び、幾くもなくネザーランドに於ける香料市場の主人公となつた。マノエル王は、リスボン居留の外商に頼るよりも、彼等に頼るを有利と考へて居た。然るに一五二六年ジョアン三世は宗教審問所をホルトガルに設け、曾てマノエル王が『新基督者』は受洗後二十年間は信仰の故を以て糾問せらるることなしとの特権を与へしに拘らず、之を取消してユダア人迫害を新にした。されば一五七八年セバスティアン王が胡椒貿易を賃貸せし時、之を請負へるは最早ホルトガル・ユダア人に非ず、ニュルムベルク Nürnberg の一豪商であつた。

突如勃興せる海外の活動と、国内の利益と一致せしむることは、真に全く新しき重大問題なりしが故に、ホルトガルの政策に種々なる欠点ありしことは当然であり、弊害の簇出は終に避け難くあつた。さり乍ら、仮令後来

の競争者のために容易に其の地位を奪はれ、同時に国運の衰微を招いたとはいへ、少くとも百年に亘りて印度洋に君臨せることは、偉大なる功業と呼ぶを妨げぬであろう。

〔註一〕 João de Barros はポルトガルのリヴィと呼ばれ、マノエル王及びジョアン三世の眷顧厚かった。リヴィに倣へる其著『亜細亜』は最も重要なる印度発見並に征服史である。Luis de Camões は、ヴァスコ・ダ・ガマの遠征を主題とせる長詩 Os Lusiadas の作者。此の長詩は Sir Richard Burton の傑れたる英訳がある。

〔註二〕 A. G. Keller : Colonisation, p. 111. Boston, 1908.

〔註三〕 De Reiffenbeg : Coup d'oeil sur les relations qui ont existé jadis entre la Belgique et le Portugal, p. 49.

第六章　ポルトガルのブラジル植民

第一節　ブラジル発見と其の初期

若しポルトガルにして真個の植民国なりしならば、印度よりも一層大なる利益を収め得べかりしブラジルは、既に一言せる如くカブラルの発見にかかる。マノエル王の命令によつて印度に向へるカブラルが、西方に見知らぬ陸上を認めたのは、一五〇〇年四月二十一日のことであつた。彼はヴェルデ岬群島を過ぎたる後、或る史家によれば東風に吹流されて、また或る史家によれば自ら針路を西に取りて、遠く海上に出で、見失へる一船を探しつつありし間に、全く偶然の機会によつて図らず此地を発見せるものである。

初めカブラルは、岸に砕くる波高くして上陸するを得ず、北緯十五度の海岸に到りて一港湾を発見し、之をポルト・セグロ Porto Seguro と名づけた。彼は此地に上陸し、ホルトガル王の名に於て之を占領し、十字架を樹ててサンタ・クルス Santa Cruz の名を此国に与へた。此名は其後永く公けの国号として用ゐられて居たが、後に此地に多量に産するブラジル樹に因んで、ブラジル国と呼ばれるやうになつた。カブラルは此国が肥沃にして水に富み、住民は温順にして敵意なく、喜んで果実と水とを彼の船隊に供給せるを見た。彼は直ちに己れの発見の価値を認め、一船をリスボンに帰らしめて此事を報告せしめ、且ホルトガル語を習得せしめるため一土人を船中に伴はしめた。而して彼自身は、慣例によつて同伴せる死刑囚二名を土語習得並に事情調査のために此地に残したる後、五月三日去つて印度に向つた。

マノエル王は、此の報告を得て大に喜び、一五〇一年及び一五〇三年、フロレンス人アメリゴ・ヴェスプッチ Amerigo Vespucci の指揮の下に二探険船隊を派遣した。この勤勉なる探険家は、ラプラタ La Plata 河に到るまでの海岸線を殆ど隈なく調査し地図を作製した。而も此の探険家も、また之に次ぎたる他の探険家も、唯だ肥沃なる土地あることを告ぐるのみなりし上、当時ホルトガル上下の全関心は亜細亜の発見征服に注がれて居たのでブラジルは殆ど棄てて顧られなかつた。やがて此国にはコルテス Cortes がメキシコ Mexico に於て発見し、ピザロ Pizaro がペルー Peru に於て発見せる如き、富有なる都市と強大なる王朝なきことが明白となり、従つて有利なる貿易の希望も無くなつた。而も若しブラジルの真実が当初より知られて居たならば恐らくスペインは容易に之をホルトガルに与へなかつたであろう。蓋し最初にブラジルを発見せるは、コルムブスの第一次航海に同伴せるヴィセンテ・ヤネース・ピンソン Vicente Yañez Pinzon である。彼は一四九九年十一月中旬、ヴェルデ

岬より西南に航して大西洋を横ぎり、一五〇〇年二月、ペルナムブコ Pernambuco の聖アウグスティン岬に上陸した。それより北航してアマゾン Amazon 河口、ギアナ Guiana 諸川河口、オリノコ Orinoco 河口を経てパリア Paria 湾に達し、三十名の土人及び若干の染料木を携へてスペインに帰つた。此船にもアメリゴ・ヴェスプッチが乗組んで居た。スペイン君主は一五〇一年九月五日の勅令により、新発見地の開拓並に統治の権利をピンソンに与へたが、彼は此の権利を用ゐんとしなかつた。此国の価値が知られざりし故に、スペインも強ひて其の権利を主張せず、ホルトガルは之を自国領土としたとは言へ、積極的に力を此地に注ぐことなかつた。

かくて南米大陸は、奥地の探険も行はれず、移民の計画も立てられなかつた。唯だ毎年一回二隻の船が派遣せられ、罪人と醜業婦を此地に移し、鸚鵡や種々の木材、わけてもブラジル樹を積んで帰つた。唯だ極めて少数ではあるが、マデイラ島及び北部ホルトガルの農民が、自ら進んで一家を挙げてブラジルに移住し、好むところの土地を択んで農耕に従事した。而して宗教的迫害に苦しめるユダア人もまた此地に避難した。また一五一〇年難船してバヒア Bahia に上陸せるディエゴ・アルヴァレス Diego Alvarez は、土人を懐柔して此地に土着し、後に本国に向つて移民を送らんことを求めた。併し乍ら本国は、此等の処女植民地に向つて何等援助を与ふることなく移住者を取締る法律を制定することもなかつたので、彼等は自ら思ふがままに振舞ひ、殊に土人を虐使した。如何に本国がブラジルを無視したかは、此国より生薑をホルトガルに輸入した時、政府は印度貿易を害するの故を以て、之を禁止したことによつて知り得る。

ホルトガル国王の注意を最初にブラジルに向はしめたのは、夙くより此地に着目せるフランス人の活動であつた。その活動が次第に猛烈となるに及んで、ジョアン三世は少なくもブラジルに対する外国の侵略を防がんと決

心し、一五二六年一船隊を派遣してパヒア湾内の仏船三隻を拿捕し、ペルナムブコに要塞を築かしめたが、幾くもなく司令官クリストヴァン・ジャスケス Christovão Jasquez は本国に召還せられ、船隊は他に差向けられたので、要塞は仏国船舶のために破壊された、此間クリストヴァン・ジャスケスは、リスボンに於て国王に対し、南米海岸をば自己の力を以て植民し得る領主に世襲采邑として分与し、マデイラ及びアソーレス両群島と同一方法を以て開発すべきことを建議したが、国王はつひに耳を傾けなかつた。

既にして一五三〇年に至り、スペインがラプラタ地方に豊富なる鉱山を発見せりとの報道あり、且つブラジルもまた金銀宝玉に富むとの噂が一時に弘まつた。人々はペルーが貴金属に富むことを知れるが故に、此噂は容易に信ぜられた。いまや一攫千金を夢みる冒険者が、欧羅巴諸国からブラジルに渡り初めた。而して此等の外人と均衡を保たしめるため、ポルトガルからも移住者を送り初めた。此年ジョアン三世はマルティン・アフォンソ・デ・ソーサ Martin Affonso de Sousa に五隻の船艦と四百の兵を与へて南米に派し、移民並に冒険者の渡航によつて増加しつつありしブラジル人の上に主権を確立し、且その統治について準備する所あらしめんとした。デ・ソーサは後に印度総督となれる賢明なる政治家であつた。彼は先づペルナムブコに於て若干仏船を拿捕し、次でディエゴ・アルヴァレスの開拓地を訪ひて其の成功を目撃し、一五三一年リオ・デ・ジャネイロ Rio de Janeiro の良港に達し、堅塁を此地に築いて土人と友好関係を結び、八月サン・パウロ São Paulo に達した。此地には既に若干の葡人が移住して居た。彼は更にラプラタに向つたが、風波のために船を回し、サン・ヴィセンテ São Vicente 湾 (São Paulo) に二植民地を創設した。此間彼の弟ペドロ・ロペス Pedro Lopez は、ブラジルの北方海岸を巡航し、またもやペルナムブコを占領せる仏人を駆逐し、一五三三年兄弟相前後してリスボンに帰つた。

第二節　ブラジルの統治

さてポルトガル国王はソーサ兄弟の報告を聴取したる後、往年クリストヴァン・ジャスケスの建言せる統治案を接用し、ソーサ兄弟の意見をも参酌して、マディラ・アソーレス両群島の領主制度をブラジルにも布くことにした。此序を以て吾等は葡国最初の植民地に行はれし此の制度について略叙して置く。

マディラ及ビアソーレスに於て、其の土地は当初より貴族に分与せられ、その貴族は終身又は世襲の領主Donatario 兼知事 Capitão としてその開拓に従つた。此等の領主は極めて重大なる犯罪の場合を除き、民事並に刑事上の司法権を有して居た。土地は総て彼等の所有であるが法律又は彼等に賦与せられし特許状の定むるところに従ひて、植民者に之を分与した。水車を建てる建利、一定価格にて塩を販売する権利も彼等の独占であつた。第十五世紀に於て領内の一切の産物について十分一税を徴収したが、第十六世紀に至りては、国王のために徴収せる租税の十分一又は二十分一を取得することとなつた。第十五世紀末葉まで、此等の領主は其の領土に於ける殆ど絶対の君主であつた。国王に属する租税を徴収し、又は之を監督する財政官吏以外には、如何なる常駐官吏も居なかつた。唯だ僧侶のみは彼等の裁判を受けず、従つて彼等に反抗することが出来たので、夙くから両者の間に激しき対立があつた。

然るに第十六世紀初頭に至り、領主の権能は、国王の任命せる官吏が、領主自身のそれに代れることによつて次第に制限されて来た。かくの如く政府の権力が植民地に及び初めたのは、此の時代に於けるポルトガル中央集権の強化に伴へるものである。大貴族より司法権を奪へるジョアン二世の改革は植民地にも及ぼされた。其後更

に監察官 Corregedor の任命を見るに及び、領主の自治権は一層制限された。此の官吏は、第十五世紀に於て、ポルトガル本国に於ける領主・裁判官・市当局者の権力濫用を防ぐために設けられたものであるが、当初は終身官として貴族を任用したので、十分に設置の目的を遂げ得なかつた。ジョアン二世は其の欠陥を除くために、王室に忠誠なる法律家を監察官に登用することとし、ジョアン三世は一五二七年更に此の改革を完成した。そは能く領主の専横を抑へて植民地の発達に貢献した（註一）。

アソーレス群島内では、テルシエラ Terciera 及びサン・ミゲル São Miguel の両島が主として開拓せられ、第十六世紀後半には両島の白人人口は各一万を算へ、農業も次第に発達して小麦・家畜・染料木等を輸出し、イベリア半島と亜米利加の間を往復する西葡両国の船舶に食料品を供給した。全群島よりの国王の収入は一五三〇年に約一万ミルレイス（約三十万法）、一五八二年には三万ミルレイスに達した。マデイラ群島の発達は一層著しく、その面積は前者の三分の二に過ぎぬけれど、一五五七年には前者と同額の収入を国王に与へて居た。その砂糖と葡萄酒とは、共に品質の優良を以て欧羅巴に鳴つた。此等の群島及びサン・トメ島よりの王室収入を合すれば、一五八五年には十六万ドウカット（約百七十万法）に達した。右の外に年額約五百万法をリスボンに輸出して居たので、一五六二年には之による関税収入が二万ミルレイス（約五十万法）であつた。島々の面積を考ふれば、そは印度貿易に比べて非常なる利益をポルトガルに与へたものと言はねばならぬ（註二）。

その行政上に幾多の欠陥あり、その経済政策には弊害ありしに拘らず、能く如上の発達を見るを得たる半封建的制度を、今やポルトガルはブラジルにも適用するに決した。即ちブラジルを赤道に並行する線によつて十五区に分ち、六百乃至千二百方リーグの面積を有する十二の采邑となし、世襲領主を之に封じた。国王は関税、重要

物産の独占、一切の貴金属の五分一、一切の物産の十分一に対する権利を留保し、ドナタリオ（受贈者の意味）と呼ばれし領主は、国王に属する貴金属・宝石の五分一税並に其他の物産の十分一税の一割、魚漁並にブラジル樹よりの収入の五分を与へらるる外、製塩・水車等の独占を許され、自己の力を以て其の領土を開発すべしとされた。此等の領主は、基督教に改宗せざる土人を奴隷とすることを許された。また単りポルトガル人のみならず万国の天主教徒は皆なブラジル移住を許された。但し外国人は土人との交通を禁ぜられ、またポルトガル人は無税なるに対し、彼等の貿易は一割の関税を徴収された。

さてブラジル諸采邑の歴史は、決して華々しいものでなかつた。十五区のうち実際経営されたのはサンヴィセンテ（南緯二十四度）よりイタマラカ（南緯八度）に至る半分だけであつた。其上領主の或者は海上に難船し、或者は開拓を始めた後に土人との衝突によつて事業を放棄した。但しマルティン・アフォンソ・デ・ソーサは、一五一七年其の死するまで熱心に彼の領地サン・ヴィセンテの開拓に努めた。彼自身は印度総督として東洋に赴任したので、自ら現地を指導し得なかつたけれど、屢々移民及び物資を送り、定着者には広き土地を与へた。此処では主として西阿弗利加より輸入せる黒奴を使役して原始林を開拓し、マンディオカ・玉蜀黍・バナナ・煙草・棉花の外に、マデイラより移植せる甘蔗の栽培に努力した。かくして一五四五年には、島の北部にはサントスSantos市が建てられ、陸地には一五五四年エスイト僧侶によつてサン・パウロ市が建てられた。而して白人と土人女子との同棲によつて、早くも混血種が出来た。サン・ヴィセンテに隣れるサン・アマロ São Amaro 采邑では移民が常に土人に襲はれ、為にサン・パウロに逃避せねばならなかつた。エスピリト・サント Espirito Santo 采邑も、土人の反抗と多数重罪人の渡来とによつて衰微した。ポルト・セグロにはスペイン人の移民多く、漁猟

とブラジル樹伐採とによつて稍々成功した。イレーオス Ilheos では大規模の甘蔗栽培を試みたが、代官と移民とが不和なりしため成功しなかつた。而してペルナムブコでは甘蔗及び棉花栽培が成功し、繁栄をサン・ヴィセンテと競ふに至り、一五三五年にはオリンダ Olinda 市が建てられた。かくて十五采邑のうち稍々成績の見るべきは僅に三、而も其の発達は極めて遅々たるものであつた。サン・ヴィセンテさへも、植民開始後十四年に漸く白人六百を数へ、一五五〇年全ブラジルを通じて白人及び黒人を併せて僅に五千人を算へるに過ぎなかつた（註三）。

ブラジルに於ける領主制度の根本欠陥は、その采邑の区劃が全然無方針に行はれたことに在る。諸采邑は、何等気候風土乃至地理上の要件を顧慮することなく、唯だ不完全極まる地図に基き、机上に於て人為的に分割された。本国より来る移民は諸采邑に分散し、各采邑に於て領主の指定せる諸地点に配置された。かくして植民的努力は、適宜に選択せられたる少数の中心に集注される代りに、各種の不便と危険とに曝さるる多数の小さき植民的中心を生じた。其上領主に与へられし権能は甚だ大なりしを以て、移民は其の専横に苦しみ、然らざる采邑に於ても、土人との争闘が常に繰返され、そのために発達が阻害された。加ふるにフランスが、ブラジルに対する侵略の意図を放棄せんとしなかつたので、ジョアン三世も一層力を此地に注ぐことに決し、まづバヒアを其の領主より買収し、要塞を此地に築きて全ブラジル統治の中心たらしめんとし、此の目的のためにトメ・デ・ソーサ Thomé de Sousa をブラジル総督に任命した。

一五四九年トメ・デ・ソーサは、多数の総督府官吏、兵士六百、四人四百、竝に伝道の目的を以て渡航する一群のエスイト僧を乗せたる六隻の軍艦を率ゐてバヒアに着任した。彼は有為なる政治家であつた。彼は領主等の

政治に対して無用の干渉を避けたけれど、其の不正なる又は残酷なる行動は厳格に之を罰した。彼は閑却せられし王室の利益を図るに努めた。彼は諸采邑がそれぞれ一独立国の観を呈し、相互の間に何等の連絡なく、時としては互に反目抗抗するを見、中央政府の強化によつて之を統一し、一致協同に導かんと努めた。彼はバヒア湾頭にサン・サルヴァドル São Salvador 市を築いて之を総督府所在地とし、且軍隊の本営とした。

彼の当面せる最も重大なる問題の一は土人の処置であつた。ホルトガル人は土人を奴隷に使役せんとしたが、土人は猛烈に之に反抗したので、采邑と其の背後地との境界に於て、絶間なき闘争が行はれた。土人は積極的に白人農場を襲ふこと稀であつたが、その奥地進出に対しては頑強に抵抗し、内地植民を試みたるホルトガル人の小団体は彼等のために虐殺された。トメ・デ・ソーサは、和戦両様の手段を用ゐて此の不断の遊撃戦を絶滅せしめんとした。彼は此の目的のために、最も強硬に敵意を示せる土人に対しては、自ら軍を率ゐて征討を行ひ、之を厳酷に処罰して武威を示すと同時に、一切の助力をエスイト僧侶に与へて、土人の教化に従はしめた。

東洋に於けるエスイトの活動が功罪相半せるに対し、ブラジルに於ける彼等の事業は、最も尊敬に値するものであつた。基督教の宣伝は、土民を征服する上に於て、ソーサの剣よりも遥に有力であつた。エスイト僧侶は土民の間に住居し、其の言葉を習得し、布施其他の手段によつて、わけても音楽歌謡によつて彼等を誘致し、之を天主教に入らしめ、農耕の道を教へ乍ら次第に教化の歩みを奥地に進めた。この土民の迅速なる教化は、幾多の好結果を生んだ。之が為に南米に於けるホルトガル植民地では、北米に於ける英国植民地に見たるが如き惨憺たる土人との戦争から免れた。之に反して北米には見るを得ざりし土人との混血種が生じた。加ふるにブラジルに於ては、印度に於て基督教の勢力を弱め、土民の反感を激成したる宗教審問所の設置を見なかつた。その理由

は一にして止まぬであらうが、スティーヴンは主として其功をソーサに帰して居る。即ちソーサは、宗教審問所が設置せられるならば、植民地の発達に偉大なる貢献をなしつつある『新基督者 Novaes Christiaos』即ち改宗ユダア人が必ず迫害せらるべきを察し、且ブラジル移民の多数が此の制度に対して深刻なる憎悪の念を抱けるを知り、国王に向つて切に其の非を説き、若し強ひて宗教審問所をブラジルに確立せんとするならば、強力なる軍隊の背景を必要とすることを力説したので、国王は遂に之を断念した（註四）。

ソーサが正当に認識せる如く、初期のブラジル開発はユダア人の勤勉と才能とに負ふところ多かつた。この所謂新基督者は、宗教審問による迫害の身辺を脅すや、相率ゐてブラジルに渡つた。ブラジルに於ける彼等の自由なる生活は、マノエル王によつて国外に放逐せられし非改宗ユダア人をも此地に誘致した。多くの場合に於て然る如く、彼等自身は富裕ならずとするも、能く融通の途を知つて居た。而して新植民地に最も必要なる資本を齎した。初めてマデイラより甘蔗を移植し、つひに砂糖をブラジルの主要物産たらしめたのも彼等であつた。また土人を奴隷として使役することの不可能なるを見て、ギネア海岸より直接黒人をブラジルに輸入し初めたのも、また実に彼等であつた。

かくの如くトメ・デ・ソーサは、初代総督として見事なる成績を挙げた、一五五三年彼の後を継ぎたるドゥアルテ・ダ・コスタ Duarte da Costa は、植民地の有力者並に僧侶が彼の人物に服せざりしとは言へ、ソーサの方針を継承してブラジルに臨んだので、その在任中に白人移民の数は倍加した。其後もブラジルの状態は、仮令甚だ遅々たるものなりしとは言へ、順調に発達を続けた。

ブラジルは農業植民地として、多年その主要物産は砂糖とブラジル樹であつた。甘蔗は上述の如くユダア人に

よつて移植されたのであるが、甘蔗栽培及び製糖業は順調に発達し、良好なる利益を挙げた。一五八〇年バヒアは製糖所五十七、ペルナブコは五十を有し、一五八五年叙上両采邑よりの砂糖輸出額は約十五万アロバ（約二百二十万瓩）に達し、一アロバ約千二百ミルレイスとすれば約四百万法の価格であつた。其外にブラジル樹の輸出額も相当に大にして、一五八五年国王のブラジルよりの収入は十五万ドゥカット（約百五十万法）であつた。而して毎年四十五隻の船舶が、砂糖及びブラジル樹輸送のために本国との間を往復した。此外オレンジ・レモン・椰子・ココア・茶も良く発育した。ヴェルデ岬群島より輸入せられし牛馬もまた繁殖した。後に印度の没落顕然となりてよりは、ブラジルの価値愈々認められ、その母国との貿易額は、母国と全欧諸国との貿易額に匹敵するに至つた（註五）。而して外国人は若干の法律によつて貿易上不利の地位に置かれたが、其等の法律は禁止的のものならざりし故、第十六世紀中葉以来外国人並に其の商館の数も次第に増加した。

ブラジルの土はペルーの土と同一なりとして、此地に金銀を産出すべきことは夙くより予想されたが、その発見は、第十七世紀末年のことであつた。それ故ブラジルは約二百年間純然たる農業植民地として発達を続けた。此間の歴史は、政治的には殆ど何等述べるに足る事柄なく、唯だ著明なる出来事として挙ぐべきは、土人問題と外国の侵略とである。

（註一） Lannoy : Ibid., pp. 80—90.
（註二） 〃 : 〃 pp. 202—204.
（註三） Zimmermann : Ibid., I, 119.
（註四） Stephen : Ibid., pp. 232—233.
（註五） Paul Leroy-Beaulieu ; De la colonisation chez les peuples modernes. 6e Ed. Paris, 1903 I, p. 53.

ブラジル植民者は当初より低廉なる労働を必要とし、其為に土人を奴隷として使役した。土人は此の苦役と屈辱とを免れるため、死を以て戦つた。而してエスイト僧侶は、深く土人に同情して植民者の残虐を非難した。然るに白人の多数は、労働に不足し、且概ね黒人を購ふ資力を有たなかつたので、土人の奴隷使役禁止は、彼等の事業の発展を阻止するものとなし、極力之に反抗した。かくて植民者の経済的利害と宗教家の人道的努力とは夙くも衝突し、両者の葛藤がブラジル史の多くの頁を埋めることとなつた。

この問題については両者とも本国に訴ふるところあつた。而して幾多の紛糾を重ねたる後、一五六五年国王によつて任命せられし会議に於て、下の如き決定を見た。即ち土人に関する一切の事件を処理する特別の官吏を任命すること。官憲の許可なくして土人を売買し得ざること。黒人は土人女子と結婚し得ざること。土人が僧侶指導下の農園に逃込める場合は、若し該土人の主人が其の所有権を明示するに於ては之を其の主人に還附すること。僧侶指導下の農園に住む土人が、植民者の雇傭に応ずると否とは本人の自由たるべきこと。区裁判官は四箇月毎に僧侶指導農園を巡回し、法律の励行を監視し、争議を解決すること。以上の決定に於て、植民者が奴隷所有権を立証することは不可能であり、また僧侶指導農園内の土人が、出でて植民者のために労働するが如きは、決して在り得べからざることなれば、エスイト僧侶は大に此の決定を喜び、植民者は憤慨した。

次で一五七〇年政府は更に法律を発布し、政府が正当と認めたる戦争による捕虜以外は、一切土人を奴隷とす

Watson : Ibid, II. 109.

第三節　ブラジルに於ける土人問題

ることを禁じた。植民者は之を以て彼等の大部分より労働力を奪ひ、植民地全般の収入を激減せしめ、其の発達を阻止するものとして猛烈に反対した。よつて政府は或程度の奴隷売買を許し、唯だ其の虐使を禁ずる方針の下に、一五七四年更めて勅令を発布した。之によれば基督教に帰依して教団の農園に居住する総ての土人は自由民とされた。但し此処を逃亡して一年以上を経過せる者、非改宗土人にして正当なる戦争に於て捕虜となれる者、及び二十一歳以上の土人にして、正当なる方法によつて購買せる者は、之を奴隷とすることを許された。其他の方法によつて奴隷とせられ、官庁に登録せられざる土人は、総て解放されることとなつた（註一）。

かくの如く両者は常に対抗し、政府は宗教家の建言を容れて土人に有利なる法律を布いたに拘らず、ブラジルには之を強行する権力なく、且植民者の必要と自肆とが殆ど法律を空文に帰せしめた。蓋し農場の発達と共に奴隷の必要もまた加はり、南部に於ては阿弗利加の黒人狩が屢々行はれた。奴隷としての苦役に堪え兼ねたる土人は、相次いで死亡した。初めエスイト僧侶は沿海土人を集めて農園を造り、其の教化に努めたが、此等の農園は白人植民者の劫掠によつて順次荒廃に帰した。かくて第十六世紀末葉には、土人は夙くも沿海地方に其の影を潜め、僧侶は改宗者を求め、土人狩は奴隷を求めて、次第に奥地に進んで行つた。而して土人狩に於て最も勇猛残酷なりしはサン・パウロの所謂パウリスタ Paulista 人であつた。サン・パウロは気候風土が良好なりし故、夙くより葡・仏・西・英、あらゆる国民の集合地となつて来たが、彼等と土人女子との結合によつて、その乱暴なる父に輪をかけしパウリスタ人が生れた。彼等の念頭には国家なく、法律なく、真に御し難き人間ではあつたが、ブラジルが其の領土を奥地に拡めたことは、最も痛烈に対峙したるエスイト教師とパウリスタ人とに負ふものである。彼等の残酷は土人を憤激せしめ、一五九二年より、一五九九年に亘る前後七

年の戦闘となり、村落の荒廃に帰せるもの約三百、殺戮又は奴隷とせられし土人は数千に及んだ。エスイト僧侶が殆ど独立国ともいふべき組織をパラグァイに結成したのも、もとパウリスタ人の劫掠に備へるためであつた。此事については後にスペイン植民史を述べる時に詳説する。

植民者は単り土人に対する態度に於てのみならず、その道徳的並に宗教的生活に於て、またエスイト僧侶の非難叱責を免れなかつた。ブラジルが最初囚人と醜業婦の国なりしことを想へば、此事は毫も怪むに足らない。領主制度時代に於ては、掠奪と殺人が尋常茶飯事とされた。而して農場の発達に伴ひ、富を積みたるポルトガル人は甚だしく柔弱奢侈となつた。『繁栄せる植民地では婦人の服装は豪奢を極めた。農場主の妻女は、絢爛たる刺繍・真珠・ルビー・エメラルドで飾られたる絹及び繻子の衣服を纏つた。――バヒア婦人の如き、その外出に当りて顛倒を防ぐために、数人の小姓にもたれて歩いたほど柔弱であつた。而して男子は、若し之をしも男子と呼ぶべくんば、自らバヒアの坂路を下り得ず、棒にて吊られし網籠にて運ばれ、一奴ありて日傘を其上に翳しかけた』（註二）。富まざる植民者も、もはや奴隷によらずば生活し得ぬものとなつた。エスイト僧侶の活動によつて、彼等は『薪水の労に服する者なく、土地を耕す奴隷なきに至り、殆ど亡び去らんとした』（註三）。彼等が宗教家に対して反感を強くしたことに何の不思議もない。

かくの如くブラジル農場では、一方土人を奴隷として使役すると同時に、他方ユダア人によつて夙くより黒人が輸入された。黒人は土人に比べて遥に優秀なる労働者であつたが、その高価なりしことが多数の輸入の障礙となつた。但し黒人を奴隷とすることに対しては、エスイト僧侶を初め、如何なる方面よりの反対もなかつたので土人の減少又は解放と共に徐々に増加した。一五八〇年にはペルナムブコに一万、バヒアに二千乃至四千の黒人

奴隷を数へたり。

〔註一〕 Zimmermann : Ibid., I, 128ff.

〔註二〕 Watson : Ibid., II, p. 121.

〔註三〕 〃 : 〃, I, pp. 85—89.

第四節　ブラジルに対する外国の侵略

年を経るに従つて、ブラジルは欧羅巴諸国の侵略の目標となつた。諸国は次第に西葡両国に対する羅馬法王の庇護を蔑視し初めた。其上彼等は、西葡両国の海軍に対する畏怖の念を失つた。かくて彼等は先づ大西洋方面に於て西葡両国の領土を侵さんとした。中にもフランスは夙くよりブラジルに着目し、ポルトガルが此の国土を閑却して居たころから頻りに其の沿岸に活動したが、一五五五年に至り、仏国新教徒の為に自由の天地を与へんと考へたるコリニー Coligny 提督の後援の下に、ヴィルガニョン Villegagnon が船隊を率ゐてリオ・デ・ジャネイロ湾に到り、爾来彼の名に因んでヴィルガニョンと呼ばるる湾内の一島に堡塁を築き、本土に植民地を創設しかけた。然るに植民者の間に内訌を生じたので、一六五〇年ポルトガル人はヴィルガニョン島の要塞を破つて之を破壊し、一五六五年には本土に於ける仏人植民地を征服し、此地にサン・セバステアン São Sebastião 市を建てた。一五六八年仏人は又もやリオ・デ・ジャネイロ湾に現れて葡人を襲つたが、此度もまた撃退せられ、そのブラジル発展に止めを刺された。

其後フィリペ二世がポルトガル国王を兼ねるに及び、スペインと不倶戴天の敵なりしイギリスは、屢々ブラジ

ルの沿海地方を劫掠した。一五八二年、一五八六年の侵劫に次で、一五九四年のそれは被害最も甚だしかつたが英人は未だ曾てブラジルに対して領土的野心を抱かなかつた。

一切の外国の侵略のうち最も危険なりしはオランダ人のそれであつた。一五八〇年以前は、スペインは蘭葡両国の共通の敵であつたが、今や西葡合邦によつて昨日の味方が今日の敵となつた。東印度会社によつて偉大なる成功を東洋に収めたるオランダは、一六二一年更に西印度会社を組織し、ブラジル征服を其の主要目的の一とするに至つた。蘭人のブラジル経略の歴史は之を後章に詳述すべく、此処では唯だポルトガルが幾多の曲折の後に之を奪回し、一六六一年の条約により、オランダはブラジルに対する一切の権利を放棄したことだけを指摘して置く。

オランダとの抗争に当り、ブラジルは殆ど母国の援助なくして此の有力なる侵入者を撃退したので、従来有せざりし力の自覚と統一の意識とを感ずるに至つた。そはブラジルに取つて極めて意義あることであつた。加之、オランダはブラジルを欧羅巴に紹介した。彼等の商業的活動によつて、ブラジルの砂糖とラムとが欧洲市場の日常貨物となつた。彼等はまた干拓、土木事業等によつてブラジルを利したが、文化的には其の二十五箇年の支配の間に如何なる影響をも及ぼさず、彼等の一度び去るや、信仰・言語・風俗の上に如何なる感化の跡をも遺さなかつた。